



TITLE:

後漢鏡銘集釋

AUTHOR(S):

「中國古鏡の研究」班

CITATION:

「中國古鏡の研究」班. 後漢鏡銘集釋. 東方學報 2011, 86: 201-289

ISSUE DATE:

2011-08-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/147959>

RIGHT:

後漢鏡銘集釋

本稿は、後漢鏡の銘文集成と注釋である。紀年銘鏡は別稿にゆだね、四句未滿の短銘は省略した。鏡の時期は岡村秀典(一九九三)の三期編年にしたが、い、「前漢鏡銘集釋」と同様に三桁の數字で表示した銘文番號の百の位が時期をあらわしている。

漢鏡五期(四六種) ……一世紀中葉―後半

漢鏡六期(一五種) ……一世紀末―二世紀前半

漢鏡七期(四六種) ……二世紀後半―三世紀初頭

後漢鏡と三國鏡との區分は、漢から魏に王朝交替した二二〇年を基準とするが、鏡の様式をそのように截然と分けることはむずかしい。徐華芳(一九八四)のように建安元年(一九六)から三國代とする意見もある。ここでは鏡の製作地を便宜的に四川・徐州・江南の三地域に大別し、過渡期にあたる徐州系の畫像鏡・同向式神獸鏡・四獸鏡・斜緣神獸鏡、江南系の重列式神獸鏡は漢鏡七期に、四川系の方銘獸紋鏡・三段式神獸鏡、江南系の對置式神獸鏡・同向式神獸鏡は三國鏡にふくめることにした。

定型化した漢鏡銘については、樋口隆康(一九五三)が年代順の

「中國古鏡の研究」班

すぐれた分類をおこない、林裕己(二〇〇六)がそれを改訂している。これに該當する銘文については、注にその型式名を記した。

參考文獻の表記法は「前漢鏡銘集釋」に準據する。頻出する出典は略稱を用い、卷號と圖版番號を併記した。それ以外の參考文獻は「」に著者名と發表年を記した。

句讀は、押韻または叶韻しているばあいは句點の「。」、そうでないばあいは讀點の「、」とした。韻部はおもに王力の説にもとづく郭錫良(一九八六)によるが、問題のあるばあいはカールグレン(Karlsen 1984)や藤堂明保(一九六五)の説などを併記した。

銘文の用例については、中央研究院歷史語言研究所のデータベース「簡帛金石資料庫」を利用した。そのうち鏡銘は、同研究所の林素清氏が作成したものである。關連語句の檢索では中央研究院の「漢籍電子文獻 瀚典全文檢索系統」と北京愛如生數字化技術研究中心の「中國基本古籍庫」を利用した。

本集釋は岡村が全體をまとめ、漢鏡七期の徐州系については森下章司が分擔した。ほかに班員として共同作業に参加されたのは、安

藤房枝、諫早直人、金文京、佐野誠子、下垣仁志、原田三壽、廣川守、福田美穗、光武英樹、向井佑介、山泰幸の各位である。

一 漢鏡五期

●五〇一

尙方作竟大母傷。

巧工刻之成文章。

左龍右虎辟不羊。

朱鳥玄武順陰陽。

子孫備具居中央。

長保二親樂富昌。

宜侯王兮。

尙方鏡を作るに、大いに傷母し。

巧なる工は之れを刻み、文章を成す。

左龍と右虎は不祥を辟く。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

子孫は備具し、中央に居らん。

長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。

侯王に宜し。

(注)

林分類のL。小校一五・二八の細線式獸帶鏡にみる。漢鏡四期の銘文四四九を繼承し、その第一句「尙方御竟」、第三句「辟不詳」、第四句「調陰陽」をそれぞれ一字ずつ改めている。四字になった末句をのぞけば、整った七字句で、「傷」・「章」・「羊」・「陽」・「央」・「昌」・「王」が陽部で毎句押韻する。

第三句の「羊」は「祥」の假借または省字。第四句の「順陰陽」は銘文四四六にあり、「順」は、ととのえる。

長沙市絲茅沖四區三號墓の「尙方」細線式獸帶鏡(湖南・六〇)は、句の順番は異なるものの、第七句まではこれとほぼ同じ句をもち、第八句を

女爲夫人男爲郎。

女は夫人と爲り、男は郎と爲らん。

としている。「夫人」は諸侯の正妻。『禮記』曲禮下に「天子之妃曰、

后。諸侯曰、夫人。大夫曰、孺人。士曰、婦人。庶人曰、妻。」とあり、鄭玄注に「夫之言、扶。」という。「郎」は官名。『漢書』百官公卿表上に「郎掌守門戶、出充車騎、有議郎・中郎・侍郎・郎中、皆無員、多至千人。議郎・中郎秩比六百石、侍郎比四百石、郎中比三百石。」とあり、『續漢書』百官志二に「凡郎官皆主更直執戟、宿衛諸殿門、出充車騎。唯議郎不在直中。」とある。史游『急就篇』卷四に「丞相御史郎中君」とあり、顏師古注に「此即貴人之位也。」という。古樂府「日出東南隅行」(『玉臺新詠』卷二)には「何以識夫婿……十五府小吏。二十朝大夫。三十侍中郎。四十專城居。」とある。漢代の官吏登用は、郡太守や國相から孝廉として推舉されると、まず「郎」に任ぜられ、ついで中央や地方の高官になった。この銘文の類例に銘文四三五の「男爲侯、女嫁王。」がある。

●五〇二

尙方作竟大母傷。

巧又刻之成文章。

八禽九守更爲倡。

壽如大山樂未央。

浮游天下敖四方兮。

尙方鏡を作るに、大いに傷母し。

巧なる工は之れを刻み、文章を成す。

八禽と九獸は更にも倡を爲す。

壽は大山の如く、樂しみ未央きず。

天下に浮遊し、四方に敖ばん。

(注)

安徽省壽州市槐店農中出土の浮彫式獸帶鏡(六安・九九)にみる。整った七字句で、起句の前に小さな「〇」記號があり、「傷」・「章」・「倡」・「央」・「方」が陽部で毎句押韻する。

第二句の第二字はふつう「工」とあるべきところを「又」と記している。誤字であろう。

第三句の「守」は「獸」の假借(李新城・二〇〇六・二二六頁)。馬

王堆帛書『戰國縱橫家書』に「不顧親戚兄弟、若禽守耳」とあるのも同じ。内區を六區畫に分け、四神のうち青龍には一對の龍、白虎には劍を振りかざす人物が對峙し、朱雀は雌雄の鳥、玄武は蟾蜍や鳥とたわむれている。のこる二區畫には、禽獸が闘う場面と一對の獸が鼓瑟を打ち鳴らす場面とがある。この句はそうした情景をあらわしたもののだろう。「倡」は、戯れ歌舞する俳優。『說文』八上に「倡、樂也。从人昌聲。俳、戲也。」とあり、「俳」の段玉裁注に「以其戲言之、謂之俳。以其音樂言之、謂之倡、亦謂之優。其實一物也。」という。漢鏡四期の銘文四〇六に「倡樂陳兮見神鮮」という用例があり、センチュリー・二一の「張氏」畫像鏡には、縦笛を吹き、瑟を弾く女性たちの圖像に「女倡坐」という榜題がある。

第四句は「壽如金石」がふつうである。「壽如大山」はK・一四七や三角縁〇七にみるが、めずらしい。

●五〇三

尙方作竟大毋傷。 尙方 鏡を作るに、大いに傷母し。
商周連出建四方。 商周連出し、四方を建つ。
白虎辟邪居中央。 白虎と辟邪は中央に居る。
子孫煩息富貴昌。 子孫繁息し、富貴昌ならん。
壽如金石。 壽は金石の如し。

(注)

故宮藏鏡・四一の盤龍鏡にみる。内區主紋は對峙する白虎と龍形の辟邪を二組いれる。起句の前に「・」記號があり、「傷」・「方」・「央」・「昌」が陽部で押韻する。

第二句の「商周」は商（殷）王朝と周王朝。王朝が連續して交替することをいう。「四方」は天下。『淮南子』原道訓に「泰古二皇、

得道之柄、立於中央、神與化游、以撫四方。」とあり、高誘注に「四方、謂之天下也。」とある。湖南省長沙出土の「魯氏」浮彫式獸帶鏡（周世榮・一九八六・圖九九）には「浮雲連結□四方」という類似句がある。

第三句の上二字は型流れのため判讀しがたく、圖録は「安癸」と釋したが、類似句からみて、これは「白虎」であり、内區の虎を指しているであろう。

第四句の「煩」は「繁」の假借。『釋名』釋言語に「煩、繁也。物繁則相雜撓也。」とある。「子孫繁息」の用例として『藝文類聚』卷九十八祥瑞に引く『白虎通』に「狐九尾何。狐死首丘、不忘本也。明安不忘危也。必九尾者、九配得其所、子孫繁息也。」とある。

●五〇四

尙方作竟善無傷。 尙方 鏡を作るに、善く傷無し。
六子九孫在中央。 六子九孫ありて、中央に在らん。
左龍右虎辟□□。 左龍と右虎は□□を辟く。
巧工刻之成文章。 巧なる工は之れを刻み、文章を成す。

(注)

嚴窟二中・八五の細線式獸帶鏡にみる。「傷」・「央」・「章」が陽部で押韻する。

第一句の「善無傷」は、銘文五三八に用例がある。

第二句の「六子九孫」はほかに例がない。梁上椿は「六子」を内區主紋を區畫する六乳、「九孫」を鈕座の九小乳を指すとするが、むしろ銘文四一八の「八子九孫治中央」と同じように多數の子孫を意味するのであろう。第三句の未讀字は「不祥」とあるべきだが、字形はそれとはちがっている。

●五〇五

尙方作竟大母傷。

巧工刻之成文章。

左龍右帟辟不羊。

朱鳥玄武順陰陽。

子孫備具居中央。

長保二親樂富昌。

壽敝金石如侯王。

青蓋爲志何巨央。

(注)

尙方鏡を作るに、大いに傷母し。

巧なる工は之れを刻み、文章を成す。

左龍と右虎は不祥を辟く。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

子孫は備具し、中央に居らん。

長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。

壽は金石と敝し、侯王の如し。

青蓋の志を爲す、何詎ぞ央きん。

林分類のL。五島美術館藏の傳岐阜縣大野町城塚古墳出土の鍍金

細線式獸帶鏡にみる〔笠野毅・一九九三^a〕。出土古墳は六世紀に下り、踏み返しの可能性があるが、原鏡は漢鏡五期でまちがいない。第七句までが銘文五〇一とほとんど同じで、そこに例のない第八句を加えている。整った七字句で、「傷」・「章」・「羊」・「陽」・「央」・「昌」・「王」・「央」が陽部で毎句押韻する。

第八句は、「青蓋」の志が大きいことを自讃したもの。笠野毅は「何巨」を同音同義の反語の「何詎(遠)」、「央」を對轉の「惡」の假借とし、「青蓋の志を爲す、何詎ぞ惡からん。」と讀む。しかし、「央」を「惡」と讀みかえなくとも、「青蓋の志をなすや、どうして央きることがあろうか」という反語の意味で十分に理解できる。「青蓋」は本鏡の製作者であり、このとき「青蓋」はまだ尙方に所屬していた。官營工房の「尙方」から「青蓋」が自立する過渡期のものであろう。

●五〇六

青蓋作竟大母傷。

巧工刻之成文章。

左龍右帟辟不羊。

朱鳥玄武順陰陽。

子孫備具居中央。

長保二親樂富昌。

壽敝金石如侯王兮。

(注)

青蓋鏡を作るに、大いに傷母し。

巧なる工は之れを刻み、文章を成す。

左龍と右虎は不祥を辟く。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

子孫は備具し、中央に居らん。

長く二親を保ち、樂しみ富み昌えん。

壽は金石と敝し、侯王の如し。

林分類のL。湖北省鄂州市鄂鋼六三〇工地(鄂城・二四)や小校一五・五八の盤龍座細線式獸帶鏡などにみる。「傷」・「章」・「羊」・「陽」・「央」・「昌」・「王」が陽部で毎句押韻する。

第一句の「青蓋」をカールグレン(K・二二〇)は緑色の吉祥なる金屬をあらわす「青羊(祥)」とする。あるいは『續漢書』輿服志上に「皇太子・皇子皆安車、朱班輪、青蓋、金華蚤、黑櫛文、畫幡文輶、金塗五末。皇子爲王、錫以乘之、故曰王青蓋車。」という「青蓋」か。笠野毅(一九九三^a)は作鏡工房の商號と考える。兩説を斟酌すれば、「青蓋」は吉祥語を雅號とする工房名とみなしうるだろう。笠野はまた「青蓋」を西晉・太康二年(二八二)神獸鏡の「吳郡工清羊造作之鏡」の「清羊」と同じ商號で、吳郡の工房と推測したが、本鏡の漢鏡五期とは二〇〇年あまりの時間差があり、その所在地を特定することには疑問がある。本鏡が「尙方」細線式獸帶鏡に後續し、「尙方」から「青蓋」が分立したことからみれば、「尙方」と「青蓋」はともに淮河流域に所在した可能性が高い(岡村・二〇一〇)。

●五〇七

青蓋作竟自有紀。

青蓋 鏡を作るに、自づから紀有り。

辟去不羊宜古市。

不祥を辟去し、賈市に宜し。

□□□□壽命久。

□□□□、壽命久し。

保子宜孫得好。

子を保ち孫に宜しく、好き(所)を得。

爲吏高官車生耳。

吏、高官と爲りて、車に耳を生ぜん。

(注)

古鏡・中一四(K・一四二)の細線式獸帶鏡にみる。起句の前に「・」記號があり、「紀」・「市」・「久」・「耳」は之部で押韻し、幽部の「好」と叶韻する。

第一句は漢鏡四期の銘文四二九に「泰言之始自有紀」に由來し、第二句は同種の銘文四三〇・四三二にみえる。

第三句の不明四字は「長保二親」か。K・一四一は「青蓋作」の類似句をもつが、第三句は「長保二親利孫子」となる。

第四句は六字句となる。「得所好」(銘文二〇二)の「所」字を脱したのだろう。これを銘文五三〇では「宜孫保子兮。得所欲」と改變している。

第五句の「車生耳」は、耳のある車に乗るほど出世する意。『御覽』人事部に引く應劭『漢官儀』に「里語云、仕官不止車生耳也。」とあり、崔豹『古今注』に「文武車耳、古重較也。文官青耳、武官赤耳。」という。また、『詩經』衛風・淇奥の「寬兮綽兮、倚重較兮」に毛傳は「重較、卿士之車。」といい、鄭箋は「較、古嶽反。車兩傍上出軾也。」という。

●五〇八

田氏作竟大母傷。

田氏 鏡を作るに、大いに傷母し。

新有善同出丹陽。

新たに善き銅有り、丹陽に出づ。

凍治銅錫清如明。

銅錫を鍊治するに、清にして明なり。

得此竟家賞千万。

此の鏡を得る家は千萬を賞はらん。

(注)

河南省南陽市百里奚出土の浮彫式獸帶鏡(趙世綱・一九六〇)にみる。「傷」・「陽」・「明」が陽部で押韻するが、第四句の「万」は元部で韻をふみはずしている。

第一句と第二・第三句との組合せは、句の順が異なるが、銘文四四六に「新有善銅出丹陽。凍治銀錫清而明。尙方御竟大母傷。巧工刻之成文章。」とあった。第二句の「新」は王莽の新王朝を指すが、後漢代に下る本鏡では「新たに」という副詞であろう。

第三句の「如」は「而」の假借。銘文四三八の注を参照。

報告は第四句を「得此竟□□千万」と釋したが、未讀の二字は「家賞」と讀める。「得此竟」に近い例に元和三年(八六)浮彫式獸帶鏡の「有此竟延壽未央兮」がある。「千萬」の用例には銘文五三八に「家當大八千万」があるが、ここでは四字十三字として讀んだ。「万」は「萬」の古字。銘文四一七の注を参照。

●五〇九

陳氏作竟大母傷。

陳氏 鏡を作るに、大いに傷母し。

漢有善銅出丹陽。

漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

和以銀錫清且明。

和するに銀錫を以てし、清にして且つ明なり。

左龍右虎主四彭。

左龍と右虎は四方を主る。

朱鳥玄武順陰陽。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

(注)

湖北省鄂州市廟鵝嶺村出土の浮彫式獸帶鏡(鄂州・六三)にみる。

起句の前に「…」記號があり、「傷」・「陽」・「明」・「彭」・「陽」が陽部で押韻する。

漢鏡四期の銘文四三九に「陳氏作」の第一句を加えたもの。第二句の「漢」は後漢王朝。「丹陽」は『漢書』地理志にいう丹陽郡で〔富岡・一九二〇・二六頁〕、班固の自注に「故鄣郡、屬江都、武帝元封二年（前一二一）更名丹陽、屬揚州」・「有銅官」という。銘文四三八の注を參照。

第四句の「四」は、漢鏡四期では「三」と表記していた。「彭」は「方」の假借。銘文四三九に同じ。

小校一五・四二の盤龍鏡は同じ「陳氏」の制作で、つぎの三句かなる銘文をもつ。

陳氏作竟大毋傷。

陳氏鏡を作るに、大いに傷毋し。

上有天守去不羊。

上に天獸有り、不祥を去く。

家當大富樂未央兮。

家は大富に當たり、樂しみ未央だ史きず。

第二句の「天守」は「天獸」。内區に對峙する一對の龍を指しているのであらう。第三句の「家當大富樂未央」はほかに銘文五一四の「張氏」鏡などにみる。

●五一〇

陳氏作竟日有熹。
令人陽遂貴復富。

陳氏鏡を作るに、日ごとに喜び有り。
人をして陽遂げ令め、貴く復た富まん。

□□細守各自治。

□□四獸あり、各おの自づから治まる。

左有青龍來福祐。

左に青龍有りて、福祐を來たす。

白虎居前□白事。

白虎は前に居り、□事を白す。

鳳□□□□□□□。

鳳□□□□□□□。

□□□造工□□。

□□□造工□□。

（注）

河南省洛陽市孟津鐵爐出土の浮彫式獸帶鏡（洛陽・三六）にみる。未讀字が多い。起句の前に「…」記號があり、之部の「熹」・「治」・「祐」・「事」と職部の「富」が叶韻する。

第一句の「日有熹」は漢鏡二期から四期に用いられた。七字句の例として銘文四一四に「角王巨虛日有熹」がある。

第二句の「陽遂」は、本來は火おこしの鏡をいうが、ここでは陽氣がきわまる意。陸心源『千甌亭古磚圖釋』卷一の延熹四年（二六二）銘磚に「延熹四年太歲在辛丑、萬世老壽、陽遂富貴」とあり、陸心源は前漢・焦延贛『易林』遯之蹇の「逢時陽遂、富且尊貴」を引いて、富貴が火のようにさかんな意と解釋する。永壽三年（二五七）安國祠堂題記（永田・七六）の「陽遂富貴、此中人馬、皆食大倉、飲其江海」や端方『陶齋吉金錄』卷六の銅洗の銘文に「萬歲富貴陽遂」とあるのも同じ。

第三句を報告は「□□細守名目治」と釋すが、「名目治」では意味が不明。「守」は「獸」の假借（銘文五〇二の注を參照。藤堂（一九六五・No.一九九）說では「細」は「四」と同じ單語家族であるから、「細守」は「四獸」であらう。本銘の末三字は字形から「各自治」と讀め、開明堂・三四の浮彫式獸帶鏡の「上有六獸各異名」という例を參考にすれば、これは「上に四獸有り、各おの自づから治まる」と復元できる。

第四・第五句を報告は「左有青龍來福、右白虎居前□」と對句の六字句に釋す。しかし、ここでは七字句として「左有青龍來福祐。白虎居前□白事。」と釋しておく。「祐」と「事」は之部で、押韻にも問題はない。「福祐」は神のたすけ。『漢書』王嘉傳に「順天人心、以求福祐」とある。

第六・第七句を報告は「風□爲□□異□□象□□造工勝」と釋す。第一字は寫眞では「鳳」のようにみえる。末句末字の「勝」は蒸部で押韻しないし、字形も異なる。その前の「工」は「巧」の省字「𠂔」のようにもみえる。いづれにせよ、この三字は工人名ではなく、鏡が巧みに制作できたことをいうのであろう。

本鏡は主紋に四神・仙人・蟾蜍をいれ、外區には、蟾蜍のいる月をいだく朱雀、五銖錢紋をいだく青龍、烏のいる太陽をいだく玄武、五銖錢紋をいだく白虎が配されている。

●五一

侯氏作竟大毋傷。

巧工刻之成文章。

左龍右帟辟不陽。

七子九孫居中央。

夫妻相保如威央兮。

(注)

湖南省常德市東江一號墓出土の浮彫式獸帶鏡〔湖南省博物館・一九八一a〕にみる。第四句までが銘文五〇一の焼き直して、「傷」・「章」・「陽」・「央」・「央」が陽部で毎句押韻する。

第三句の「陽」は「祥」の假借。

第四句は、漢鏡四期では「八子九孫治中央」や「子孫備具居中央」がふつうだが、本銘の「七子九孫」や銘文五〇四の「六子九孫」はめずらしい。

第五句の「威央」は「鴛鴦」の假借。藤堂・No一八七は「威」は「溫」と同じ單語家族で、『廣韻』は「鴛」には「溫」と同聲の又音があるというから、「威」は「鴛」と同音であった。「央」は「鴛」

の省字である。ただし、李新城〔二〇〇六・二六九頁〕は「鴛鴦」と同義としながら、假借とみることに慎重である。銘文五二六に「夫妻相重、甚於威央」、湖南省益陽市出土の「李氏」浮彫式獸帶鏡〔周世榮・一九八六・圖九二〕に「夫妻相愛如威鴛」という類似句がある。また、居攝元年（後六）連弧紋銘帶鏡には「夫妻相喜、日益親善」、漢・焦贛『易林』晉之晉に「甲兵解散、夫婦相保」とあり、前漢末期のころから重んじられた夫婦觀念を反映したものであろう。鈕座の乳帶には「宜侯王。樂未央。富貴昌。」という三字句をいれ、陽部で毎句押韻する。

●五二

張氏作竟大毋傷。

長保二親樂未央。

八子九孫居高堂。

左龍右帟主四旁。

朱鳥玄武仙人羊。

爲吏宜官至侯王。

上有辟邪去不陽。

從今世昌。

(注)

湖南省張家界市（舊大庸市）四畝塘一一號墓出土の浮彫式獸帶鏡〔湖南省文物考古研究所ほか・一九九四・圖二二〕にみる。起句の前に「・」記號があり、「傷」・「央」・「央」・「堂」・「旁」・「羊」・「王」・「陽」・「昌」が陽部で毎句押韻する。

第二句の「長保二親」は漢鏡四期に出現し、銘文全體の韻字が陽部であれば「樂富昌」が後續することが多く、「樂未央」とつづく

張氏鏡を作るに、大いに傷母し。

長く二親を保ち、樂しみ未だ央きず。

八子九孫あり、高堂に居らん。

左龍と右虎は四方を主る。

朱鳥・玄武・仙人は祥なり。

吏と爲れば官に宜しく、侯王に至らん。

上に辟邪有り、不祥を去く。

今從り世よ昌んならん。

のは同時期の「張氏」・「陳氏」・「池氏」浮彫式獸帶鏡や「銅鑿」盤龍鏡などである。

第三句の用例として、漢鏡四期では「八子九孫治中央」がふつうである。「居高堂」は高貴な宮殿に昇る、出世するという意味だが、漢鏡五期の浮彫式獸帶鏡に用いられたためらしい語句である。

第五句の「羊」は「祥」の假借。魏晉一四の銘文にも「左龍右師師子翔」とあり、四種の瑞祥を並列した「朱鳥・玄武・仙人・羊あり」という解釋はむずかしい。

第七句の「辟邪」は銘文五〇四を参照。辟邪は不祥を退ける役目を持ち、「陽」は「祥」の假借であろう。

第八句の類例として銘文四三〇に「從今以往樂乃始」、銘文五一四に「長保二親世世昌」がある。

報告によれば、本鏡の外区には、鳥のあらわされた太陽に「日」、蟾蜍のあらわされた月に「月」という榜題があり、太陽から時計回りに虎、朱雀、璧、九尾狐、虎、月、青龍、魚、璧、虎、鼎豆、三足鳥、玉兔がめぐっている。内区には、車馬出行、狩獵、仙人博奕、奔鹿、走兔、飛禽、羊、虎などの圖像があるという。

同じ「張氏」浮彫式獸帶鏡の銘文をみると、聚英四三・二は、第二句まで同じで、第三句からは「八子百孫居高堂。爲吏宜官至侯王。」となる。廣西自治區梧州市製藥廠後山出土鏡（廣西・五二）も、第二句まで同じで、第三句からは「八子八孫居高堂。爲吏宜王。」と、第四句が三字省略されている。長沙市仰天湖一號墓の浮彫式獸帶鏡（湖南・七四）は、盤龍座が省略され、主紋が五像に減少したものだが、第二句まで同じで、第三句が「八子九孫居高堂兮」となっている。このような「張氏」鏡は、同じ工房で連續してつくられたものであろう。なお、ボストン美術館藏の「陳氏」浮彫式獸帶

鏡（人文研考古資料）は、起句の前に「…」記號があり、外区の日・月・璧の圖像が少し異なるほかは、銘文と圖像紋様が本鏡とほとんど同じである。作鏡者の「張氏」と「陳氏」とは近い關係にあったことがうかがえる。

●五一三

張氏鏡を作るに、大いに傷無し。

白虎青龍辟不祥。

朱鳥玄武順□□。

八子九孫富貴昌。

長保二親樂未央。

宜侯王。

張氏鏡を作るに、大いに傷無し。

白虎と青龍は不祥を辟く。

朱鳥と玄武は陰陽を順ふ。

八子九孫あり、富貴昌んならん。

長く二親を保ち、楽しみ未央だ央きず。

侯王に宜し。

（注）

北朝鮮ピョンヤン市梧野里出土と傳える浮彫式獸帶鏡（梅原考古資料・一三八二／尊古齋・六五）にみる。釋文は梅原にしたがう。「傷」・「詳」・「昌」・「央」・「王」が陽部で押韻する。

第一句の「是」は「氏」の假借。『儀禮』觀禮の「大史是右」の鄭玄注に「古文是爲氏也。」とある。『銀雀山漢墓竹簡（壹）』孫子兵法下の「孫子曰、範・中行是（氏）先亡。孰爲之次。智是（氏）爲次。」や「張遷碑」（永田・一二八）の「張是（氏）輔漢、世載其德」のほか、後漢・三國代の鏡銘にも例が多い。

第二句の「詳」は「祥」の假借で、「辟不詳」は銘文四一六・四四九に例がある。また、「白虎・青龍」の順序は、漢末の重列式神獸鏡に例があるが、漢鏡四期・五期では「左龍右虎」や「倉龍白虎」のように「龍・虎」の順がふつうである。

第三句の不明二字は、ほかの用例からみて「陰陽」であろう。

第五句は「張氏」鏡の銘文五一二と同じ。その注を参照。

●五一四

張氏作竟宜侯王。

家當大富樂未央。

子孫備具居中央。

長保二親世世昌。

爲吏高遷帶青黃。

(注)

張氏 鏡を作るに、侯王に宜し。

家は大富に當たり、樂しみ未だ央きず。

子孫備具し、中央に居らん。

長く二親を保ち、世世昌んならん。

吏と爲れば高遷し、青黃を帯びん。

廣東省韶關市郊八號墓（廣東省博物館・一九六一／圖典・三六四）や

北朝鮮ピョンヤン市貞柏里一三號墓（梅原考古資料・六七）の浮彫式

獸帶鏡にみる。林分類のYの一種。七字句で第一句の下三字が「宜

侯王」となる銘文だが、一型式をたてるほど数は多くない。起句の

前に「・」記號があり、「王」・「央」・「昌」・「黃」が陽部で毎句押

韻する。

第二句の「家當大富」は居攝元年（後六）連弧紋銘帶鏡に「家當

大富、羅常有陳。」という用例がある。「家當大富樂未央」の句は

「張氏」鏡のほかに「華氏」盤龍鏡の銘文五一一八など同時期の鏡に

限定して用いられている。

第三句は銘文四四六・四四九・五〇一などに例がある。

第四句は銘文五一二に「從今世昌」という類例がある。

第五句の「青黃」は印綬の色をいう。『續漢書』輿服志下に「九

卿・中二千石・二千石青綬、……四百石・三百石・二百石黃綬」と

あり、字義どおりであれば二千石以上と四百石から二百石の官吏に

昇進することを意味するが、黃綬の二百石では官秩が低すぎる。

『論衡』別通に「人目不見青黃曰盲、耳不聞宮商曰聾」とあるよう

に色の總稱として用いたのであろう。吳・天璽元年（二七六）の「禪國山碑」に「遂受上天玉璽、文曰、吳眞□帝、玉質青黃」とあるように、良質の玉をいうこともある。

●五一五

池氏作竟大母傷。

天公行出樂未央。

左龍右虎居四方。

子孫千人富貴昌。

(注)

池氏 鏡を作るに、大いに傷母し。

天公 行き出で、樂しみ未だ央きず。

左龍と右虎は四方に居る。

子孫は千人、富貴昌んならん。

河南省新野縣沙堰鄉出土の細線式獸帶鏡（劉紹明・一九九六）にみ

る。起句の前に「・」記號があり、整った七字句で、「傷」・「央」・

「方」・「昌」が陽部で毎句押韻する。

外區に一對の五銖錢紋と「天公」・「何（河）伯」の榜題をもつ畫

像を配する。「河伯」は三匹の魚が引く雲車に乗り、その前に雲氣、

蟾蜍のいる月、雙闕のある天門があり、そこから「天公」の乗る雲

車が二頭の龍に引かれて出行している。その前に五銖錢、雲氣と獸、

三足鳥のいる太陽、二羽の鳥が引く雲車、提燈を手にした羽人の乗

る魚がめぐらされている。第二句の「天公行出」はその外區の圖像

を記したものの。「天公」は天神。『漢書』王莽傳上に「吾、天公使也。

天公使我告亭長曰、『攝皇帝當爲眞。』即不信我、此亭中當有新井。」

とあるのが「天公」の早い用例。

第三句の「居四方」は「主四方」の誤記か。銘文四三九・四四

三・五〇九には「左龍右虎主四方」とある。

第四句の「子孫千人」は子孫が多いことを祝願したのだが、魏

晉〇七など三世紀に下る例がある。

●五一六

池氏作竟有精神。

池氏鏡を作るに、精神有り。

上大山見仙人。

大山に上り、仙人を見る。

持芝草語吾道。

芝草を^とり、吾が道を語る。

此竟好可自保。

此の鏡は好し、自づから保つ可し。

倉龍白虎主除道兮。

蒼龍と白虎は道を^{はら}ふを主る。

長宜子孫保二親。

長へに子孫に宜しく二親を保たん。

宜侯王富貴昌。

侯王に宜し、富貴昌ならん。

(注)

五島美術館藏の浮彫式獸帶鏡〔保坂・一九八六・圖版一二七〕にみる。銘文五一五の「池氏」鏡と紋様構成は類似するが、主紋表現は細線から低い浮彫に變化している。起句の前に「…」記號があり、六字・七字句からなる雜言體は、第三・第五句の末句に「兮」をもち、「神」・「人」・「親」が眞部、「道」・「保」が幽部、「昌」が陽部で、韻文の體をなしていない。

第一句の「精神」は清らかで靈妙なこと。『淮南子』精神訓に「夫精神者、所受於天也。」という。のちの道教文獻であるが、『雲笈七籤』卷五十五「精神」に引く『玉清秘錄』に「夫氣生於精、精生於神、神生於明。故人生本於陰陽之氣、氣轉爲精、精轉爲神、神轉於明。是故不欲老者、當念守其氣、含精神也。今不出其形、合而爲一也。」とある。これに近い鏡銘に銘文四〇九の「服此鏡、得大神。」がある。

第二句は漢鏡四期の銘文四二二・四二四などの「上大山見神人」を模倣したもの。

第三句を保坂〔二九八六〕は「採芝草語吾道兮」と七字句に讀むが、「採」は「持」、「兮」は「此」の誤釋で、第三句は第二・第四

句と同じ六字句である。「持」は、取る。『詩經』周南・采芣に「采芣苢、薄言^と持之」とあり、毛傳に「持、取也。」という。「芝草」は『論衡』佚文に「一莖三葉、食之令人眉壽慶世、蓋仙人之所食。」という。銘文四五二には「徘徊名山采芝草」とあった。その注を參照。「語吾道」はめずらしい。芝草を手にした仙人が蟾蜍に對峙する圖像が主紋の一區畫にあるが、この銘文をあらわしたものは疑わしい。

第五句の類似句として、漢鏡四期の銘文四五二に「左龍右虎辟除道」がある。本鏡では龍と虎が對峙する盤龍座がそれを表現したもののかもしれない。

内區主紋には四神のうち玄武が缺落している。外區には鳥のいる太陽、蟾蜍のいる月、玉勝形の五銖錢紋（厭勝錢）一對が四方にあり、そのあいだに唐草狀の獸紋が配されている。

●五一七

池氏作竟真大巧。

池氏鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

上有王僑赤甬子。

上に王僑・赤松子有り。

令人陽遂不知老兮。

人をして陽遂げ令め、老いを知らず。

(注)

個人藏の浮彫式獸帶鏡（人文研考古資料）にみる。銘文五一六をもつ「池氏」鏡と紋様表現は類似するが、主紋が七像から六像に減少し、表現がやや粗くなっている。起句の前に「…」記號があり、「巧」・「老」が幽部、「子」が之部で毎句叶韻する。

第二句の「王僑赤甬子」は仙人の王子喬と赤松子。内區に西王母らしい坐像に伺候する仙人と逆立ちする仙人の圖像があり、それをあらわしたのものかもしれない。漢鏡四期の銘文四三三には「壽如王

喬赤松子」とあつた。

第三句の類似句に銘文五一〇の「令人陽遂貴復富」がある。「陽遂」については、その注を参照。

●五一八

華氏作竟宜侯王。

家當大富樂未央。

子孫備具居前行。

長保二親、

辟邪含和除凶。

所未得。

仙人王僑赤松子。

食兮。

華氏鏡を作るに、侯王に宜し。

家は大富に當たり、樂しみ未だ央きず。

子孫備具し、前行に居らん。

長く二親を保ち、

辟邪含和し、凶を除く。

未だ得ざる所なり。

仙人の王喬・赤松子あり。

食らふなり。

(注)

湖南省出土の盤龍鏡(周世榮・一九八六・圖九六)にみる。周世榮は第四句以下を「長保二親辟邪、含和除兇所未得。仙人王僑赤松子食兮」と釋讀するが、誤讀である。陽部の「王」・「央」・「行」と東部の「凶」が叶韻し、第六句で換韻して職部の「得」・「食」と之部の「子」が叶韻するのであろう。陽部と東部の叶韻は銘文五四二に、職部と之部の叶韻は銘文五一〇に例がある。

作鏡者の「華氏」はほかに例をみない。秦嘉謨輯補『世本』氏姓篇に「華氏、魯季氏之族公華之後。」とあり、注に「案『史記』、季康子使公華・公賓・公林迎孔子。王符(潜夫論)以華氏次公之氏下、則華氏當即公華後。」という。『魏志』に傳のある華歆は、山東北部の平原郡高唐縣の人。第一・第二句に「〇氏作竟宜侯王。家當大富樂未央。」となるのは、銘文五一四など「張氏」鏡に限定され、

それと近い關係にあつた工房であらう。

第五句の「含和」は、氣を内に藏すこと。『淮南子』秦族訓に「聖人懷天氣、抱天心、執中含和」とあり、班固「東都賦」(文選)卷二に「咸含和而吐氣」とある。

第七句の「仙人王僑赤松子」について、同時期の銘文五一九には「上有王僑赤甬子」とある。「僑」は「喬」である。

●五一九

李氏作之竟誠清明。

服之富貴壽命長。

左龍右虎扶兩旁。

朱爵玄武從陰陽。

單于來臣至漢疆。

子孫蕃息樂未央。

李氏之の鏡を作るに、誠に清明なり。

之れを服せば富貴にして壽命長からん。

左龍と右虎は兩旁を扶る。

朱爵と玄武は陰陽に従ふ。

單于來臣して漢疆に至る。

子孫蕃息して樂しみ未だ央きず。

(注)

北朝鮮ピョンヤン市出土と傳える盤龍鏡(樂浪郡・圖版一三〇七)にみる。龍虎が對峙する内區主紋と外區の獸紋は銘文五二二をもつ「尚方」鏡と類似する。第一句は「作」と「竟」のあいだに「之」字を加えたため八字句となるが、第二句からは整った七字句で、「明」・「長」・「旁」・「陽」・「疆」・「央」は陽部で毎句押韻する。

第一句の第一字「李」を聚英・三七やK・二四〇などは「孚」と誤っている。「作之竟」の類例として西晉「太康二年(二八二)」神獸鏡に「吳郡王清羊造之鏡」がある。

第三句の「扶」は、まもる。『方言』卷十三の「挾、護也。」の郭璞注に「扶挾、將護。」とある。

第四句の第五字を報告は「引」と読み、笠野毅(一九八三)は

「從」と讀む。笠野説にしたがう。

第五句の第五字を報告は「至」とし、聚英・三七は「座」と讀んだ。字形は「至」である。末字はこれまで未讀だが、弓偏は明瞭にのこり、「疆」の假借「疆」であろう。『漢書』司馬相如傳上に「封疆畫界者、非爲守禦、所以禁淫也。」とあり、顏師古注に「疆、讀曰疆。」とある。匈奴單于の「來臣」については『後漢書』南匈奴列傳に「論曰、……宣帝值虜庭分爭、呼韓邪來臣、乃權納懷柔、因爲邊衛。」という用例がある。後漢代の事件としては、同傳に「(建武)二十四年(後四八)春、八部大人共議立比爲呼韓邪單于、以其大父嘗依漢得安、故欲襲其號。於是款五原塞、願永爲蕃蔽、扞禦北虜。」とあり、翌年に「南單于復遣使詣闕、奉藩稱臣、獻國珍寶、求使者監護、遣侍子、修舊約。」とある。本銘文はそれを指しているであろうが、このような史實が具體的に記されるのは後漢鏡ではほかに例がない。

第六句第三字の「番」は「蕃」の省字または假借。「蕃息」は、しげりふえる。『漢書』武帝紀の注に引く應劭の説によれば、武帝の泰山封禪の刻石に「四守之内莫不爲郡縣、四夷八蠻、咸來貢職、與天無極。人民蕃息、天祿永得。」と記されていたという。

●五二〇

成平倚竟兮、

□□未賞□。

□□在左、

白帟居右。

爲吏高升賈萬倍。

長保二□樂無已。

成平の奇鏡にして、

世間に未だ嘗て有らず。

蒼龍は左に在り、

白虎は右に居る。

吏と爲れば高升し、賈は萬倍ならん。

長く二親を保ち、樂しみ已む無し。

(注)

北朝鮮ピョンヤン市梧野里出土と傳える盤龍鏡(樂浪郡・圖一九四)にみる。銘文をふくむ内區の一部が缺損するが、内區主紋は銘文五二二をもつ「尙方」鏡と類似し、本銘の第三句以下はその銘文とほぼ同じである。「右・倍・已」は之部で押韻する。

第一句を報告は「成平造竟眞」と釋したが、第三字は「倚」で「奇」の繁字または假借、第五字は「兮」である。『荀子』儒效の「倚物怪變、所未嘗聞也、所未嘗見也。」の唐・楊倞注に「倚、奇也。」とある。「成平」は『續漢書』郡國志二にみる河間國の屬縣で、故治はいまの河北省交河縣の東北にある。

第二句を報告は未讀だが、「未賞」の二字が残存する。「兮」と「未」とのあいだに「二字、賞」と「在」とのあいだに三字分の缺損がある。銘文五四一に「朱氏作珍奇鏡兮、世間未嘗有。」とあり、本銘の第二句は「世間未嘗有」と復元できよう。「賞」と「嘗」はともに「尙」聲である。末字が「有」であれば、之部で押韻する。意味は銘文五二一・五二二の「世少有」と同じである。

第三句の失われた二字は、銘文五二一・五二二では「倉龍」である。第三・第四句にあるように、本鏡の内區圖像は向かって左に有角の龍、右に虎があり、口を開けて對峙している。

第五句は本鏡をもてば、官吏なら高位に昇進し、商人なら利益が萬倍にものぼることをいう。山東省蒼山縣柞城出土の元和四年(八七)銅壺(劉心健ほか・一九八三)の銘文に「吏人得之、致二千石、古人得之、致二千萬、田家得之、千厨萬倉」という例がある。

第六句の未讀字はほかの例からみて「親」である。「樂無已」は「樂未央」と同じ意味。「長保二親」につづく三字句には、韻字が之部であれば「樂無事」(銘文四一二)、「利孫子」(銘文四三〇)、「壽命

久」(銘文五〇七)となる。「樂無已」の用例として漢・焦贛『易林』乾之履に「快樂無已」がある。

主紋の龍虎の股間に「亘子孫」の三字をいれる。

●五二一

石氏作竟世少有。

石氏鏡を作るに、世に有ること少し。

倉龍在左、

蒼龍は左に在り、

白虎居右。

白虎は右に居る。

仙人子僑、

仙人の子喬あり、

以象於後。

像は後ろに似る。

爲吏高升賈萬倍。

吏と爲れば高升し、賈は萬倍ならん。

辟去不祥利孫子。

不祥を辟去し、孫子に利し。

千秋萬歲生長久。

千秋萬歲も生は長久ならん。

(注)

浙江省上虞縣出土の盤龍鏡(浙江修訂・彩版五六)にみる。内區の圖像表現は銘文五二二の「尙方」盤龍鏡と同じで、本銘の第三句までと第六・第七句がそれと共通する。起句の前に「・」記號があり、「有」・「右」・「倍」・「子」・「久」が之部で押韻し、侯部の「後」が叶韻する。

第一句の「世少有」は「世間に少ししかない、めずらしい」の意で、銘文五二〇に「世間未賞有」とあるのと同じ意味。

内區には向かって左に龍、右に虎が對峙し、足元には羽人が長笛を吹いている。四字句の第二句から第五句に記された「倉龍」・「白虎」・「仙人子僑」は、それをあらわしたものであろう。第四・第五句を圖録は「仙人子僑於後」と釋し、「以象」の二字を脱落している。第五句の「以」は「似」、「象」は「像」の省字または假借。

『列仙傳』卷上にみえる王子喬は「好吹笙作鳳凰鳴」と、笙を吹くとされており、本鏡の圖像はそれとは異なっている。

第六句を圖録は「爲吏高、價萬倍」と釋したが、型流れした第四字はかすかに「升」字と讀める。この句は銘文五二〇にもみえる。

●五二二

尙方作竟世少有。

尙方鏡を作るに、世に有ること少なし。

倉龍在左、

蒼龍は左に在り、

白虎居右。

白虎は右に居る。

爲吏高升賈萬倍。

吏と爲れば高升し、賈は萬倍ならん。

胡虜殄滅去萬里。

胡虜は殄滅し、萬里に去らん。

辟去不祥利孫子。

不祥を辟去し、孫子に利し。

長保二親樂無已。

長く二親を保ち、樂しみ已む無し。

□甥萬人兮。

□男女萬人ならん。

(注)

廣西自治區貴港市深釘嶺三三號墓の盤龍鏡(廣西壯族自治區文物工作隊ほか二〇〇六・圖一八)にみる。七字句を基本とし、起句の前に「…」記號があり、「有」・「右」・「倍」・「里」・「子」・「已」は之部で押韻する。

第一句を報告が「尙方作鏡四方有」と釋するのは誤り。「世少有」は「めずらしい」の意。銘文五二一の注を参照。

第二・第三句にあるように、本鏡の内區圖像は向かって左に有角の龍、右に虎があり、口を開けて對峙している。

第四句は銘文五二〇・五二一と同じ。

第五句の類例に銘文四五四の「胡虜殄滅天下復」がある。「去萬里」はほかに例がない。

「報告は第七句の第一・第二字を未讀。第二字は「男女」の合文「甥」で、子孫が多いことをいうのであろう。

●五二三

尙方作竟佳且好。
子孫備具長相思。
上有神仙采芝草。
令人富貴不知老。

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
子孫備具し、長く相ひ思ふ。
上に神仙有りて、芝草を採る。
人をして富貴なら令め、老いを知らず。

(注)

個人藏(人文研寄託)の浮彫式獸帶鏡にみる。内區を七區畫に分けて四神や神仙などをあらわし、外區は流雲紋となる。幽部の「好」・「草」・「老」は之部の「思」と叶韻する。

第一句の「佳且好」はこれが初出。漢鏡七期に多い。
第二句の「子孫備具」に後續するのは「居中央」がふつうで、「長相思」はめずらしい。ただし、漢鏡四期の銘文四五二に「長相保」という例がある。

第三句の「神仙」は銘文四〇六・四二〇に例があるが、「仙人」がふつう。「采芝草」は銘文四五二に「徘徊名山采芝草」とある。鈕座の四葉紋間に「長宜子孫」銘を一字ずついれる。

●五二四

尙方作竟佳且好。
左龍交右白虎。
前有朱鳥後玄武。
令人富貴宜孫子。
山人王喬赤相子。

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
左龍は交はり、右に白虎あり。
前に朱鳥有り、後ろには玄武。
人をして富貴なら令め、孫子に宜し。
仙人の王喬・赤松子あり。

千秋萬世不知老。 千秋萬世も老いを知らず。

(注)

安徽省合肥市徵收の浮彫式獸帶鏡(程紅・一九九八)にみる。内區に浮彫で四神をあらわし、外區には瑞獸や仙人のめぐる獸紋をいれる。幽部の「好」・「老」は之部の「子」と叶韻し、魚部の「虎」・「武」はこれらと合韻する。

第二句を報告は「左有龍交右白虎」と七字句に讀むが、拓本でみると「有」字は脱落している。釋文にしたがって訓讀したが、龍をのぞく四神はいずれも二字であらわされ、「龍交」は「白虎」と對になる「交龍」の轉倒であろう。天理參考館藏の「尙方」盤龍鏡には「左有交龍右白虎。□有朱鳥后玄武。」とあり、本銘も本來はそれと同文の豫定であつたのだろう。

第五句の「山」は「仙」の省字。「王喬」は「王子喬」、「赤相子」は「赤松子」である。

●五二五

尙方作竟佳且好。
白虎辟邪居中道。
家室富昌宜孫子。
以爲身保。

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
白虎と辟邪は中道に居る。
家室は富昌にして孫子に宜し。
以て身らの寶と爲せ。

(注)

金索六「漢尙方辟邪竟」(K・二三九)の盤龍鏡にみる。起句の前に「・」記號があり、「好」・「道」・「保」が幽部で押韻し、之部の「子」が叶韻している。カールグレン(K・二三九)はすべて押韻するとみなしている。

第二句は本鏡の内區主紋をいう。それは左龍右虎の形式で、「尙

方」盤龍鏡の銘文五二二では「倉龍在左、白虎居右」というから、「辟邪（邪）」は「倉（蒼）龍」にあたる。ちなみに「杜氏」盤龍鏡の銘文五二八・五二九では、雙龍の對峙する主紋を「辟邪・天祿」としている。本鏡は傳統の四神に由來する「白虎」に西域起源の「辟邪」を配したのである。「杜氏」盤龍鏡の銘文五三一に「辟邪天祿居中央」とあり、本銘の「中道」も「中央」の意味。

第三句の「家室」は、夫婦や家族。『詩經』周南・桃夭の「之子于歸、宜其家室」の毛傳に「家室、猶室家也。」とあり、その孔穎達疏は「左傳」桓公十八年に「女有家、男有室。」とあるのを引いて「室家、謂夫婦也。」という。

第四句の「身保」をK・二三九は「身を保つ」と讀むが、銘文四五〇の注に検討したように、「保」は「寶」の假借であろう。また、「身」は、『爾雅』釋詁上に「身、我也。」「躬、身也。」とあり、後者の郭璞注に「今人亦自呼爲身。」とあるから、自分自身の意。

●五二六

尙方作竟大眞工。

嫁入門時殊大良。

夫妻相重、

甚於戚央。

五男三女、

富貴昌清。

（注）

北朝鮮ピョンヤン市貞柏里一三號墓の浮彫式獸帶鏡（梅原ほか・一九五九）にみる。起句の前に小さな「〇」記號があり、陽部の「良」と「央」が押韻し、それに東部の「工」と耕部の「清」が叶韻する。

尙方鏡を作るに、大いに眞に巧みなり。

嫁門に入る時、殊に大いに良し。

夫妻は相ひ重んじ、

鴛鴦より甚だし。

五男三女あり、

富貴にして昌清ならん。

陽部・東部・耕部の叶韻例は銘文四〇三にある。

第一句の「大眞工」は、類例からみて「眞大工」の錯簡であろう。報告は「工（巧）」とする。「巧」は幽部だが、同時期の銘文五一九に「池氏作竟眞大巧」とあり、それにしたがう。

第二句を報告は「嫁入門」と釋したが、「嫁入門」であろう。類似句に銘文六〇六の「善時日家大富。取婦時與衆異。」がある。婚儀に鏡を用いる習俗は、辛延年「羽林郎詩」（『玉臺新詠』卷二）に、金吾が酒家の胡姬に求愛したときの胡姬の歌に「貽我青銅鏡、結我紅羅裾」とあり、唐・段成式の『酉陽雜俎』卷一に「娶婦夫婦併拜、或共結鏡紐」とある。本銘はそうした儀禮が漢代にさかのぼることを示している。

第三句と同じ語句は湖北省雲夢縣出土の浮彫式獸帶鏡（孝感地區博物館・一九九〇）にみえるが、前後の銘文は未讀である。

第四句の下二字を梅原は「戚央」と讀んだが、「戚央」の誤釋で、「鴛鴦」の假借。銘文五一二に「夫妻相保如戚央兮」とあり、その注を參照。

第五句は「五男三女の子どもにめぐまれる」意。銘文五三一に「十男五女」とあり、「五男四女」（K・一三九）や「五男四女凡九子」（K・一四三）などの例があるほか、『周禮』職方氏に「東南曰揚州、……其民二男五女。河内曰冀州、……其民五男三女。」などとする。

●五二七

□月吉日、

造此倚物。

□月吉日に、
此の奇物を造れり。
二姓合好、
二姓は好みを合はせ、

□如□□。
 女貞男聖、
 子孫充實。
 姊妹百人、
 □□□□。
 姊妹は百人、
 □□□□。
 夫婦相□、
 □□□□兮。
 夫婦相ひ□、
 □□□□兮。

(注)

江西省南昌市丁一號墓出土の浮彫式獸帶鏡〔江西省博物館・一九七八〕にみる。報告では「二姓合好、□如□□、女貞男聖、子孫充實、姊妹百人、□□□□、夫婦相□、□□□□陽□□月吉日、造此信物」と釋された。拓本が不鮮明なため、釋文はおおむね報告にしたがうが、整った四字句に句讀を改めた。物部の「物」と質部の「實」とが入聲韻で、偶數句が押韻した可能性がある。

第二句は「造此信物」と釋されたが、第三字は「倚」で「奇」の繁字であろう。銘文五二〇の注を參照。

第三句の「二姓」は夫の家と妻の家の姓。『禮記』昏義に「昏禮者、將合二姓之好、上以事宗廟、而下以繼後世也、故君子重之。」とあり、漢・焦贛『易林』家人之漸に「執斧破薪、使媒求婦。和合二姓、親御斯酒。召彼鄰里、公姑悅喜。」とある。銘文五二六の「嫁入門時殊大良」のように、この句は婚儀のときに本鏡を用いれば、兩家のよしみをあわせることができることを祝頌する。

第七句第一字を報告は「姐」と釋すが、「姊」の簡體字であろう。『爾雅』釋親に「謂女子先生爲姊、後生爲妹」とある。「子孫百人」ではなく、女きようだいの「姊妹百人」というのは例がない。

第九句の類似句として王莽代の居攝元年（後六）鏡に「夫妻相喜」、

同時期の銘文五一に「夫妻相保」、銘文五二六に「夫妻相重」がある。本銘は「夫妻」の誤釋かもしれない。

●五二八

尙方名工、
 杜氏所造。
 凍治銅錫、
 佳而且好。
 辟邪天祿、
 奇守竝□。
 萬里□間、
 □□□有。
 服此鏡者、
 富貴長壽。
 男爲□侯、
 女□□□。
 尙方の名工、
 杜氏の造れる所なり。
 銅と錫を鍊治するに、
 佳にして且つ好し。
 辟邪と天祿と、
 奇獸は竝び有り。
 萬里の□の間に、
 □□□有り。
 此の鏡を服する者は、
 富貴にして長壽ならん。
 男は列侯に爲り、
 女は□□□。

(注)

遼寧省瀋陽市小北街二號墓出土の盤龍鏡〔瀋陽市文物考古研究所・二〇〇六・圖五〕にみる。金代の墓から出土し、漢鏡五期の鏡を踏み返した可能性がある。整った四字句で、起句の前に「…」記號があり、釋讀できる偶數句の韻字のうち、「造」・「好」・「壽」は幽部、「有」は之部で叶韻する。幽部と之部の叶韻は銘文五一四・五一七に例がある。

第一句を報告が「尙方作鏡」と釋するのは誤り。第一・第二句は、尙方工房に所屬する「名工」「杜氏」がつくった鏡であることを宣傳する。尙方の看板を利用した民業である。廣西自治區梧州市旺歩

二號墓の元和三年（八六）浮彫式獸帶鏡（廣西・五一）の銘文も、七字句が多い漢鏡五期のなかではめずらしい四字句を主とするが、そこに「尙方造竟、在於民間」という句があり、尙方における鏡の制作體制が漢鏡五期後半に變質しつつあったことをものかたる。

第四句の「佳而且好」は「佳且好」を四字句にするため助辭の「而」をいれたもの。先行する類似句に銘文四五三の「此有佳鏡成獨好」がある。

第五・第六句の「辟邪」と「天祿」について林巳奈夫（一九七八）は、同時期の盤龍鏡に「辟邪配天祿」という銘文があり、圖像にあらわされている一對の一角龍をそれに比定した。しかし、『漢書』西域傳の「烏弋地暑熱莽平、……而有桃拔・師子・犀牛」の顏師古注に「孟康曰、桃拔一名符拔、似鹿、長尾、一角者或爲天祿、兩角者或爲辟邪。」とあり、「辟邪」と「天祿」は西域の「桃拔（符拔）」という有角の珍獸であつたと考えられる。もともと『後漢書』西域傳に「章帝章和元年、遣使獻師子・符拔。符拔形似麟而無角。」とあり、無角の獸を「桃拔（符拔）」とする説もあつたが、林梅村（二〇〇五）が指摘するように「天祿」は西域の「扶拔（桃拔）」を原形とする「天鹿」であり、本銘や同時期の銘文五四二にあらわれる奇獸の「距虛」・「辟邪」・「獅子」・「天祿」は、すべて班超の西域開拓によつて知られるようになった珍獸であろう。「奇守」は「奇獸」で、めずらしい獸の意（林巳奈夫・一九七八）。第六句の末字は未讀だが、拓本では「有」のようにみえる。押韻でも問題はない。

第七句以下は、字形が不鮮明なため、報告の釋文にしたがう。ただし、第一一・第一二句を報告が「男列侯王、女夫□□子」と釋したのを拓本により改めたが、第一二句は三字不明である。類例として銘文四三三に「男爲侯、女嫁王」、銘文五〇一の注に「女爲夫人

男爲郎」、銘文六〇四の「男封侯女王婦」などがある。

●五二九

遣杜氏造珍奇鏡兮、
世之眇微。

名工所刻畫兮。

陳五解之英華畢。

畢而無極兮。

辟邪配天祿。

奇守竝來出兮。

三鳥與□□□□、

得所欲。

吏人服之曾秩祿。

大吉利。

（注）

浙江省博物館藏の盤龍鏡（浙江修訂・八九）にみる。銘文五二八と圖像表現や紋樣構成が同じで、銘文の字形や「辟邪」「天祿」「奇獸」など特殊な一部の用語が共通することから、同時期に同じ「杜氏」の工房でつくられた鏡であろう。銘文は三字、四字、五字、七字句からなる雜言體で、月部の「微」と質部の「畢」・「利」と物部の「出」、および錫部の「畫」と職部の「極」と屋部の「祿」・「欲」はそれぞれ叶韻し、第八句の韻字が缺損するが、すべて入聲で合韻する。

起句の前に「…」記號があり、冒頭の「遣」は王士倫（一九五七・三七）の釋。「遣」では意味が通らないという陳直（一九六三）の指摘にしたがい、浙江・九二では「上虞杜氏」と改めたが、字形に無

理がある。「遣」は「隨」の假借であろう。『詩經』小雅・角弓の「莫肯下遺」の鄭玄箋に「遣、讀曰隨。」とある。「隨」は漢の南陽郡隨縣で、周の侯國。前漢・御史大夫の杜周は南陽杜衍の人。章和年間「淮南龍氏作」鏡のように、これは地名＋氏名の表記である。銘文五二八では「尙方」の看板を掲げていたが、本鏡ではそれを外して「遣の杜氏」のつくった珍奇な鏡であることを高らかに宣言したのである。なお、「鏡」字が省字の「竟」ではなく、正しく金偏につくるのは一連の杜氏鏡群の特徴である。

第二句を王士倫（一九五七・三七）は「世出眇微」とし、浙江・九二では「世出眇（妙）微」と改めた。『漢書』律曆志の「究其微眇」の顏師古注に「眇、又讀曰妙。」とあるのにしたがったのであろう。寫眞の觀察では「出」は「之」の誤釋で、句末字は「微」とみえる。「微」は『說文』三下の「徹、通也。」によって流通の意味、「眇」は「少」の繁字であり、同時期の銘文銘文五二二の「世少有」や銘文五三〇の「世之未有」と同じ意味であろう。「微」は武帝の諱だが、ここでは避けていない。

第三句の「名工」は、銘文五二八の第一句から「尙方」を落としたもの。「刻畫」は銘文五四二の「刻畫奇守成文章」や章和年間（八七～八八）盤龍鏡の「刻畫云氣龍虎虫」という例がある。

第四句を王士倫（一九五七・三七）は「練五解之英華」と釋したが、陳直（一九六三）の指摘をうけて浙江・九二では「解」を「斛」と改めた。五斛のすぐれた銅原料を精鍊したと解釋したのであろう。「斛」は『說文』十四上に「斛、十斗也。」とあり、約一九・四リットルの容量である。しかし、その字形は「解」が正しく、原料の單位としては容量の「斛」より重量の「斤」や「石」を用いるべきであろう。ここでは、まず句讀について、第四句は「畢」字までの七

字句とし、「畢」字の下には重文符號があることから、第五句は「畢」字を加えた四字句となる。七字句の讀みは「鍊五解之」＋「英華畢」と分けられる。『說文』四下に「解、判也、从刀判牛角。」とあり、上四字は鑛石を五たび鍊り分けて精製したという意味になる。『爾雅』釋詁に「畢、盡也。」とあり、下三字はすぐれた原料に精製しつくしたという意味であろう。

第七句を王士倫（一九五七・三七）は「奇守竝未出兮」と釋し、本鏡の内區にあらわされた一對の龍を第六句の「辟邪」「天祿」にあてて林巳奈夫（一九七八）はそれを「奇守は未だ出現してゐない」と解釋した。しかし、銘文五二八の第五・第六句に「辟耶天祿、奇守竝有」という四字句があったように「竝」は「ならぶ」「みな」という意味であり、「みな未だ出でず」では意味がおかしいから、浙江・九二ではその第四字を不明とした。おそらく「未」は「來」の誤字ないしは誤釋で、銘文五二八と同じように辟邪・天祿・奇獸はみな出現していると解釋すべきであろう。

第八句の「三鳥」は、同時期の盤龍鏡（嚴窟二下・六一）に「辟邪宜□、上有奇守、出中三鳥」という銘文があり、太陽を象徴し、西王母の眷屬でもある三足鳥か。作鏡者の「三鳥」は銘文五四四にみえる。つぎの字は報告では未讀だが、殘劃からみて「與」であり、缺損部には瑞獸か神仙の名があったのであろう。

第一〇句の「曾」は「増」の假借。銘文五三五では「益」とする。その注を参照。

●五三〇

杜氏作珍奇鏡兮、
世之未有兮。

杜氏 珍奇なる鏡を作るに、
世に之れ未だ有らず。

凍五解之英華畢。
畢而無極兮。
鍊ること五たび之れを解くに、英華 畢くせり。
畢きて而かも極まり無し。

上西王母與玉女、
宜孫保子兮。
上には西王母と玉女あり、
孫に宜しく子を保たん。

得所欲。
欲する所を得ん。

吏人服之曾官秩。
吏人 之れを服せば、官秩を増さん。

白衣服之金財足。
白衣 之れを服せば、金財 足らん。

與天無極兮。
天と極まり無からん。

(注)

紹興・五〇やラグレウス舊藏(K・二四八)の浮彫式獸帶鏡にみる。梅原末治(紹興・五〇)の釋讀にしたがうが、句讀は改めた。末句と起句とのあいだに「」記號があり、K・二四八は押韻に言及していないが、之部の「有」・「子」と職部の「極」が叶韻し、質部の「畢」・「秩」、屋部の「欲」・「足」が押韻するほか、「畢」・「極」・「欲」・「秩」・「足」・「極」が入聲韻となる。

第一句は「杜氏」の出自である銘文五二九の「遺」字を省略し、「造」を「作」に改める。

第二句は銘文五二二の「世少有」に類似する。

第五句の「玉女」を紹興・五〇は「王女」とするが誤り。楊雄「甘泉賦」(『文選』卷七)に「想西王母欣然而上壽兮、屏玉女而却宓妃。」とあり、李善注に「言既臻西極、故想王母而上壽、乃悟好色之敗德、故屏除玉女而及宓妃、亦以此微諫也。『山海經』曰、玉山、西王母所居也。『神異經』曰、東荒中有大石室、東王公居之、常與玉女共投壺。宓妃、已見東京賦。」という。内區の一區畫に「西王母」の榜題をもつ坐像と「玉女」の榜題をもつ侍従があり、この句はそれをいうのであろう。

第六句は「宜孫子」と「保孫子」とをあわせた形。銘文五〇七に「保子宜孫得好」とあるのが近い。

第九句の「白衣」は無位無官の庶人。『後漢書』崔駰傳に「帝聞而欲召見之、憲諫以爲、不宜與白衣會」とある。

第一〇句の「與天無極」は漢鏡二期の銘文二二四・二二五に例があるが、それ以後ではめずらしい。

紹興・五〇の内區は、五つの乳で區畫したところに、西王母とそれに仕える玉女、仙藥を搗く一對の羽人、馬に騎乗する神仙、虎に乗る神仙、仙藥を搗く一對の兔を時計回りに配置する。ラグレウス舊藏鏡は、これを踏みかえて圖像の一部を改變したもの。

中國國家博物館藏の浮彫式獸帶鏡(楊桂榮・一九九二・圖九二)は「杜氏所造、長宜子、佳鏡兮樂未央。七子九孫在中央。居無事兮如侯王。大吉利、錢財至。」という類似の銘文がある。

●五三一

杜氏作鏡善母傷。 杜氏 鏡を作るに、善く傷母し。
和以銀錫清且明。 和するに銀錫を以てし、清にして且つ明なり。

名工佳造成文章。 名工は佳く造るに、文章を成す。

辟邪天祿居中央。 辟邪と天祿は中央に居る。

十男五女樂富昌。 十男五女ありて、樂しみ富昌ならん。

居無憂兮如侯王。 無憂に居り、侯王の如し。

(注)

浙江省紹興市漓渚出土の盤龍鏡(浙江修訂・彩版五四)にみる。内區の圖像表現は銘文五二九の鏡と類似し、外區にはそれと同じ獸紋をいれる。起句の前に「」記號があり、「傷」・「明」・「章」・「央」・「昌」・「王」が陽部で押韻する。

第一句の「鏡」は正しく金偏につくる。「善母傷」に近い例として、銘文五〇四に「尙方作竟善無傷」、銘文五三八に「呂氏作鏡善無傷」とある。

第三句を圖録は「□用造成文章」と釋すが、その不明字は一字ではなく、銘文五二九「杜氏」鏡にもみえる「名工」の二字である。それにつづく第三字は「作」のようにもみえる。

第四句の「辟耶」を圖録は「□侯」と誤釋する。つぎの銘文五二九・一と同じで、「天祿」と對になる一角の龍を指している。

第五・第六句を圖録は「十男五女樂無慢兮如侯王」と釋し、「樂」と「無」とのあいだに「富昌居」の三字を読み落としている。後述の「杜氏」畫像鏡の銘文六〇一には「十男五女樂未央。居母事如侯王。」とある。

●五三二

杜氏作竟大母傷。

亲有善銅出丹羊。

凍治銀錫清如明。

左龍右席辟不陽。

長富樂未央。

杜氏鏡を作るに、大いに傷母し。

新たに善き銅有り、丹陽に出づ。

銀錫を凍治するに、清にして明なり。

左龍と右虎は不祥を辟く。

長く富み、楽しみ未だ央きず。

(注)

湖南省耒陽市野・營一號墓の浮彫式獸帶鏡(周世榮・一九八六・圖八〇)である(湖南・七六の長沙市窖藏一號墓出土鏡と同じ)。起句の前に「・」記號があり、「傷」・「羊」・「明」・「陽」・「央」が陽部で押韻する。

第一句の「竟」は「鏡」の省字である。銘文上の一種だが、同じ「杜氏」鏡の銘文五三二では正しく金偏につくっている。

第二句の「亲」は「新」の省字で、「羊」は「陽」の假借である。この「新」は王莽の建てた新王朝ではなく、後漢代に下る本鏡では「新たに」という副詞であろう。銘文五〇八の注を参照。

第三句の「凍治」は「鍊治」、「如」は「而」の假借。銘文五〇八には「凍治銅錫清如明」とあり、ここではその「銅錫」を「銀錫」に改めている。

第四句の「不陽」は「不祥」。

●五三三

佳鏡兮樂未央。

辟耶天祿居中央。

杜氏所作成文章。

服之吉利富貴昌。

子孫備具金甫堂。

傳之後世以爲常。

男封列侯皆令。

佳き鏡なり、楽しみ未だ央きず。

辟邪と天祿は中央に居る。

杜氏の作る所にして、文章成る。

之れを服せば吉利にして、富貴昌んならん。

子孫備具して、金は堂に甫(は)からん。

之れを後世に傳へ、以て常と爲さん。

男は列侯に封ぜられ、皆な令し。

(注)

王趁意(二〇〇二・圖三四)の盤龍鏡にみる。内區の圖像表現は銘文五二九の鏡と類似するが、右の龍の後ろに「杜氏」の名をいれ、外區には獸紋ではなく唐草紋をいれる。起句の前に「・」記號があり、「央」・「央」・「章」・「昌」・「堂」・「常」が陽部で押韻し、耕部の「令」がそれに叶韻した。「佳鏡兮」ではじまり、作鏡者を記す「杜氏所作」が途中の第三句にあるのもめずらしい。

第一句の「鏡」は金偏につくこと、ほかの「杜氏」鏡と同じ。第二句は内區主紋の角をもつ一對の龍を指しているのであろう。第五句の「甫」は、多いこと。『詩經』齊風・甫田の「無田甫田、

維秀驕驕。」に毛傳は「甫、大也。」とあり、『廣雅』釋訓に「甫甫、衆也。」とある。漢鏡三期の銘文三〇二に「錢金滿堂」、同時期の銘文五三〇に「金財足」という類似句がある。

第六句の「以爲常」は、小校一五・三二（K・一六六）の方格規矩四神鏡に「上有仙人以爲常」という例がある。銘文四四九の注を參照。

第七句の「令」は、列侯と並列されるような官位であれば大縣の長官をいう。『漢書』百官公卿表上に「縣令・長、皆秦官、掌治其縣。萬戶以上爲令、秩千石至六百石。」とある。しかし、ここでは「皆令」というので、『爾雅』釋詁に「令、善也。」とあり、『詩經』小雅・角弓の「此令兄弟、綽綽有裕。不令兄弟、交相爲瘡。」の鄭玄箋も「令、善也。」とあるから、「皆な善し」の意味だろう。

●五三四

原夫始萌兮、
五解英華畢。
穴而無極兮、
辟邪宜□、
上有奇守、
出中三鳥、
□□□□。
宜孫保子、
各得所欲。
吏人服之、
胡氏作。

愿みて夫れ明を始む。
五たび英華を解き畢くせり。
わが穴ちて而かも極まり無し。
辟邪は□に宜し。
上には奇獸有り、
中には三鳥を出だし、
□□□□。
孫に宜しく子を保ち、
各おの欲する所を得ん。
吏人 之れを服せよ、
胡氏作る。

(注)

嚴窟二下・六一の盤龍鏡にみる。銘文五二九の鏡と圖像表現や紋様構成が同じで、銘文は四字句に變えているものの、特殊な用語が類似する。起句の前に「…」記號があり、銘文五二九と同じように韻をふみはずすが、「畢」・「極」・「欲」・「作」が入聲韻となる。

第一句の「原」は「愿」の省字または假借で、つつしむ。「萌」は「明」の繁字。あるいは銘文五三〇の「世之未有兮」の別表現とし、「原にして夫れ始萌なり」と讀むのも一案。

第二・第三句は銘文五二九の第四・第五句を改變したもの。第三句の第一字は「分」の古文で、「わかつ」。『說文』二上に「分、分也。从重八。孝經說曰、故上下有別。」とある。原料の鑛石を精と滓とに分けることをいう。

第四句からは「辟邪」「奇獸」「三鳥」など銘文五二九にみた瑞獸が列擧される。

第一〇句は「吏人服之曾官秩」の上四字だけで、第一一句は「曾官秩」にかえて「胡氏作」をいれる。作鏡者名を冒頭に掲げなかったのは、まだそうした先例のない初期の段階であったからだろう。銘文五〇五の最後に「青蓋爲志何巨史」といったのも同じことである。圖像紋様や銘文の類似性からみて「胡氏」も「杜氏」と同じ向方の工人であったのだろう。「胡」姓はめずらしいが、熹平二年（一七三）の五斗米道の「祭酒張普」碑（隸續）卷三に「天老鬼兵」の「胡九」がある。

●五三五

原夫作鏡、
華畢穴而無極兮。
愿みて夫れ鏡を作るに、
華は畢く分ちて極まり無し。

上有辟耶與天祿。

宜孫保子、

各得所欲。

吏人服之益官秩。

白衣服之金財足兮。

胡氏作。

(注)

巖窟・補四一の盤龍鏡にみる。銘文五三四の「胡氏作」鏡とは同じで、起句の前に「…」記號があり、「極」・「祿」・「欲」・「秩」・「足」・「作」が入聲韻となる。

第一句の「鏡」が正しく金偏につくるのも一連の「杜氏」鏡群の特徴である。

第六句の「益」は「増」。『説文』五下に「會、合也。从亼、曾省。會、益也。」とあり、段玉裁注に「土部曰、増、益也。是則會者増之假借字。」という。第六・第七句は銘文五三〇にみえる對句。その注を参照。

●五三六

胡氏作鏡四夷服。

凍五之英華畢。

□□□兮。

上有奇守出中央。

長吏服之益官秩。

白衣服之□□□。

□□□。

上には辟邪と天祿と有り。

孫に宜しく子を保ち、

各おの欲する所を得ん。

吏人 之れを服せば、官秩を益さん。

白衣 之れを服せば、金財 足らん。

胡氏作る。

胡氏 鏡を作るに、四夷服す。

鍊ること五たび之の英華を畢くせり。

□□□。

上には奇獸有りて、中央に出づ。

長吏 之れを服せば、官秩を益さん。

白衣 之れを服せば、□□□。

□□□。

(注)

王趁意(二〇〇二・圖一〇)藏の盤龍鏡にみる。對向する雙龍のあいだに「胡氏」の銘があり、羽人の位置がずれているほかは、銘文五三五の鏡とほとんど同じ紋様構成である。「央」は陽部で韻をふみはずすが、「服」・「畢」・「秩」が入聲韻で叶韻する。

第三句の不明三字は銘文五三五からみて「分無極」であろう。

第四句の類似句として銘文五三四に「上有奇守、出中三鳥」とあり、それが不完全な句であったことがうかがえる。

第五句の「長吏」は銘文五三五の「吏人」と同じだが、漢の縣吏において二百石から四百石までの者をいう。『漢書』百官公卿表上に「縣令・長、……皆有丞・尉、秩四百石至二百石、是爲長吏。百石以下有斗食・佐史之秩、是爲少吏。」とあり、顏師古注に「吏、理也。主理其縣内也。」とある。また、『漢書』景帝紀に「(中元六年)五月、詔曰、夫吏者、民之師也、車駕衣服宜稱。吏六百石以上、皆長吏也。……令長吏二千石車朱兩轡。」とあり、その注に「張晏曰、長、大也。六百石、位大夫。」とある。

第六句の下三字は、つぎの銘文五三七の類似句からみて「宜孫子」であろう。

●五三七

呂氏作鏡樂無亟。

與天相保順陰陽。

長吏服之曾官秩。

白衣服之宜孫子。

上有仙師赤涌子。

呂氏 鏡を作るに、楽しみ極まり無し。

天と相ひ保ち、陰陽を順ふ。

長吏 之れを服せば、官秩を増さん。

白衣 之れを服せば、孫子に宜し。

上には仙師の赤松子有り。

(注)

北朝鮮ピョンヤン市出土と伝える京都國立博物館藏の盤龍鏡〔銘木・一九七一・圖版一二〕にみる。銘文五二九と圖像表現や紋様構成が同じだが、作鏡者が異なり、漢鏡五期ではめずらしい篆書體ふうの銘文である。起句の前に浮彫の鳥紋があり、職部の「亟」は之部の「子」と質部の「秩」と叶韻するが、「陽」は陽部で韻をふみはずしている。

第一句の「鏡」を金偏につくることは一連の「杜氏」鏡群と同じ。圖録は第二句の第四・第五字を不明とするが、殘劃と類似句からみて「保順」であろう。

第三句の「長吏」は銘文五三六の注を参照。

第五句の第六字を圖録は「誦」と釋すが、三水偏につくっている。「涌」は「甬」の繁字で「松」の假借。「赤甬子」は銘文五一七に例がある。仙人の赤松子を「仙師」と呼ぶのはめずらしい。それは内區主紋の雙龍のあいだで笛を吹く羽人を指しているのだろう。

●五三八

呂氏作鏡善無傷。

工右刻之成文章。

左龍有帟辟不羊。

朱爵玄武順陰陽。

八子九孫居中央。

家當大八千萬。

(注)

湖南省常德地區徵集の浮彫式獸帶鏡〔熊建華・二〇〇二〕にみる。整った七字句で、「傷」・「章」・「羊」・「陽」・「央」が陽部で毎句押

呂氏鏡を作るに、善く傷無し。

工之れを刻む有り、文章を成す。

左龍と右虎は不祥を辟く。

朱爵と玄武は陰陽を順ふ。

八子九孫あり、中央に居らん。

家は大いに八千萬に當らん。

韻する。

第一句の「鏡」は正しく金偏につくる。「善無傷」は銘文五〇四に例があり、銘文五三一に「杜氏作鏡善毋傷」という例がある。

第二句の「右」は「有」の假借。

第三句の「有」は「右」の假借。

第六句の「大」を報告は「達」の假借とするが、銘文五一四の「張氏」鏡などに「家當大富」とあり、銘文五〇八の「田氏」鏡に「得此竟家賞千萬」とあることからみて、「大」は「八千萬」を修飾する語であろう。また、銘文四五二に「大利八千萬兮」とあり、「八千萬」は慣用句であつたことがわかる。

●五三九

呂氏作鏡□且明。

上下憲天有大光。

史尹服之壽命長。

八子九孫居中央。

服鏡者奴卑千人、

宜弟兄。

(注)

五島美術館藏の浮彫式獸帶鏡にみる。鈕座の周圍に反時計回りに銘文がめぐる。起句の前に細線の鳥形があり、第五句まで整った七字句で、「明」・「光」・「長」・「央」・「兄」が陽部で押韻するが、第五句の「人」は眞部で韻をふみはずしている。

第一句の「鏡」は正しく金偏につくる。第五字は不明だが、漢鏡四期から五期に頻出する「清且明」の「清」であろう。

第二句の「憲」は「法」である。『尚書』商書・説命中に「惟聖

呂氏鏡を作るに、清にして且つ明なり。

上下 天に憲^とれば、大いなる光有り。

史尹 之れを服せば、壽命長からん。

八子九孫あり、中央に居らん。

鏡を服する者は奴婢千人、

弟兄に宜し。

時憲」とあり、傳に「憲、法也。」とある。「大光」の用例として漢鏡二期の銘文二三七に「見日之陽。天下大光。」がある。この句は銘文四四〇の「法象天地日光」と類似する。

第三句の「史」は「吏」。『說文』一上に「吏、治人者也。从一、从史。史亦聲。」という。「尹」は、長官。『尚書』顧命の「師氏・虎臣・百尹御事」の傳に「師氏、大夫官。虎臣、虎賁氏。百尹、百官之長及諸御治事者。」とあり、董仲舒『春秋繁露』三代改制質文に「名相官曰尹。」という。つまり「史尹」は「下位の吏と上位の官」をいう。

第五句の「服鏡者」と「鏡」をいれたのはめずらしいが、銘文五二八の「杜氏所造」盤龍鏡には「服此鏡者、富貴長壽」という例があった。「卑」は「婢」の省字。「奴婢」は、男のしもべと女のしもべ。『後漢書』馬防傳に「防兄弟貴盛、奴婢各千人已上、資産巨億」とあり、同・寶融傳にも「奴婢以千數」とあるなど、當時「奴婢千人」は富豪の象徴であった。

第六句の「宜弟兄」は銘文二一八・四一〇に既出。銘文二一八の注を参照。

●五四〇

呂氏乍鏡自有紀。
長保二親□孫子。
辟去不羊宜古市。
爲吏高升居人右。
壽如金石。

呂氏 鏡を作るに、自づから紀有り。
長く二親を保ち、孫子に□。
不祥を辟去し、賈市に宜し。
吏と爲れば高升し、人の右に居らん。
壽は金石の如し。

(注)

長沙市劉家沖二號墓の浮彫式獸帶鏡(湖南・七七)にみる。起句

の前に「・」記號があり、「紀」・「子」・「市」・「右」が之部で押韻する。

第一句の「乍」は「作」の省字。銘文五三七と同じように「鏡」字は正しく金偏につくる。

第三句は銘文四二九・四三二・五〇七に既出。「羊」は「祥」、「古」は「賈」の假借。

第四句の「爲吏高升」は銘文五二〇・五三二に用例があるが、いずれも「賈萬倍」が後續する。「右」は、高く尊い地位。『史記』文帝紀に「右賢左戚、先民後己、至明之極也。」とあり、『集解』に「韋昭曰、右猶高、左猶下也。」とある。また、『漢書』朱雲傳に「九卿之右」とあり、顏師古注に「右、言在上也。」とある。「右に出る」というように、左より右が重んじられたのである。しかし、「居人右」はほかに用例がない。

●五四一

朱氏作珍奇鏡兮、
世間未嘗有。
白牙鼓鳴琴兮、
子其傷其子。
動弦合商時。
泣下不可止。
僑誦。

朱氏 珍奇なる鏡を作れり、
世間に未だ嘗て有らず。
伯牙は鳴琴を鼓し、
子期は其の子を傷む。
(鍾) 子期は其の子を傷む。
弦を動かして商に合ふ時、
泣下りて止む可からず。
(王) 喬・(赤) 松(子) あり。

(注)

セリグマン舊藏の浮彫式神仙鏡(梅原・一九三三・圖版九九／Hansford 1967: A65)にみる。主紋は五つの圓座乳で區畫し、ハンス・フォードの解説では時計回りに伯牙・成連先生・鍾子期・王喬・赤

松子を配する。圖像の組みあわせとその表現はほかに例がない。起句の前に「…」記號があり、「有・「子」・「時」・「止」が之部で押韻し、第一・第三句には助辭の「兮」をいれる。第二句から第六句まで整った五言句になっているのも鏡銘ではめずらしい。

作鏡者の「朱氏」は漢鏡四期の銘文四一三に「朱氏明竟快人意」とあり、それが「朱氏」の初出である。「鏡」を正しく金偏につくことは、同じ「珍奇鏡」をうたう銘文五二九・銘文五三〇の「杜氏」鏡と共通する。

第二句の「賞」は「嘗」の假借。この字をハンスフォードは「嘗見」の二字とし、「有」の前で句讀したが、字形と押韻のほか、意味からも認めがたい。

第三句はハンスフォードの釋文にしたがった。「伯牙」は琴の名手で、その音をよく理解したのが鍾子期である。内區の圖像では、伯牙は膝に置いた琴を弾きならし、鍾子期は端座してそれに聞きいる姿である。『楚辭』七諫（東方朔）謬諫に「伯牙之絕弦兮、無鍾子期而聽之。」とあり、王逸注に「伯牙、工鼓琴也。鍾子期、識音者也。言鍾子期死、伯牙破琴絕絃、不肯復鼓、以世無知音也。」とある。「鳴琴」は、名琴のひとつ。『韓非子』說林下に文子のことばとして「吾嘗好音、此人遺我鳴琴。」という。重列式神獸鏡の銘文には「白牙單（彈）琴」の語句が用いられ、琴を奏するばあいは「彈琴」の用例が多いが、「鼓鳴琴」は晉・張華「情詩」（『藝文類聚』卷三三閨情所引）に「北方有佳人。端坐鼓鳴琴。終晨撫管絃。日夕不成音。」という例がある。

第四句をハンスフォードは「子期傷面子」と釋した。第二字は「其」と記され、鍾子期の「期」の省字である。しかし、「傷面子」では伯牙と鍾子期との關係からみて理解に苦しむ。字形からみて

「面」は「其」の誤釋であろう。これは父が刑死したため自身と母が公家の奴隸になり、母にも會えなくなった子が夜に磬を奏でたところ、その音を聞いた鍾子期が歎き悲しんだという『呂氏春秋』季秋紀・精通の故事をいうのであろう。

第五句はハンスフォードの釋文にしたがう。應劭『風俗通義』聲音は『尚書』の「舜彈五弦之琴、歌南風之詩、而天下治。」を引き、伯牙と鍾子期の故事を引いて「今琴長四尺五寸、法四時五行也。七絃者、法七星也。」とある。また、『御覽』卷五七九琴下に引く『琴書』は「本五絃、宮・商・角・徵・羽也。加二絃、文武也。」とある。銘文の「商」は、この五音の商聲。五行で金、四時で秋に屬する。阮籍「詠懷詩」（『文選』卷二十三）に「素質遊商聲、悽愴傷我心。」とあり、商聲は銘文二二二の「秋風起」のように秋の悲しさを想起させるのである。

第六句もハンスフォードの釋文にしたがう。「泣」は「涙」。『廣雅』釋言に「泣、涙也。」とある。

第七句の「僑誦」は、仙人の王喬（僑）・赤松（誦）子である。圖像では宙返りをうつ姿であらわされている。

●五四二

龍氏作竟大無傷。龍氏鏡を作るに、大いに傷無し。采取善同出丹楊。善銅を採取するに、丹陽に出づ。

和以良易清且明。和するに銀錫を以てし、清にして且つ明なり。刻畫奇守成文章。奇獸を刻畫するに、文章を成す。

距虛辟邪除羣凶。距虚と辟邪は羣凶を除く。師子天祿會是中。獅子と天祿は是の中に會す。長宜子孫大吉羊。長く子孫に宜しく、大いに吉祥ならん。

(注)

富岡・圖版二四の浮彫式獸帶鏡の外圈銘である。整った七字句で、起句の前に「川」字狀の記號がある。カールグレン(K・一七二)説では毎句押韻するが、王力説では陽部の「傷」・「楊」・「明」・「章」・「羊」、東部の「凶」、冬部の「中」が叶韻する。陽部と東部の叶韻例は銘文二二九・四〇三に例がある。

第一句の「龍氏」は、安徽省壽縣板橋鎮黃安村出土の章和年間(八七〇八八)盤龍鏡(六安・一三五)にいう淮南の鏡工であらう。その銘文は、

隆帝章和時、

隆^{おほ}いなる帝の章和の時、

淮南龍氏作竟、

淮南の龍氏は鏡を作るに、

涑治同。

銅を鍊冶せり。

合會銀易得和中。

銀錫を合會し、中を和するを得。

刻畫云氣龍虎虫。

雲氣と龍・虎・蟲とを刻畫せり。

上有山人壽無窮。

上には仙人有りて、壽は窮まり無し。

長保二親樂不亭。

長く二親を保ち、樂しみ停まらず。

とある。同時期の同一工房の作であるため、本銘と類似する語句が認められる。「同」は東部、「中」・「虫」・「窮」は冬部で、東部と冬部とが叶韻することも本銘と共通する。

第二・第三句は漢鏡四期の銘文四三八に「漢有善銅出丹陽。取之爲鏡清且明。」とある二句を折衷したもの。「丹楊」は「丹陽」郡。『漢書』地理志は「丹楊郡」と表記する。銘文四三八の注を參照。

第三句の「良易」は「銀錫」の省字(K・一七二)。「和以銀錫清且明」という用例は銘文四三九に既出。

第四句は銘文四三九の「巧工刻之成文章」を改めたもの。「守」は「獸」の假借。銘文五〇二の注を參照。各種の瑞獸を「刻畫」し

た用例として、さきの章和年間盤龍鏡のほか、永壽三年(一五七)安國祠堂題記(永田・七六)に「各有立章、調(彫)文刻畫、交龍委蛇、猛虎延視。」がある。

第五句の「距虛」は北方草原地帯の奇獸で、銘文四一四の注を參照。「辟邪除羣凶」について史游『急就篇』卷三に「射魃・辟邪除羣凶」と同文がみえ、顏師古注に「射魃・辟邪皆神獸名也。……辟邪、言能辟禦妖邪也。」という。銘文五二八の注を參照。「師子」は「獅子」である。山東省嘉祥縣の武氏墓地には一對の石獅があり、それにとりまなう石闕には「建和元年(二四七)……孫宗作師子、直四萬」(趙明誠『金石錄』卷十四)という銘文が記されている。本銘にあらわれる奇獸の「距虛」・「辟邪」・「獅子」・「天祿」は、すべて班超の西域開拓によって知られるようになった珍獸であらう。

本鏡の内圈銘は、

上有辟邪交龍。

上に辟邪・交龍有り。

道里通。

道里通ず。

長宜子孫壽無窮。

長く子孫に宜し、壽は窮まり無からん。

とある。起句の前に「…」記號があり、K・八説では「通」と「窮」が押韻する。王力説では「窮」は冬部、「龍」・「通」は東部で、外圈銘とも叶韻する。「交龍」については銘文四二〇を參照。「道里」は、みちのり。『漢書』司馬相如傳下に「道里遼遠、山川阻深、不能自致」とある。K・八は辟邪・交龍のあらわされた本鏡を携帯すれば、旅行が安全であると解釋する。『抱朴子』内篇・登涉に「山無大小皆有神靈、……必有患害。……是以古之入山道士、皆以明鏡徑九寸已上、縣於背後。」というのをふまえたのであらう。

根津美術館藏の「龍氏」畫像鏡(開明堂・四七)は、本銘とほぼ同じ銘文をもつが、第三句の「良易」を「銀易」、第六句を「師子天

祿會聚叢」とし、末句は「長宜子孫兮」で終わっている。漢鏡六期に下るものの、本鏡と同じ「龍氏」工房でつくられたものであろう。

●五四三

龍氏作竟四夷服。

多賀君家人息。

胡羌除滅天下復。

風雨時節五、

官位尊顯蒙祿食。

長保二親樂無已。

龍氏鏡を作るに、四夷服す。

多く君家を賀し、人民息ふ。

胡羌除滅して、天下復す。

風雨時節あり、五（穀熟す）。

官位尊顯し、祿食を蒙る。

長く二親を保ち、樂しみ已む無し。

（注）

小校一五・三六の盤龍鏡などにみる。林分類N。第四句までは王莽代の銘文四五四を踏襲し、督造者／作鏡者の「王氏」を「龍氏」に、「三」を「四」に、「新家」を「君家」に、「胡虜殄滅」を「胡羌除滅」に、それぞれ變更したもの。第四句の末二字「穀孰」が脱落している。職部の「服」・「息」・「食」、覺部の「復」、之部の「已」が叶韻する。

第三句の「胡」は匈奴など北方の遊牧民族、「羌」はチベット系の遊牧民族のこと。後漢代には羌族の侵入が相つぎ、その対策に苦しんだ。「胡羌」の用例としては『後漢書』順帝紀・建康元年條に「使匈奴中郎將馬寔擊南匈奴左部、破之、於是胡羌・烏桓悉詣寔降。」とある。

第六句は銘文五二〇・五二二など漢鏡五期に例がある。

小校一五・三六の「龍氏」盤龍鏡には左龍の胴部に「李世」の二字がある。「龍氏」盤龍鏡には踏み返しとみられるものが多く、これも後刻の可能性がある。とはいえ、盤龍鏡の意匠において「龍

氏」鏡と「李氏」鏡とは關係が深く、「世」は「氏」の假借となる可能性もあり、留意する必要がある。

●五四四

三烏作竟與衆異。

黍子百孫□天力。

貴至三公尙御竟、

壽如金石樂無極。

三烏鏡を作るに、衆と異なる。

七子百孫ありて、天祿を得ん。

貴きこと三公に至らん、尙（方）の御鏡、

壽は金石の如く、樂しみ極まり無からん。

（注）

桃陰・一九（K・二五三）の細線式獸帶鏡にみる。整った七字句で、「異」・「力」・「極」は職部で押韻するが、「竟」は陽部で韻を踏みはずす。この第三句は錯簡であろうか。

作鏡者の「三烏」は姓もしくは「青蓋」と同じような作鏡工房の雅號。『通志』氏族略三に引く『風俗通』に「凡氏於職、三烏・五鹿。有三烏大夫、因氏焉。漢有三烏羣、爲上郡計。」とあり、『元和姓纂』には「三烏。姜姓。炎帝之後、爲侯國、因氏焉。」という。「胡氏」盤龍鏡の銘文五三四には「辟邪宜□、上有奇守、出中三烏」とあり、太陽を象徴し、西王母の眷屬でもある三足鳥のような瑞獸としても用いられている。「與衆異」は『急就篇』卷一に「急就奇觚與衆異」という例がある。

第二句の「黍」は「七」の假借。銘文四二九の注を参照。銘文四一八に「八子九孫治中央」、銘文五〇四に「六子九孫在中央」とあるが、「七子」は銘文五四五に、「百孫」は銘文五一二の注に引いた聚英・四三・二の「張氏」浮彫式獸帶鏡に「八子百孫居高堂」という例がある。「天力」は「天祿」。天から授かった幸福のこと。銘文四二六の注を参照。それには「長保二親得天力」とあり、未讀の第

五字は「得」であらう。

第三句の「貴至三公」はめずらしい。漢鏡六期以降は「位至三公」がふつうである。「尙御鏡」は「方」の脱字である。「尙方御竟」は銘文四四六・四四九など王莽代に例が多く、漢鏡五期には「尙方作竟」に變化している。これが「尙方」の鏡であるならば、「青蓋」が尙方の工房に出自するように、「三鳥」もまた尙方と關係していたのだろう。

●五四五

八維此鏡兮與衆異。

七子九孫各有喜。

宦至公卿中尙寺。

上有東王父西王母。

令君陽遂不知老兮。

(注)

五島美術館藏の盤龍鏡（人文研考古資料）にみる。内區主紋は對峙する龍と虎が二組對置されている。起句を示す記號はなく、ふつう冒頭にくる作鏡者の名もないが、韻字と二つの助辭「兮」からみて「不知老兮」が末句になるのだろう。その韻字は之部の「喜」・「寺」・「母」が職部の「異」や幽部の「老」と叶韻する。之部と幽部の叶韻は銘文五一四・五一七に例があり、之部と職部との叶韻は銘文二〇一の注を參照。

第一句の「八維」は、王延壽「魯靈光殿賦」（『文選』卷十一）の「三閭四表、八維九隅」の張載注に「四角四方爲八維。」とあるように、「天の八方」が本來の意味である。方格規矩四神鏡の内區外周にほどこされた、いわゆる規矩紋のL字形とV字形がそれにあたる。

この「八維」はむしろ『楚辭』七諫（東方朔）自悲に「引八維以自道兮、含沆瀣以長生。」とあり、王逸注に「天有八維、以爲綱紀也。道、一作導。言己乃攀持八維、以自導引、含沆瀣之氣、以不死也。」とあるのに近い。すなわち、「八維」は天の綱紀で、天を象徵するものであり、本鏡はその天を内包しているため、一般に流通している鏡とは本質がちがうのである。「與衆異」は五四四の「三鳥」細線式獸帶鏡に既出。

第二句の「七子」はほかに銘文五四四に「泰子百孫□天力」やセンチュリー・一八の「龍氏」浮彫式獸帶鏡に「七子九孫居中央」という例がある。

第三句の「尙」は「常」の、「寺」は「侍」の省字または假借である。「中常侍」は『續漢書』百官志三に「中常侍、千石。本注曰、宦者、無員。後増秩比二千石。」とある。永平（五八～七五）中にはじめて員數を四人としたが、延平（二〇六）にいたるところには一〇人に増員された。宦官の「中常侍」が皇帝の側近官として權力をふるうようになったのは、一〇歳で即位した和帝のときの鄭衆が最初で、「宮卿」の位にまで昇進した（『後漢書』宦者列傳）。『後漢書』朱穆傳には「案漢故事、中常侍參選士人。建武以後、乃悉用宦者。自延平以來、浸益貴盛、假貂璫之飾、處常伯之任。……臣聞漢家舊典、置侍中・中常侍各一人、省尙書事、黃門侍郎一人、傳發書奏、皆用姓族。自和熹太后以女主稱制、不接公卿、乃以閹人爲常侍・小黃門、通命兩宮。自此以來、權傾人主、窮困天下。」という。本鏡は「中常侍」に出世を祈る最初期の例である。

第四句の「東王父」はこれが初出である。金索六・二四の「張氏」獸帶鏡に「上有天守傳相受。東王父西王母。」という銘文があり、圖像にも東王父と西王母があらわされているが、本鏡の圖像は

龍と虎だけである。

第五句の「陽遂」は銘文五一〇に「令人陽遂貴復富」、銘文五一七に「令人陽遂不知老兮」という例がある。

●五四六

宋氏作竟自有意。

□□□□文字。

采取銅錫與衆異。

服□必尊宜作吏。

子孫備具家大富。

士至公卿中常侍。

辟命迫之誠可喜。

擇時日家大富。

宋氏鏡を作るに自づから意有り。

□□□□文字。

銅と錫を採取するに、衆と異なる。

服者必ず尊ばれ、吏と作るに宜し。

子孫備具し、家大いに富まん。

仕ふれば、公卿・中常侍に至らん。

辟命之れに迫まり、誠に喜ぶ可し。

時日を選べば、家大いに富まん。

(注)

小校一五・五五の盤龍鏡にみる。銘文五二九と主紋の表現や構成が同じだが、左右が逆になり、外区は鋸齒紋である。一八〇〇年ごろ阮元が手拓したもので、その注記も小校に収録されている。釋文はおおむね小校にしたがう。「意」「異」「富」「富」は職部、「字」「吏」「侍」「喜」は之部で、毎句叶韻する。

第一句の「意」について笠野毅(二九八〇)は、『禮記』少儀の「毋測未至」の鄭玄注に「測、意度也。」とあり、『漢書』貨殖傳の「意則屢中」の顏師古注に「意、讀曰億。」とあるのを引いて、未來を豫測することと解釋した。

第二句は三字不明とするが、四字不明のようにみえる。

第三句の「采取銅錫」の類似句として銘文五四二の「龍氏作」浮彫式獸帶鏡の「采取善同出丹楊」がある。「與衆異」は銘文五四四

の細線式獸帶鏡と銘文五四五の盤龍鏡に例がある。

第四句の第二字は未讀だが、「者」のようにみえる。

第六句の「士」は周制では最下層の役人にあたる。「宋氏」畫像鏡の銘文六〇六はこれを「宦」とし、「宦」は「仕」であることから、「仕」の省字であろう。

第七句の「辟命」は皇帝や三公などからの辟召。『爾雅』釋詁に「辟、君也。」とあり、『後漢書』宣秉傳に「王莽爲宰衡、辟命不應。」とある。後漢以後に用いられた語。

第八句の「時日」は、良時吉日。『禮記』曲禮上に「卜筮者、先聖王之所以使民信時日、敬鬼神、畏法令也。」とある。小校はつづく字を「衆」と釋したが、「家」の誤釋であろう。「宋氏」畫像鏡の銘文六〇六に「善時日家大富」という例があり、「家」の字形が近似する。

二 漢鏡六期

●六〇一

杜氏作鏡清且明。

名工所造成文章。

服此鏡富壽昌。

十男五女樂未央。

居母事如侯王。

杜氏鏡を作るに、清にして且つ明なり。

名工の造れる所にて、文章を成す。

此の鏡を服せば、富み壽は昌んならん。

十男五女あり、樂しみ未だ央きず。

事母きに居り、侯王の如し。

(注)

合肥市安徽省水電倉庫工地三號墓の畫像鏡(程紅・一九九八・圖三)にみる。鈕座の圓圈に銘文をめぐらす。起句の前に「…」があり、「明」・「章」・「昌」・「央」・「王」が陽部で毎句押韻する。

然後脩火之利、范金」とあり、鄭玄注に「孰冶萬物」とある。銘文四三四の「凍冶銅華去惡宰」のように、鑛滓を鍊冶することをいうのか。しかし、鍊冶ののちに鑄型を刻畫するのがふつうであるから、第二句と第三句とは錯簡か。

第五句の「東公西母」は、東王公と西王母。「山」は「仙」の假借または省字。銘文四五二・四五三に「上有山人不知老」、銘文五二四に「山人王喬赤相子」、銘文五四二に「上有山人壽無窮」という例があり、ここでは「東公西母」にならって仙人を「山」とあらわしたのであろう。圖録は下二字を「獨藥」と釋すが、「獨」は「擣」の誤り。「擣」は、手でうすづく。『說文』十二上に「擣、手椎也。」とある。また、『儀禮』有司徹の『釋文』に「擣、劉本作搗。」とあり、「搗」の假借でもある。ただし、本鏡には搗藥する仙人の圖像はない。

第六句を圖録は末字の「則」しか正しく読んでいない。上四字は「朱鳥玄武」であり、下三字は「臨旁則(側)」であらう。「臨」の字形は「般」のようにもみえる。「般」は、あそぶ。朱雀・玄武の圖像は、内・外區ともにあらわされていない。

第七句を圖録は「昌女□□方□」と讀む。「昌」は「倡」の省字で、西王母の右側に立つ侍女の圖像を指しているのであろう。つぎの二字は讀めないが、東王公・西王母の侍従をいうものか。「方」は「于」の誤釋。末字は「瑟」。「瑟」は弦の多い大きな琴で、管弦樂の合奏に用いられることが多く、この時期を境に瑟よりも獨奏する琴が好んで用いられるようになる。「鼓」は銘文五四一に「白牙鼓鳴琴兮」とあり、樂器を弾き鳴らすこと。東王公の後ろで瑟を弾く人物の圖像があり、それを指していったものであろう。

第七句を圖録は「里」の一字しか読んでいない。「窮倚」の「倚」

は「奇」の繁字。銘文五二〇の注を參照。「窮奇」は天神の名で、『淮南子』墜形訓下に「窮奇、廣莫風之所生也。」とあり、高誘注に「窮奇、天神也。在北方道、足乘雨龍、其形如虎、坎爲廣莫風也。」とある。また、『史記』司馬相如傳の「子虛賦」には「窮奇象犀」とあり、『集解』は「漢書音義」曰、窮奇狀如牛而蝟毛、其音如嗥狗、食人也。」といい、『索隱』に引く張揖の説も同じである。「窮奇」を虎の形に近いとするのは『山海經』西山經がもつとも早く、牛の形に近いとする説は後れるようである。本鏡の外區には虎形や雙角をもつ牛形の獸があり、そのどちらかが「窮奇」であらう。「里具」は不詳。「窮奇」がなぜ「雨後伏」なのかも不明。

●六〇三

呂氏乍竟世少有。

呂氏 鏡を作るに、世に有ること少なし。

東王公西王母。

東王公・西王母あり。

仙人子喬赤誦子。

仙人の(王)子喬・赤松子あり。

車馬辟邪在左右。

車馬・辟邪は左右に在り。

爲吏高升賈萬倍。

吏と爲れば高升し、賈は萬倍ならん。

(注)

紹興・一九の畫像鏡にみる。起句の前に「…」記號があり、「有」・「母」・「子」・「右」・「倍」は之部で毎句押韻する。内區の圖像には「西王母」と「車馬」の榜題が加えられている。

第一句の「乍」は「作」の省字。「竟」は「鏡」の省字だが、銘文六〇二以前の「呂氏」鏡ではすべて金偏をもつ「鏡」につくる。「世少有」は銘文五二一・五二二に前出。

第三句の「赤誦子」は赤松子。「呂氏」鏡の銘文五三七では「赤誦子」につくる。奇觚一五・一〇〇一一は「尙方」畫像鏡について

「赤用子、赤松子也。淮南・齊俗作赤誦。」と解説する。銘文六〇六の注を参照。

第四句の「耶」は「邪」の假借。漢鏡五期の「杜氏」鏡や「胡氏」鏡はすべて「邪」を「耶」につくる。「車馬」は同じ題記をもつ内區の圖像を指し、鈕の反対側にあらわされた顧首形の獸が「辟邪」である。

第五句は漢鏡五期の銘文五二〇・五二一に前出。また、「呂氏」浮彫式獸帶鏡の銘文五四〇には「爲吏高升居人右」とあった。

●六〇四

池氏作竟世未有。

位至三公車生耳。

男封侯女王婦。

壽而金石西王母。

(注)

池氏鏡を作るに、世に未だ有らず。

位は三公に至り、車に耳を生じん。

男は侯に封ぜられ、女は王婦とならん。

壽は金石・西王母の如し。

ケンブリッジ大學フィッツウィリアム美術館藏の浮彫式獸帶鏡(人文研考古資料)にみる。「池氏」浮彫式獸帶鏡の銘文五一七より圖像表現が畫像鏡に近づき、主紋に東王公と西王母が對置され、そこに馬車や龍虎が出行する配置となる。起句の前に「…」記號があり、「有・耳」・「婦」・「母」は之部で毎句押韻する。

第一句の「世未有」は、湖南省出土の盤龍鏡に「侯氏作竟世未有」という例がある(周世榮・一九八六・圖八七)。また、それに近い例に銘文四三四の「安漢保眞世母有」がある。

第二句の「位至三公」はこれが初出。「三公」の内譯は、今文説は司徒・司馬・司空であり、古文説は太師・太傅・太保である(堀池・一九八八)。後漢代には今文説が採られ、『白虎通』封公侯には

「王者所以立三公九卿何。曰、天雖至神、必因日月之光。地雖至靈、必有山川之化。聖人雖有萬人之德、必須俊賢。三公・九卿・二十七大夫・八十二元士、以順天成其道。司馬主兵、司徒主人、司空主地。王者受命爲天地人之職、故分職以置三公、各主其一、以效其功。」という。「車生耳」とは耳のある車に乗るほど出世する意。銘文五〇七の注を参照。

第三句の類例として銘文四三五の「男爲侯、女嫁王。」や銘文六一二の「男封大君女王婦」がある。

第四句の「而」は「如」の假借。漢鏡四期の銘文四三〇に「壽如金石西王母」とあった。

●六〇五

石氏作竟世少有。

東王公西王母。

人有三仙侍左右。

後常侍名玉女。

雲中玉昌踊於鼓。

白虎喜怒母央咎。

男爲公侯女□□。

千秋萬歲生長久。

(注)

石氏鏡を作るに、世に有ること少し。

東王公・西王母あり。

人に三仙有り、左右に侍す。

後ろに常に侍す、名は玉女。

雲中玉娟、鼓に踊る。

白虎は喜怒し、殃咎母からん。

男は公侯と爲り、女は王婦ならん。

千秋萬歲、生は長久ならん。

浙江の孔震氏が所藏する畫像鏡にみる。同氏提供の寫眞にもとづく。内區主紋は四區畫に分け、西王母の區畫には「永元三年作」「西王母」「仙人」「玉女」、東王公の區畫には「王公」「仙人」「玉女」、歌舞する女性の圖像には「雲中玉昌」、白虎の圖像には「白虎」の題記がある。永元は和帝の年號で、その三年は西曆九一年。

銘文は起句の前に「…」記號があり、「有」・「母」・「右」・「久」が之部で押韻し、これに魚部の「女」・「鼓」と幽部の「咎」が叶韻する。之部・魚部・幽部の叶韻は銘文五二四に例がある。

第一句は「石氏」盤龍鏡の銘文五二一と同じで、年代が近いことから同一工房の作品であろう。

第二句は内區にあらわされた東王公と西王母をいう。

第三・第四句は東王公と西王母それぞれの左側に三人の「仙人」が跪き、右側に「玉女」が侍従することという。「三仙」の語は西晉以後の傳世文獻に確められ、『水經注』卷四十・禹貢山水澤地在所に引く『嵩高山記』に「山有玉女臺、言漢武帝見三仙・玉女、因以名臺。」とある。本例はその初期の例である。なお、漢鏡七期の「銓氏」畫像鏡の銘文七〇三には「人有二仙在左右」という類似句があり、その圖像をみると、東王公の兩側には三人の仙人がしたがうが、西王母の兩側には仙人が二人だけである。

第五句の「雲中」は、雲の神。『楚辭』九歌に「雲中君」の一篇があり、『漢書』郊祀志上の「晉巫祠五帝・東君・雲中君……」の顏師古注に「東君、日也。雲中君、謂雲神也。」とある。「昌」は「娼」の省字で、うたひめ。本鏡では長い袖を振って舞う女性の圖像に「雲中玉昌」の榜題があり、この句は「雲中玉娼」が鼓にあわせて踊ることをいうのであろう。ただし、故宮藏鏡・四九の畫像鏡には同じような女性の圖像に「雲中作昌」の榜題があり、その「昌」は「倡」の省字であろう。傳世文獻に同じ用例はないが、「皓靈黃老君」(『正統道藏』太平部・無上秘要卷十五)に「鳳鬱然而生、抱女俱飛逕入雲中玉女」という例がある。また、玉女が舞うさまは、曹操「氣出倡」(『樂府詩集』卷二十六)に「今日相樂誠爲樂、玉女起起舞舞移數時。」と詠われている。

第六句は内區にあらわされた「白虎」の圖像をいう。『後漢書』章帝紀の建初五年(八〇)詔に「今吏多不良、擅行喜怒、或案不以罪、迫脅無辜、致令自殺者、一歲且多於斷獄」、同質帝紀の本初元年(一四六)詔に「或以喜怒驅逐長吏、恩阿所私、罰枉仇隙、至令守闕訴訟、前後不絕」とあるように、「喜怒」の「喜」は軽くそえた帶語。また、『孟子』公孫丑章句上の「夫志、氣之帥也。氣、體之充也。」の趙岐注に「氣、所以充滿形體、爲喜怒也。」とあり、氣が體に充ちている状態をいう。本鏡の圖像では、白虎が兩目を見開き、口を大きく開け、前足の爪を立てているさまをあらわす。「央」は「殃」の省字。『呂氏春秋』仲秋紀の「反受其殃」の高誘注に「殃、咎也。」とあり、「殃」と「咎」は、とがめとわざわい。漢・焦贛『易林』蹇之漸に「麟鳳所翔、國無咎殃」とあり、『抱朴子』內篇・遐覽に「不問地擇日、家無殃咎。」とある。また、鎮墓文には陝西省西安市和平門外四號漢墓出土の「初平四年(一九三)」陶瓶に「千秋萬歲、無有央咎」とあるほか(唐金裕・一九八〇)、「移央去咎」など類似表現が多く認められる。

第七句末の二字は銑のため讀めないが、銘文六〇四に「男封侯女王婦」、銘文六二二に「男封大君女王婦」、古鏡・中一六(方格規矩鏡)に「男爲公侯女王婦」という例があり、本鏡銘では「王」字の第一畫が残存し、「婦」が之部で押韻することから、「王婦」と推測する。第八句は銘文五二一と同じ。兩鏡とともに「石氏」の作品であることをものをがたる。

●六〇六

宋氏作竟自有意。宋氏鏡を作るに、自づから意有り。
善時日家大富。時日善ければ、家は大いに富まん。

取婦時與衆異。

七子九孫各有喜。

宦至公卿中尚寺。

上有東王父西王母。

予天相保不知老。

吏人服之帶服章。

婦を娶る時は衆と異なる。

七子九孫あり、各おの喜び有り。

宦^{つか}ふれば公卿・中常侍に至らん。

上に東王父・西王母有り。

天と相ひ保ち、老いを知らず。

吏人^つ之れを服せば、服章を帯びん。

〔注〕

小校一五・五四の畫像鏡にみる。第一句は銘文五四六と同じで、そのほかの句もそれに類似する。之部の「喜」・「寺」・「母」は、職部の「意」・「富」・「異」や幽部の「老」と叶韻する。

第一句の第五字は未讀だが、「自」字の下に二つの「口」字が並列する形で、「自」の異體字であろう。後述の「蔡氏」畫像鏡では「自」につくる。

第三句の第四字は未讀だが、字形からみて「與」であろう。「取」は「娶」の省字または假借〔李新城・二〇〇六・二二四頁〕。『漢書』貢禹傳に「取女皆大過度。」とあり、顏師古注に「取、讀曰娶。」とある。

第四句は銘文五四五に同文がみえる。

第五句第一字の「宦」は「仕」。『說文』七下に「宦、仕也。」とある。また、『左傳』宣公二年に「及成公即位、乃宦卿之適子而爲之田、以爲公族。」とあり、杜預注は「宦、仕也。」という。〔尚〕は「常」の假借で、「寺」は「侍」の省字。

第六句は内區にあらわされた東王父と西王母をいう。

第七句の「予」は「與」の假借。『史記』夏本紀の「與益予衆庶稻鮮食」の「索隱」に「予音與。」という。後述の「蔡氏」畫像鏡では「與」につくる。「與天相保」は漢・焦贛『易林』訟之泰に

「弱水之西、有西王母。生不知老、與天相保。」とある（K・一六二）。なお、「保」は順帝（在位一二五～一四四）の諱だが、一六八年の「衡方碑」（永田・九三）や一六九年の「郭泰碑」（永田・九七）などでは避諱されていない。『後漢書』順帝紀の「孝順皇帝諱保」の注には「伏侯『古今注』曰、保之字曰守。」という。

第八句の「服章」は王侯クラスの服にほどこした飾り模様。『左傳』宣公十二年に「君子小人、物有服章。」とあり、杜預注に「尊卑別也。」という。『續漢書』輿服志下には「乘輿備文、日月星辰十二章、三公・諸侯用山龍九章、九卿以下用華蟲七章」とあり、ここでは「服章」をもつ公卿に出世することという。また、銘文五一四に「爲吏高遷帶青黃」という類似句がある。

小校一五・五五の「宋氏」盤龍鏡は、本銘と類似したつぎの銘文をもつ。

三羊宋氏作竟善有意。三羊宋氏鏡を作るに、善き意有り。

良時日家大富。時日良ければ、家は大いに富まん。

宦至三公中常侍。宦^{つか}ふれば公卿・中常侍に至らん。

長宜。長く宜し。

起句を示す記號がないため、小校は「宋氏」を銘文のはじめとし、銘末を「長宜□三羊」とするが、「宜□」と二字に讀んだのは銘末を示す懸針體ふうの「宜」の一字の誤りで、これは「三羊宋氏」ではじまり「長宜」で終わっている。「三羊宋氏」は「三羊」工房に所屬する鏡工の「宋氏」を意味する。「宋氏」にはほかに銘文六一五の「青羊宋氏」畫像鏡がある。本銘では第一句の「自」を「善」としたため、第二句の「善」を「良」と改めたのであろう。

小校一五・五六（古鏡・中一六／K・一六二）の「蔡氏」畫像鏡は、これと類似した主紋と銘文をもつ。

蔡氏作竟自有意。

良時日家大富。

七子九孫各有喜。

宜至三公中尙寺。

上有東王父西王母。

與天相保兮。

末句の「保」は幽部で毎句叶韻する。また、K・一五二には

尙方作竟自有紀。

良時日家大富。

九子九孫各有喜。

位至三公中常侍。

上有西王母東王公。

山人子喬赤由子。

の銘文があり、カールグレンは毎句押韻するという。奇觚一五・一

〇〇一一にはこれに類似する「尙方」畫像鏡があり、「赤用子、赤

松子也。淮南・齊俗作赤誦。……『史記』留侯世家、赤松子、『素

隱』、神農時雨師。」と解説する。

●六〇七

范氏作竟自有紀。

巧工刻之及賢事。

駒馬在前足不止。

白衣自言伏不起。

縣吏伋宛不刻李。

自歸從事州付史。

蔡氏鏡を作るに、自づから意有り。

時日良ければ、家は大いに富まん。

七子九孫あり、各おの喜び有り。

宜ふれば三公・中常侍に至らん。

上に東王父・西王母有り。

天と相ひ保たん。

尙方鏡を作るに、自づから紀有り。

時日良ければ、家は大いに富まん。

九子九孫あり、各おの喜び有り。

位は三公・中常侍に至らん。

上に西王母・東王公有り。

仙人の子喬・赤松子あり。

范氏鏡を作るに、自づから紀有り。

巧みな工は之れを刻み、賢事に及ぶ。

駒馬は前に在りて、足を止めず。

白衣自から言へらく、伏して起たず、と。

縣吏は急ぎ宛みて李を刻まず。

自づから従事に歸して州より史に付せられん。

(注)

安徽省舒城縣文物管理所藏の畫像鏡(六安・一四五)にみる。起句の前に三本線の記號があり、整った七字句で「紀」・「事」・「止」・「起」・「李」・「史」が之部で毎句押韻する。内區には歌舞の圖像に「諸王」、琴を弾く女性(西王母か)の右側の侍女に「王(玉)女」の題記がある。この「王女」を圖録が「王母」と釋したのは誤り。内區にはほかに馬車の圖像がある。それが本銘の内容に直接かわる圖像である。

第一句の末字を圖録は「縁」と釋すが、それでは押韻しない。糸偏の字形であり、類例からみて「紀」字であろう。作鏡者の「范氏」は、春秋時代の晉の大夫に范昭があり、范氏はその後に少なくない。漢鏡ではほかに例をみないが、容庚『秦漢金文錄』卷五には「范是作」銘の洗がある。

第二句の第一字を圖録は「吳」と釋すが、字形からみて「亏」または「亏」であろう。『說文』五上に「亏、古文以爲亏字、又以爲巧字。凡亏之屬皆从亏。」とあり、「亏」は「巧」の省字または假借である。「賢事」は第三句以下に記すような郡國からひろく無名の賢人を登用することをいうのであろう。とくに宣帝以後は、突然の天變地異に對處するため、賢良・方正の推舉を命じる詔がたびたび下された(福井・一九八八・一二九―一六二頁)。

第三句の第一字を圖録は「駒」と釋すが、「駒」の誤り。「駒馬」は、額の白い馬、すぐれた馬。『說文』十上に「駒、馬白額也。从馬、勻聲。一曰駿也。」とある。内區に馬車の圖像があり、この句はそれを指しているのであろう。

第四句の「白衣」は無位無官の庶人。銘文五三〇の注を參照。ここでは察舉された人の出向に人びとが平伏することをいう。

第五句の第三字を圖録は不明字とするが、字形は「扱」で、「急」の假借。『説文』十下に「急、徧也。从心及聲。」とある。また、銘文二〇五の注を参照。急いで、あわてての意。「宛」は、身體を曲げておじぎすること。『漢書』揚雄傳に「是以欲談者宛舌而固聲」とあり、顏師古注に「宛、屈也。」とある。「李」は「理」の假借で、通常の手續きの意。清・郝懿行『證俗文』卷六に「古者行人謂之行李、本當作行理、理、治也。作李者、古字假借通用。」という。ここでは縣吏が通行手續きを省いたことをいうのであろう。後漢代では州の刺史のみが地方における辟召の資格をもち、縣レベルの官吏が關與することがなかったからである〔福井・一九八八・四一三〕四三四頁〕。

第六句を圖録は「自題從事州付吏」と釋すが、「題」は「歸」、「吏」は「史」の誤り。「歸」は、おもむく。「從事」は、刺史の佐吏で、治中・別駕・諸部從事各一人があり、秩はみな百石であった。『御覽』卷二六三・職官部・別駕に引く應劭『漢官儀』に「元帝時、丞相于定國、條州大小爲設吏員。治中・別駕・諸部從事、秩皆百石。」とある。「付」は、さずける。「史」は、役人。州刺史によって辟召された者は、まず州從事に任命されるのがふつうであった〔福井・同上〕。

鄉村に暮らす賢人を登用する内容の鏡銘として、漢鏡四期の銘文四三五に「車當傳駕騎趣莊。出亭三馬自有行。」とあり、車騎を乗り繼いで地方に命令を伝え、四頭だての馬車で都に出仕することを記している。

●六〇八

青龍作竟自有常。

青龍鏡を作るに、自づから常有り。

長保二親宜侯王。 長く二親を保ち、侯王に宜し。
辟去凶惡追不羊。 凶惡を辟去し、不祥を追ふ。
樂未央兮。 樂しみ未だ央きず。

〔注〕

簠齋・上二三後の浮彫式獸帶鏡にみる。ユーモルフオボロス舊藏鏡（歐米五・九二）はこれと同一鏡か。外區は日月錢紋で區畫した獸紋で、圓座乳で四區畫に分けた内區には東王公・西王母、二頭の馬と麒麟に騎乗する羽人の圖像がある。その圖像構成は銘文五四二をもつ「龍氏」畫像鏡と類似し、本鏡の「青龍」と「龍氏」とが近い關係にあったことがうかがえる。起句の前に「・」記號があり、「常」・「王」・「羊」・「央」が陽部で毎句押韻する。釋文はおもにK・一五四にしたがった。

第一句の「常」について笠野毅（一九八〇）は「常法」や「常規」のように永久不變の基準であり、五常とは五つの不動の徳目、五行説では仁義禮智信であるという。

第二句の「長保二親」と「宜侯王」とが組みあつた七言句は、これが初出である。

第三句の「惡」を容續・三九と陳介祺・一二二は「患」とし、「追」を陳介祺・同は「退」とする。「凶惡」は、わざはひ。『漢書』五行志中之下に「恐有凶惡亟疾之怒」とある。「不羊」は「不祥」。

●六〇九

尙方作竟佳且好。 尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
良時吉日順天道。 良時吉日なれば、天道に順ふ。
便姑公利父母。 姑公を便んじ、父母に利し。
長保二親宜孫子。 長く二親を保ち、孫と子に宜し。

(注)

開明堂・四八の浮彫式獸帶鏡にみる。圓座乳で四區に分けた内區には、馬上から獸に矢を射かける人物が三區畫に、のこる一區畫には車蓋のない戰車に二人が乗っている畫像があり、開明堂の解説はこれを「狩獵文畫像鏡」と呼ぶ。銘文は釋されていないので、寫眞と拓本をもとに釋讀した。幽部の「好」・「道」と之部の「母」・「子」とが叶韻する。

第一句は銘文五二三・五二五に前出。

第二句の「良時吉日」は銘文六〇六の「善時日」や「良時日」と同じように婚禮のよき日取りをいうのであろう。顏延之「秋胡詩一首」(『玉臺新詠』卷四)に「良時爲此別、日月方向除」とある。

第三句の「便」は、安んずる。『說文』八上に「便、安也。」とある。「姑公」は、夫の兩親、しゅうととしゅうとめ。「姑」は『說文』十二下に「姑、夫母也。」とあり、『釋名』釋首飾に「塞耳亦所以止聽也。故里語曰、不瘖不聾、不成姑公。」とある。K・一四五には「便固(姑)章(嫜)利父母」という類似句がある。漢鏡七期の獸首鏡や八鳳鏡に特徴的にみられる銘文である。

●六一〇

尙方作竟佳且好。
左有王父坐行道。
右有王母。
白帟芝草在其後。
令人富貴不老。
子孫滿室世。

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
左に(東)王父有り、行道に坐す。
右に(西)王母有り。
白虎と芝草は其の後ろに在り。
人をして富貴なら令め、老い(を)知らず。
子孫室に滿ち、世よあらん。

(注)

安徽省六安市先王店郷出土の浮彫式獸帶鏡(六安・一二二)にみる。起句の前に「・」記號があり、幽部の「好」・「道」・「老」、之部の「母」、侯部の「後」が叶韻する。内區は圓座乳で六區畫に分け、西王母と東王父の圖像が左と右に隣接し、それぞれに「西王」と「東王父壽」の題記をいれる。西王母の後ろに白虎、馬、馬車、朱雀の圖像がつづいている。

第一句は銘文五二四・六一一と同じ。

第二句から第四句までは銘文五二四の「左龍交右白帟。前有朱鳥后玄武。」を内區の圖像にあわせて改變している。「行道」は仙界への道である。「左」は東、「右」は西である。道の東側に東王父、西側に西王母が座っていることをいう。

圖録は第四句の「帟」を「而」、「在」を「方」と讀むが、誤り。この句は白虎と芝草の圖像が西王母の後ろにあらわされていることをいう。鼓吹曲辭・漢鏡歌「上陵」(『宋書』樂志)に「芝爲車。龍爲馬。」とあり、この句と圖像は白虎が芝草の馬車を引くさまをあらわしたものかもしれない。

第五句は「不知老」の「知」字が脱落している。

第六句はめずらしい。「滿室」は『漢書』食貨志下に「富人藏錢滿室、猶無厭足。」とある。ここでは部屋いっぱい子や孫があふれることをいう。

●六一一

尙方作竟佳且好。
左有交龍右白帟。
前有朱鳥后玄武。

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。
左に交龍有り、右には白虎。
前に朱鳥有り、後ろには玄武。

令人富貴不知老。

人をして富貴なら令め、老いを知らず。

(注)

天理・四七の盤龍鏡にみる。起句の前に四點記號があり、幽部の「好」・「老」は魚部の「虎」・「武」と合韻する。本銘は安徽省合肥市徵收の「尙方」浮彫式獸帶鏡の銘文五二四と類似する。しかし、本鏡の主紋は龍と虎が對峙する形であり、銘文とは一致しない。

第一句は銘文五二四と同じ。

第二句は銘文五二四では「左龍交右白帟」と錯簡があつたが、本銘は完全である。

第三句の第一字は「存」で、銘文五二四では「前」とする。「存」は「荐」の省字で、「薦(前)」の假借である。『史記』曆書の「禍菑薦至」の注に『索隱』は「荐、字或作薦。」とあり、朱駿聲『說文通訓定聲』は「荐、假借爲薦。」とある。藤堂(一九六五・No. 一五五)は「薦」と「前」は同じ單語家族という。この句は朱鳥と玄武を前後に配置することをいう。

第四句は銘文五二四と同じである。

●六二

青蓋作竟佳且好。

青蓋鏡を作るに、佳にして且つ好し。

子孫蕃息長相保。

子孫蕃息し、長く相ひ保たん。

男封大君女王婦。

男は大君に封ぜられ、女は王婦とならん。

壽如金石大吉。

壽は金石の如く、大吉ならん。

(注)

嚴窟二下・五〇の盤龍鏡にみる。釋文は嚴窟にしたがう。幽部の「好」・「保」と之部の「婦」とが叶韻する。

第二句に近い例として銘文四五二の「子孫備具長相保」や銘文五

一九の「子孫蕃息樂未央」がある。

第三句の「大君」を嚴窟が「太君」と釋したのは誤り。『易經』師に「大君有命、以正功也。」とある。この句に近い例として銘文四三五の「男爲侯、女嫁王。」や銘文五三三の「男封列侯皆令」があり、「大君」は列侯の意。

●六一三

劉氏作竟佳且好。

劉氏鏡を作るに、佳にして且つ好し。

白帟辟邪不知老。

白虎と辟邪あり、老いを知らず。

子孫□具長相保。

子孫備具して、長く相ひ保たん。

(注)

嚴窟二下・五五の盤龍鏡にみる。内區の主紋は向かつて左に虎形、右に龍形の獸が對峙し、そのあいだに五銖錢紋がある。起句の前に「・」記號があり、「好」・「老」・「保」が幽部で毎句押韻する。

第二句の「白帟辟邪」はめずらしい組みあわせだが、銘文五〇三に「白帟辟邪居中央」、銘文五二五に「白帟辟邪居中道」とあり、いずれも盤龍鏡の主紋をいうものである。本鏡ではその「白帟辟邪」が長壽をかなえるというのであろう。

第三句の第三字は型流れのため讀めないが、類例から「備」字であらう。「子孫備具長相保」は銘文四五二に例があり、銘文六一二には「子孫蕃息長相保」という用例がある。

●六一四

青羊□□□□□□、

青羊□□□□□□、

□作同山□雒陽。

□は銅山を鑿ち、雒陽に□。

君主如此大無傷。

君主此の如く、大いに傷無し。

八子九孫主高堂。

八子九孫あり、高堂を主らん。

吉利。

吉利ならん。

(注)

湖北省鄂州市蓮花村戴家山出土の盤龍鏡(鄂州・九三)にみる。四分の一ほどが缺損し、第一句から第二句までの六字が失われている。起句の前に菱形の四點記號があり、圖録は「青羊(蓋)……作、同(銅)出雒(洛)陽、君主如此大無傷、八子九孫主高堂、吉利。」と釋し、南京大學歷史系考古專業ほか(二〇〇七)は「青羊……作同(銅)出洛陽、居主如此大燕鰲、八子□孫主高堂、吉利」とするが、鄂州の圖録寫眞により字釋を改めた。末句をのぞいて整った七言句であり、「陽」・「傷」・「堂」が陽部で押韻する。

第一句は「青羊」の二字のみ残存し、圖録は「羊」を「蓋」の省字とする。「青蓋」は漢鏡五期に「尙方」から自立して盤龍鏡を創作した作鏡者であるが(岡村・二〇一〇)、それとは別に漢鏡五期から六期にかけて「青羊」盤龍鏡が存在し、「青蓋」鏡と圖像や銘文が類似しているものの、両者が同一工房の作であるという確證はなく、本鏡の圖像と銘文はそれらとは異なっている。いっぽう王仲殊(二九八六)は太康二年(二八二)對置式神獸鏡の銘文に「吳郡工清羊造作之鏡」とあり、「清」は「青」の繁字であることから、「青羊」は吳郡の鏡工と結論づけた。しかし、後漢代の「青羊」盤龍鏡まで吳鏡とみなすのは早計である。淮派の流れをくむ銘文六一五の「青羊宋氏」畫像鏡や小校一五・五五の「三羊宋氏」盤龍鏡は吳鏡とは考えがたいし、「雒陽」とある本鏡の第二句と整合的に理解することはむずかしい。

第二句は圖録・南京大學とも「同(銅)出雒(洛)陽」と讀むが、「同」と「雒陽」とのあいだに二字があり、「同」につづく字は

「出」ではなく「山」であろう。七言句であれば、「□作同山」+「□雒陽」と讀むべきだが、第一字は缺損、第五字は不明字のため意味は取りづらい。朱駿聲『說文通訓定聲』に「作、假借爲鑿。」とあり、銅鑛山を掘って銅を雒陽に運んだ意味か。「雒陽」は「洛陽」。『漢書』地理志上の「雒陽」本注に「莽曰、宜陽」とあり、その顏師古注に「魚豢云、漢火行忌水、故去『洛』『水』而加『佳』。如魚氏說、則光武以後改爲『雒』字也。」とある。しかし、北朝鮮ピョンヤン市石巖里二〇〇號墓の方格規矩四神鏡(梅原・一九二五)に「尙方御竟大毋傷。名師作之出雒陽。」という銘文があり、五行思想がさかんとなった前漢末期には「雒陽」に改められていたのである。

第三句の第一字は破損し、圖録は「君」、南京大學は「居」と讀む。ここでは圖録釋にしたがうが、つづく「大無傷」は鏡に傷がないことをいうのであれば、その意味は通じがたい。

第四句は銘文五一二に「八子九孫居高堂」という類似句があり、漢鏡五期の「張氏」浮彫式獸帶鏡との關係がうかがえる。

●六一五

青羊宋氏作竟佳且、
明月予世保。

青羊宋氏 鏡を作るに、佳にして且つ(好し)、
明なること(日)月の(ごとく)、世の寶と
ならん。

東王父西王母。

東王父と西王母あり。

山人子橋不知老。

仙人の子喬あり、老いを知らず。

周由天下之四海。

天下を周游し、四海に之かん。

樂無亟。

樂しみ極まり無し。

〔注〕

個人藏の畫像鏡（笠野・一九九三b・圖一）の銘文で、釋文は岡村調査資料による。四葉紋で區畫した内區には、西王母、東王公、車馬、歌舞の圖像を配し、「東王公」の榜題がある。幽部の「保」・「老」と之部の「母」・「海」と職部の「亟」が叶韻している。

第一句は作鏡者「宋氏」が「青羊」工房の所屬であることをいう。「宋氏」鏡は漢鏡五期にはじまり、漢鏡六期には本鏡に類似した圖像と銘文六〇六をもつ畫像鏡を制作していた。また、小校一五・五五の盤龍鏡には「三羊宋氏作竟」の銘文があり（銘文六〇六の注を参照）、「宋氏」は「青羊」や「三羊」の工房でも鏡を鑄造していたのである。「佳且」につづく字は銘文五二三・五二五など「好」がふつうで、押韻からみても「好」字が脱落しているのだろう。

第二句の「予」は「豫」の省字または假借で、やすんずる。『爾雅』釋詁に「豫、安也。」とある。「保」は「寶」の假借。銘文四五〇の注を参照。ただし、「宋氏」鏡の銘文六〇六に「予天相保不知老」、銘文七一〇に「王氏作竟佳且好。明而日月世之保。服此竟者不知老。」とあることから、むしろ誤字と錯簡の可能性が大きい。なお、「保」は順帝（在位一二五～一四四）の諱だが、一六八年の「衡方碑」（永田・九三）や一六九年の「郭泰碑」（永田・九七）などでは避諱されていない。銘文六〇六の注を参照。

第三句の「東王父」は内區にあらわされた圖像を指しているのだろうが、題記では「東王公」とあり、同一鏡において「東王父」と「東王公」とが混用されているのはめずらしい。

第四句の「山人」は「仙人」の省字または假借、「子喬」は「王」子喬の假借である。

第五句の「由」は「游」の假借。漢・陳琳「檄吳將校部曲文」

〔文選〕卷四十四に「圍守鄴城、則將軍蘇游、反爲内應」とあり、李善注は『魏志』に將軍の名を「蘇由」とあることから「游與由同。」という。

三 漢鏡七期

●七〇一

袁氏作竟眞大巧。

上有東王公西王母、

仙人子喬赤誦子。

白虎薰盧左右。

爲吏高升賈萬。

千秋萬歲生長。

袁氏鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

上に東王公・西王母、

仙人の（王）子喬・赤松子あり。

白虎と薰盧は左右にあり。

吏と爲れば高升し、賈は萬（倍）ならん。

千秋萬歲、生は長からん。

〔注〕

小校一五・四四の畫像鏡にみる。林分類Ra式の一つ。内區に玉女や仙人の伺候する東王公と西王母、顧首形の白虎、仙人が相對する香鑪の圖像がある。本銘の第二・第四句はその圖像を記述したもので、徐州における「袁氏」系統群の典型的な銘文形式。之部の「母」・「子」・「右」と幽部の「巧」が叶韻する。「西王母」・「東王公」・「玉女」の榜題がある。

第一句の末字を小校は「巧」と讀むが、「袁氏」系統群に特徴的な偏と旁を連結させた「巧」字である。

第三句の「子喬」は「王」子喬、「赤誦子」は「赤松子」。銘文六〇三にも「仙人子喬赤誦子」とある。

第四句の「薰盧」は「薰鑪」で、香爐のこと。謝惠連「雪賦」〔文選〕卷十三に「燎薰鑪兮炳明燭、酌桂酒兮揚清曲」とあり、李

善注に「劉向有薰鑪銘。『楚辭』曰、奠佳人兮椒漿。薰、火煙上出也。字、從黑。翰曰、……薰、香也。」とある。漢代の香爐は本鏡の圖像のように上部が山を象つた形で、『西京雜記』卷二に「作九層博山香鑪、鏤爲奇禽怪獸、窮諸靈異皆自然運動。」とあり、博山爐と呼ばれることもある〔林小娟・二〇〇八〕。香鑪の圖像は「袁氏」系鏡群と三角縁神獸鏡にみられ〔西田・一九七二〕、銘文は「袁氏」系鏡群に限られる。「呂氏」鏡の銘文六〇三では「車馬辟邪在左右」とあり、ここでは「在」字が脱落しているのであろう。

第五句は銘文六〇三に「爲吏高升賈萬倍」とあり、末字の「倍」が脱落している。

第六句末に「久」字が脱落している。また、第五字を小校は「主」と讀むが、「生」の誤り〔西田・一九七二〕。永元三年（九二）畫像鏡の銘文六〇五に「千秋萬歲生長久」とあり、それを繼承したもののだが、漢鏡七期では「袁氏」系鏡群の銘文に多い。

●七〇二

袁氏作竟眞大巧。

上有東父王西王母。

青龍在左白虎居右。

辟邪喜怒無央咎。

仙人王高赤谷子。

千秋萬世生長。

（注）

早稻田大學文學部考古學研究室所藏の斜縁同向式神獸鏡（車崎・二〇〇五）にみる。鈕の左右に東王公と西王母、上下に青龍と白虎の圖像があり、本銘の第二・第三句はそれを記述したもの。鏡式は

袁氏鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

上に東王父・西王母有り。

青龍は左に在り、白虎は右に居る。

辟邪は喜怒し、殃咎無からん。

仙人の王喬・赤松子あり。

千秋萬世、生は長からん。

異なるが、その圖像表現や銘文の字形は銘文七〇一の畫像鏡と共通

することから、同じ「袁氏」工房の作であろう。起句の前に群星狀の記號があり、第二・第三句は八字句をなす。幽部の「巧」・「咎」と之部の「母」・「右」・「子」が叶韻する。

第一句の「巧」字は銘文七〇一と同じ字形。

第二句は「東王父」を「東父王」と書き誤る。

第四句は銘文六〇五に「白虎喜怒毋央咎」という類似句があり、漢鏡七期では「袁氏」系鏡群に多く用いられた。「喜怒」をカールグレン（K・二二八）は「喜ぶにせよ怒るにせよ」と解釋するが、「喜」は軽くそえた帶語であり、怒りを示す語であろう。銘文六〇五の注を參照。ただし、本鏡には「辟邪」の圖像はない。

第五句の「赤谷子」は「赤松子」。

第六句は銘文七〇一の「萬歲」を「萬世」とし、末字の「久」を脱落する。

●七〇三

銓氏作竟眞大巧。

東王公西王母。

辟邪喜怒無央咎。

人有二仙在左右。

千秋萬歲生長久。

（注）

新潟縣藥照寺藏の畫像鏡（今井・一九八八）にみる。鈕の左右に東王公と西王母、上下に青龍と白虎の圖像がある。その圖像紋様と銘文形式は「袁氏」系鏡群に類似する。銘文は七字句を基本とし、幽部の「巧」・「咎」と之部の「母」・「右」・「久」が叶韻する。

銓氏鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

東王公・西王母あり。

辟邪は喜怒し、殃咎無からん。

人に二仙有り、左右に在る。

千秋萬歲、生は長久ならん。

「銓氏」は先秦時代の宋の銓邑に由来し、漢代には沛郡の屬縣となった。故城はいまの安徽省宿州市に所在する。「銓氏」やその省字である「至氏」の畫像鏡は、すべて「袁氏」系鏡群にふくまれ、それらが徐州系であることを裏づけている。

第四句の「二仙」は王子喬と赤松子を指すのだろう。「人」はかれらが人間から仙化したことを意味する。銘文六〇五には「人有三仙侍左右」とあり、銘文形式も共通点が多い。ただし、本鏡の圖像では、西王母の左右に仙人は一人ずつだが、東王公の左右には計三人の仙人が伺候している。

同じ「銓氏作」銘の畫像鏡として京大人文研蔵の鏡片があり、「銓氏乍竟世少有、仙馬白……」という銘文が残存している。「仙馬」は珍しく、浙江省紹興市漓渚出土の畫像鏡（浙江修訂・圖版二〇）の内區榜題に「赤誦馬」・「王喬馬」とあり、仙人の馬を示すものであろう。この圖像表現も「袁氏」系畫像鏡と類似する。

●七〇四

至氏作竟真大巧。

上有山人子高赤誦子。

居居辟邪左有。

青龍喜怒無央咎。

千秋萬歲青長久。

(注)

陳介祺・一二六の畫像鏡にみる（K・二二七）。内區の圖像は龍虎形と鹿形の四獸からなる。銘文は七字句を基本とするが、第二・第三句は亂れる。幽部の「巧」・「咎」と之部の「子」・「有」・「久」が叶韻する。

銘文七〇一〜七〇三と同形式の銘文で、第一句の「巧」字も同じ特徴的な字形である。「至」は銘文七〇三の「銓」の省字。

第二句の「山人」は「仙人」・「子高」は「(王)子喬」・「赤誦子」は「赤松子」の假借である。銘文五二四に「山人王喬赤相子」、銘文六〇三に「仙人子喬赤誦子」、銘文七〇一に「仙人子喬赤誦子」とあり、淮派・徐州系で繼續的に用いられてきた語句である。ただし、本鏡には子喬・赤松子の圖像がない。

第三句の冒頭二字はこれまで讀まれていないが、「居居」とあり、銘文四一四の「巨虛」、銘文五四二の「距虛」であろう。王力の古音説（郭錫良・一九八六）では「居」は「見魚」・「巨」・「距」は「羣魚」・「虛」は「曉魚」であり、「居」と「虛」との通假は『荀子』大略の「仁非其里而虛之、非禮也。」の唐・楊倞注に「虛、讀爲居、聲之誤也。」とある。「巨（距）虛」はK・八八が考證するように、前脚は鹿、後脚は兎の「邛邛距虛」という架空の獸。銘文四一四の注を參照。銘文五四二をもつ「龍氏」獸帶鏡では兎形の獸が「距虛」に比定されているが（林・一九七八）、本鏡では鹿形の圖像がそれにあたるのであろう。この反対側にある龍形の獸が「辟邪」である。本來は銘文七〇三のように「在左右」とあるべきところだが、「在」が脱落し、「右」の假借として「有」となったもの。

第五句の「青」は「生」の假借。ともに耕部で、「青」の聲母は齒音の次清音で「生」は清音というちがいがあがるが、音通があつたことを示す。

●七〇五

劉氏作竟真大巧。

王僑赤誦撞藥草。

劉氏鏡を作るに、真に大いに巧みなり。
王（子）喬・赤松（子）は藥草を撞く。

倉龍在左席居右。

蒼龍は左に在り、虎は右に居る。

千秋萬世生久。

千秋萬世、生は久しからん。

(注)

小校一五・四九の畫像鏡にみる。幽部の「巧」・「草」と之部の「右」・「久」が叶韻する。

第一句の末字を小校は「巧」と讀むが、銘文七〇一七〇四と同じ「巧」字である。作鏡者の「劉氏」は盤龍鏡の銘文六一三に既出だが、漢鏡七期には四獸鏡の銘文七二七や神獸鏡の銘文七三九など、多様な鏡種の銘文を制作していた。

第二句の「王僑赤誦」は王(子)喬・赤松(子)。小校は「藥草」の前一字を未讀だが、「撞」と讀める。内區に二仙が向かい合つて杵で仙藥を臼搗く圖像があり、それをあらわしたものの「呂氏」畫像鏡の銘文六〇二に「東公西母山擣藥」という類似句がある。第四句の「萬世」は「萬歲」。銘文七〇二に同じ。

●七〇六

尙方作竟眞大工。

尙方鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

上有仙人辟不羊。

上に仙人有り、不祥を辟く。

巧師刻成文章。

巧みな師は文章を刻成せり。

和周鉛錫清且明。

鉛と錫を和調するに、清にして且つ明なり。

賈氏竟者富昌。

是の鏡を買ふ者は富昌ならん。

王孫子、

王孫子、

三公。

三公。

傳付子孫樂未英。

子孫に傳へ付さば、樂しみ未だ央きず。

日飲酒月作倡。

日び酒を飲み、月づき倡を作さん。

(注)

巖窟二上・八三の内向連弧鏡にみる。鏡はいま泉屋博古館の所藏となり、泉屋・五五は連弧四葉紋鏡と命名する。内區最外周に銘文を時計回りに配する。陽部の「羊」・「章」・「明」・「昌」・「英」・「倡」が押韻し、東部の「工」と叶韻する。

第一句の「工」は「巧」の假借(笠野・一九八三)、『廣雅』釋詁三に「工、巧也。」とある。ただし、王力の古音説では「巧」は幽部である。

第二句の原形は銘文四五〇のように「上有仙人不知老」となるが、仙人が不祥を退けるのは特異である。

第三句は銘文四四五以來「巧工刻之成文章」がふつうで、ここでは「工」のかわりに「師」となり、「之」字が脱落している。

第四句の第二字を泉屋は未讀だが、巖窟は「周」と釋して「調」と讀む。「和調」は、漢・焦贛『易林』大有之旅に「麒麟鳳凰、善政得祥。陰陽和調、國無災殃。」とあり、「調和」と同じ意味。第三字を巖窟は「鉛」と釋すが、旁の「八」と「口」が離れている。しかも、本來は銘文四三九の「和以銀錫清且明」のように「銀」とあるべき字であり、笠野毅(一九八三)は鏡銘に「鉛」字が記された確實な例がないことから、この字釋に疑問を呈している。しかし、後漢以後の道術において鉛が重視され、河南・陝西省一帯では飛禽紋や連弧紋をもつ副葬用の鉛鏡がつくられたことを考えれば、この時期の鏡銘に「銀錫」にかえて「鉛錫」が用いられるようになった可能性は否定できない。「鉛錫」は『急就篇』に「鍛鑄鉛錫錠錠」であり、顏師古注は「鉛、青金也。錫、一名鋤、在銀鉛之間、即今白鐵也。」という。また、『漢書』食貨志下の「郡國鑄錢、民多姦鑄」に顏師古は「謂巧鑄之、雜鉛錫。」と注し、銅錢の盜鑄に鉛や

錫が用いられたとしている。

第五句の「氏」は「是」の假借。銘文五一三の注を参照。第五字を泉屋は「得」と讀むが、「富昌」の前は「樂」が多く、わずかに「貴」がある。永壽二年（二五六）「尙方」獸首鏡に「買竟者富且昌」という類似句がある。

第六・第七句は不明字が多い。第六句の第三字を泉屋は「諸」と讀む。その句末が「子」字であれば、韻をふみはずしている。

第八句の「傳付」もめづらしい。鏡銘では漢鏡四期以來「傳子孫」や「傳告後世」がふつうの用例である。「英」は「央」の繁字。

第九句は日日の快樂を求めた銘文三一二の「日有喜。月有富。……宜酒食。……竿瑟侍兮」を想起させる。「作倡」は、戯れ歌舞すること。銘文七四〇の注に引く故宮藏鏡の獸首鏡銘に「百牙作昌（倡）」という用例がある。

●七〇七

吾作明竟真大工、
世少有明如日月。

宜君子孫、
至二千石。

賈市得利、
常樂無亟。
家富貴兮。

（注）

金索六・三〇の斜縁神獸鏡にみる（K・二三二）。七字句と四字句の雜言體。起句の前に珠點記號があり、「月」・「石」・「亟」が入聲韻となる。

吾れ明鏡を作るに、眞に大いに巧みなり。

世に有ること少なく、明なること日月の如し。

君と子孫に宜しく、

二千石に至らん。

賈市には利を得、

常へに樂しみ極まり無し。

家は富貴ならん。

第一句の「真大工」は上方作系獸帶鏡など徐州系の鏡群に多い用語で、三角縁神獸鏡にもみられる。第二句の「世少有」と「明如日月」は通常の語順と入れ替わっている。

第四句の「二千石」は『漢書』百官公卿表に「郡守、秦官、掌治其郡、秩二千石」、「凡吏秩比二千石以上、皆銀印青綬」とあり、郡太守を意味する。鏡銘での用例は多くないが、泉屋博古館藏の延康元年（二二〇）對置式神獸鏡には「高昇二千石」がある。鏡銘以外でも、山東省蒼山縣柞城出土の元和四年（八七）銅壺（劉心健ほか・一九八三）の銘文に「吏人得之、致二千石、古人得之、致二千萬、田家得之、千厨萬倉」という例がある。

●七〇八

尙方作竟佳且好。

明而日月世少有。

刻治今守悉皆右。

長保二親宜孫子。

富至三公利古市。

傳告后世樂未已。

（注）

奈良縣佐味田寶塚古墳出土の畫像鏡（富岡・二二頁／K・二三六）にみる。林分類Qa式的一種。内區の圖像は、西王母、東王公、車馬、龍虎形の二獸からなり、「王母」の榜題がある。「有」・「右」・「子」・「市」・「已」は之部で押韻し、幽部の「好」と叶韻する。

第一句は銘文五二三（五二五）や銘文六〇九・六一一など漢鏡五期・六期の浮彫式獸帶鏡や盤龍鏡に前出。

第二句の類似句に銘文七二〇の「明而日月□未有」がある。「明

尙方鏡を作るに、佳にして且つ好し。

明なること日月の如く、世に有ること少なし。

禽獸を刻み治め、悉く皆な有り。

長く二親を保ち、孫と子に宜し。

富は三公に至り、賈市に利し。

後世に傳告し、樂しみ未だ已まず。

而日月」は銘文七一〇にあり、「世少有」は銘文五二一・五二二や銘文六〇三・銘文六〇五など淮派の鏡に例がある。

第三句の「刻治」は方格規矩四神鏡の銘文四四〇に「刻治六博中兼方」という例がある。「今守」を富岡やカールグレンは「分守」と讀んだが、「禽獸」の假借である（林・一九七八）。末字の「右」は「有」の假借。「悉皆右」となるのは本鏡と後述の「尙方」三角縁二神二獸鏡のみであり、ほとんどは銘文七〇九のように「悉皆在」となる。

第四句は銘文六〇九に前出。

第五句は「位至三公」「宜古市」がふつうで、「富至三公」はめずらしい。「利」は、便宜。銘文四一〇の注を参照。「古」は「賈」の假借。

第七句の類似句に銘文四五四や銘文七二二の「傳告後世樂母亟」がある。「后」は「後」の假借。

奈良縣新山古墳から出土した「尙方」三角縁二神二獸鏡の銘文は、本鏡の末句のうち「傳」と「樂未已」を脱落しただけで、蒲鉾形の銘帯にはほぼ同じ字形で書かれている（西田・一九七二）。「悉皆右」や「富至三公」などのまれな用語が共通するだけでなく、類似する圖像紋様をもつことから、同じ「尙方」工房の作品であつた可能性があらう。

●七〇九

蔡氏作竟佳且好。

明而月世少有。

刻治今守悉皆在。

蔡氏鏡を作るに、佳にして且つ好し。

明なること（日）月の如く、世に有ること
少なし。

禽獸を刻み治め、悉く皆な在り。

令人富貴宜孫子。

壽而金石不知老兮。

樂無亟。

人をして富貴なら令め、孫と子に宜し。

壽は金石の如く、老いを知らず。

樂しみ極まり無し。

（注）

河南省洛陽市城北嶽家村三〇號墓の畫像鏡（洛陽・五七）にみる。内區の圖像は、西王母、東王公、車馬、龍虎形の二獸からなり、「王母」、「王公」の榜題がある。踏み返しのため銘文の一部が二重寫しになっているが、下記の類例からみて原鏡は漢鏡七期の制作とみてまちがいない。幽部の「好」・「老」と之部の「有」・「在」・「子」と職部の「亟」が叶韻する。

第二句は「明而日月」とあるべきところを、「日」字を脱落している。「而」は「如」の假借。

第三句の末字を圖録は「左」と讀むが、字形と押韻からみて「在」の誤釋である。意味は銘文七〇八の「悉皆右」と同じである。

第四句は銘文五二四に前出。「令人富貴」に「不知老」がつづく例もあるが、「尙方」鏡に多い語句である。

第五句の「而」は「如」の假借。漢鏡四期の銘文四三〇に「壽如金石西王母」とあつた。

作鏡者の「蔡氏」は漢鏡六期に「宋氏」畫像鏡と類似した圖像と銘文の鏡をつくつていた。銘文六〇六の注を参照。本鏡に類似した「蔡氏」畫像鏡に浙江省嵊縣大塘鎮一〇四號墓出土例がある（嵊縣文管會・一九九二）。銘文は「蔡氏作竟佳且好。明而日月世少有。利治太守悉皆在。令人富貴宜孫子。」と讀まれ、第三句の「利」は「刻」の誤讀であるが、本鏡の第四句までとほぼ同じである。漢鏡六期から七期の畫像鏡の制作において、「蔡氏」は「宋氏」と近い關係にあつたのだらう。

●七〇

王氏作竟佳且好。

明而日月世之保。

服此竟者不知老。

壽□東王公西王母。

山人子高赤松、

長保二親宜。

(注)

奈良縣榛原上井足出土の畫像鏡(富岡・二一頁/K・二三七)にみる。圖像は銘文六一五の畫像鏡に類似するが、表現は粗略で、歌舞のかわりに龍と仙人の圖像をいれる。銘文は幽部の「好」・「保」・「老」と之部の「母」が叶韻する。

第一句の「佳且好」は漢鏡五期にはじまる語句。

第二句の「而」は「如」の假借。銘文四三八の注を參照。銘文七二〇では「明而日月」とあり、銘文七二九では「明如日月」とある。「保」は「寶」の假借。銘文四五〇の注を參照。

第四句の第二字は未讀だが、「如(而)」であろう。「呂氏」畫像鏡の銘文六〇三では「東王公西王母。仙人子喬赤誦子。」と神仙名を羅列する。

第五句の「山」は「仙」、「高」は「喬」の假借である。韻字の「子」が脱落している。

●七一

蔡氏作竟自有意。
上有聖人不知老。
東王公西王□。

王氏鏡を作るに、佳にして且つ好し。

明なること日月の如く、世の寶とならん。

此の鏡を服する者は老いを知らず。

壽は東王公・西王母、

仙人の子喬・赤松の如し。

長く二親を保ち、宜し。

山人子喬赤松子。

馬千頭。

(注)

藥照寺藏の畫像鏡にみる(今井ほか・一九八八・圖二八)。内區の圖像は、角をもつ鹿、牛角をもつ獸、二頭の羊、それぞれの背後に仙人があり、もう一區畫に仙藥を搗く仙人と兔をいれる。銘文は「…」記號につづく第一句は樋口分類P式だが、第二句以下は銘文七一〇の第三句以下に類似する。職部の「意」、幽部の「老」、之部の「母」・「子」が叶韻する。

第一句の第一字を圖録は「藥」と讀むが、「蔡」の異體字である。本鏡は銘文七〇九の「蔡氏」畫像鏡と同じ工房の作品であろう。末字は銹で覆われているが、銘文六〇六の注に引く「蔡氏」畫像鏡の銘文と同じ「意」字であろう。

第二句の原形は漢鏡四期の銘文四五〇のように「上有仙人不知老」であるが、ここでは「仙人」を「聖人」と改めている。なお、漢鏡五期以降、「不知老」の前四字は一定しない。

第三句の末字は銹に覆われているが、「母」字であろう。

第四句の「山」は「仙」、「喬」は「喬」の假借である。

第五句の「馬千頭」はめずらしい。建安廿四年(二一九)重列式神獸鏡などに「家有五馬千頭羊」という類似句がある。

●七二

青蓋作竟自有紀。
明而日月世少有。
刻治今守悉皆在。
長保二親宜孫子。

仙人の子喬・赤松子あり。

馬千頭あり。

(注)

青蓋鏡を作るに、自づから紀有り。明なること日月の如く、世に有ること少なし。禽獸を刻治し、悉く皆在り。長く二親を保ち、孫と子に宜し。

青蓋鏡を作るに、自づから紀有り。

明なること日月の如く、世に有ること少なし。

禽獸を刻治し、悉く皆在り。

長く二親を保ち、孫と子に宜し。

大吉昌宜侯王兮。

大いに吉昌んにして、侯王に宜し。

(注)

大阪府石切劔箭神社藏の斜縁四獸鏡にみる。圖像表現は斜縁神獸鏡と共通點が多いが、銘文形式は異なる。第一句は樋口分類P式、第二句はQ式。第二・第三句に「明而日月世少有、刻治今守悉皆有」を用いる銘文(樋口Q式)は、銘文七〇八・七〇九のように第一句の後三字が「佳且好」となることが多い。それが本鏡のように「自有紀」となるはないは、第二句は「辟去不羊宜古市」、「令人長命宜孫子」、「青龍白虎居左右」となるのが通例(樋口P式)である。本銘は「紀」・「有」・「在」・「子」が之部で押韻する。

第二句の「而」は「如」の假借。

第三句の「今守」は「禽獸」の假借。

●七二三

許氏作竟自有紀。

許氏鏡を作るに、自づから紀有り。

青龍白虎居左右。

青龍・白虎は左右に居る。

聖人周公魯孔子。

聖人の周公・魯孔子あり。

作吏高遷車生耳。

吏と作れば高遷し、車に耳を生ぜん。

郡舉孝廉州博士。

郡より孝廉に擧げられ、州より博士たり。

少不努力老乃悔。

少くして努力せざれば、老いて乃ち悔いん。

吉。

吉ならん。

(注)

古鏡・中一五裏の環狀乳神獸鏡の外區銘(K・一四六)。金索六に同一鏡とみられる線畫があり、山左・五には同一の銘文を收録する。整った七字句で、「紀」・「右」・「子」・「耳」・「士」・「悔」が之部で毎句押韻する。

第三句については、安徽省全椒縣卜集室墓出土の環狀乳神獸鏡

〔朱振文・一九九七〕に「吾作明竟自有用、□去北羊□□子、□□周

公魯孔子、君宜福大吉利」という類似的の銘文があるという。拓本か

らは釋文の是非は判斷できないが、第二句は「辟去非羊宜孫子」、

第三句は本銘と同じ「聖人周公魯孔子」か。山東省章丘市博物館所

藏の畫像鏡(章丘市博物館・二〇〇二)は、榜題に「王公」・「西母」・

「季公」のほか「周公」がみられる。時期が下るが、赤烏元年

(二三八)對置式神獸鏡(五島・四七)には「先師名爲周公」とあり、

浙江省金華市古方窟廠出土の西晉代とされる四鳳人物鏡(浙江修訂・

彩版六〇)に「弟子仲由」・「弟子顏淵」・「弟子子貢」・「聖人□□」

の榜題がある。また、『太平御覽』卷九〇に引く『東觀漢記』では

光武帝の壽陵造營の詔において「周公・孔子猶不得存、安得松喬與

之而共遊乎」とあり、「周公・孔子」が神仙とともに扱われている。

『抱朴子』内篇・辨問においても「或問曰、若仙必可得、聖人已修

之矣、而周孔不爲之者、是無此道可知也。抱朴子答曰、夫聖人不必

仙、仙人不必聖。」とあるように、周公と孔子は神仙と比較される

存在であった。

第四句の「作吏高遷」は鏡銘のほか神亭壺の銘にも例があり、一

般的に用いられた吉祥句。銘文五一四には「爲吏高遷帶青黃」とあ

る。「車生耳」とは、耳のある車に乗るほど出世する意。銘文五〇

七の注を参照。

第五句の「孝廉」は『漢書』武帝紀に「初令郡國舉孝廉各一人」

とあり、武帝代にはじまる官吏の登用制度(永田・一九七〇)。「博

士」は五經博士をいい、後漢代には太學に十四博士があった。すな

わち、『後漢書』儒林列傳序に「立五經博士、各以家法教授、『易』

有施・孟・梁丘・京氏、『尚書』歐陽・大小夏侯、『詩』齊・魯・韓、

『禮』大小戴、『春秋』嚴・顔、凡十四博士、太常差次總領焉。」という。しかし、安帝代には「薄於藝文、博士倚席不講」（同）という状況に退廢していった。州刺史は監察官として設置されたが、後漢代には州牧と改稱されて行政官としての性格を強くしてゆき、州刺史のみが地方における辟召の資格をもった（福井・一九八八・四一三～四三四頁）。漢末の任安のばあい、「初仕州郡。後太尉再辟、除博士、公車徵、皆稱疾不就。州牧劉焉表薦之」（同・任安傳）とあり、辟召されて一度は博士に推舉されている。辟召については銘文六〇七の注を参照。

第六句に近い用例として古樂府の「長歌行」（『文選』卷二十七）に「少壯不努力、老大徒傷悲」がある。

本銘の周公と孔子について、カールグレンは道教色が強いと評し、山左・五は黄小松の説を引いて「漢人范金制銘句、多頌美、獨許氏鏡作勉戒語、爲難得也」という。

半圓方形帶の方格には「天」「王」「日」「月」を一字ずついれる。

●七四

吾作明鏡自有己。

青龍白虎居左有。

令人長命宜子孫、

作吏高遷車生榮耳。

作師長命吉。

（注）

吾れ明鏡を作るに、自づから紀有り。

青龍・白虎は左右に居る。

人をして長命なら令め、子孫に宜し。

吏と作れば高遷し、車は榮耳を生ぜん。

師と作れば長命にして吉ならん。

大阪府安満宮山古墳出土の斜縁神獸鏡（高槻市教育委員會・二〇〇〇）にみる。樋口分類Pb式で、七字句を基本とする。「己」・「有」・「耳」が之部で押韻する。

第一句の「己」は「紀」の省字または假借。銘文四二九などには「自有紀」とある。

第二句の「有」は「右」の假借。

第三句の「令人長命」の類似句として山東省嘉祥縣宗山村三號墓出土「安國祭祠堂題記」（永田・七六）の「令人壽」がある。『詩經』邶風・凱風に「我無令人」とあり、鄭玄箋に「令、善也。」とあることから、これだけをみれば「令き人」と訓じることでもできる。しかし、銘文五四五や同時期の銘文七一六に「令君陽遂」とあることから、鏡銘の「令」は使役と考えるのが妥當であろう。「子孫」は押韻のために「孫子」とあるべきところを誤ったもの。

第四句の第七字を報告は「榮」と讀むが、下は「木」ではなく「火」にしたがう「榮」字であろう。「榮」は、光り輝く。「榮耳」は『吳志』吳主孫權傳に「吳中童謠曰、黃金車、班蘭耳、闔昌門、出天子。」とある「班蘭耳」と同義。「車生耳」は銘文五〇七の注を参照。「車生榮耳」は島根縣造山三號墳出土の斜縁神獸鏡（山本・一九六七）などにも用いられている。

第五句の「作師」は、湖北省樊口朱垞二一號墓出土の黃初六年（二二五）重列式神獸鏡（鄂城・一一〇）に「會稽山陰作師鮑唐竟」とあり、太平元年（二五六）對置式神獸鏡（古鏡・上一〇表）に「作者長生」という類似句があることから、作鏡者と解釋することも可能だが、ここでは第四句の「作吏」と同じように訓讀した。

●七一五

周是作竟自有紀。

令人長命宜子孫。

五男二女：

周氏鏡を作るに、自づから紀有り。

人をして長命なら令め、孫と子に宜し。

五男二女あり、：

天王日月。

天王・日・月。

子。

子。

(注)

大阪府黄金塚古墳出土の斜縁神獸鏡(末永雅雄ほか・一九五四)にみる。銘の後半は銹のため釋讀できないところが多いが、七字句を基本とし、そのなかに「天王日月」の四字句を挿入したものとみられる。「紀」・「子」は之部で押韻する。

第一句の「是」は「氏」の假借。銘文五一三の注を参照。作鏡者の「周是」は畫像鏡にも例をみるが、別系統であろう。斜縁神獸鏡では「吾作」が一般的で、作者の姓を記すのは珍しい。

第三句は「五男二女の子どもにめぐまれる」意。銘文五二六に「五男三女」、銘文五三二に「十男五女」という例がある。銘文五二六の注を参照。

●七二六

尙方作竟自有紀。

尙方鏡を作るに、自づから紀有り。

辟去不羊宜古市。

不祥を辟去し、賈市に宜し。

上有東王父西王母。

上に東王父・西王母有り。

令君陽遂多孫子兮。

君をして陽遂とげ令め、孫子多からん。

(注)

大阪府郡川西塚古墳の畫像鏡にみる(富岡・一九二〇・圖版二二下)。京都府トヅカ古墳など踏み返し鏡が一・二面出土しているが(川西・二〇〇四・八四～八九頁)、原鏡は漢鏡七期にさかのぼる。銘文は樋口分類Pb式。起句の前に珠點記號があり、「紀」・「市」・「母」・「子」が之部で押韻する。榜題に「西王母」とある。

第四句の「陽遂」について、カールグレン(K・一四〇)は『淮

南子』覽冥訓の「夫陽燧取火於日」、『周禮』司烜氏の「司烜氏掌以夫遂取明火於日、以鑒取明水於月」、『論衡』率性篇の「陽遂取火於天、五月丙午日中之時、消鍊五石、鑄以爲器、磨礪生光、仰以嚮日、即日來至、此眞取火之道也」を引いて、「陽燧」という採火用の鏡と考えた。しかし、本銘では陽氣がさわる意。銘文五一〇の注を参照。「多孫子」は「宜孫子」の變形であるが、用例は多くない。静岡縣新豐院山D二號墳ほか出土の三角縁吾作四神四獸鏡(京大目録・五〇)の銘文に、

吾作竟自有紀。辟去不羊宜古市。上有東王父西王母。令人長命多孫子。

とあり、徐州系の畫像鏡と三角縁神獸鏡とが「多孫子」をふくめて類似の銘文をもつことが注目される(車崎・二〇〇一)。

●七二七

吳氏作明竟自有紀。

吳氏明鏡を作るに、自づから紀有り。

青龍白虎居左右。

青龍と白虎は、左右に居る。

神魚仙人赤松子。

神魚と仙人の赤松子あり。

八肘泪向法古始。

八爵相ひ向かふは古始のつとに法る。

口人長命宜孫子。

人をして長命なら令め、孫と子に宜し。

便姑章利父母。

姑嬢ぢやうを便やすんじ、父母に利し。

爲吏高遷。

吏と爲れば高遷せん。

(注)

泉屋・五六の獸首鏡にみる。主紋の獸首は三つが正面形、一つが側視形である。外區は銘帶と獸紋帶とからなり、獸紋帶には龍・虎・仙人・鳥・魚などを反時計回りにめぐらす。銘文は角張ったゴシック體ふうの字形で、「紀」・「右」・「子」・「始」・「子」・「母」が

之部で毎句押韻する。尊古齋・五九の「吳氏作」八鳳鏡もほぼ同じ銘文をもつが、起句の前に「…」記號がある。

第一句は尊古齋・五九のように「吳氏作竟自有紀」となるのがふつうで、「明」が衍字であろう。建寧二年（二六九）獸首鏡にも「三羊作明鏡自有方」という例があるが、本銘は銘文七二一の「董氏造作、尙方明鏡」にならった誤りか。作鏡者の「吳氏」は容庚『秦漢金文錄』卷五に「大歳在甲戌初平五年（一九四）、吳師作、宜子孫」銘の洗があり、『華陽國志』蜀志の犍爲郡犍道縣には「大姓吳・隗」とあることから、蜀の工人であつたのかもしれない。

第二・第三句は外區の圖像を指している。「白帟」に「仙人赤松子」が對向し、「青龍」の後ろに「神魚」が配置されている。尊古齋・五九ではこの獸紋が雲氣紋になっている。

第四句の「尉」は「爵」の省字。『隸釋』卷八「玄儒先生婁壽碑」に「徵朱尉司馬」、馬王堆帛書『老子』甲本に「尉而恒自然也」という例がある（李新城・二〇〇六・二五七頁）。「尉」は「雀」に通じ、漢鏡では「朱雀」を「朱爵」と表記するのがふつうである。「沮」は「相」の誤り。「八爵相向」は對向する小鳥が計八鳥あらわされている八鳳鏡のことをいうが、獸首鏡の本例は銘文を借用したもの。「古始」は、古の始、はじめ、太古の意。『老子』第十四章に「能知古始、是謂道紀」とある。銘文七二一の第五句とほぼ同じで、尊古齋・五九も同じ。

第五句の「口」は「令」の省字。尊古齋・五九では「令」とする。徐州系の銘文七二四は「令人長命宜子孫」とほぼ同銘である。

第六句の類似句として銘文六〇九の「便姑公利父母」がある。「便」は、安んずる。「章」は「璋」の省字または假借。『釋名』卷三・釋親族に「俗或謂舅曰章」とある。「姑璋」は「姑公」と同じ

で、夫の兩親、しゅうととしゅうとめ。漢・陳琳「飲馬長上窟行」『玉臺新詠』卷一）に「善事新姑璋、時時念我故夫子」とある。

第七句の「爲吏高遷」は銘文五二四に前出。尊古齋・五九の八鳳鏡は「爲吏高遷車生二耳。位至」と五字多い。

糸卷形の鈕座には反時計回りに「君宜」「高官」「位至三」「大吉利」の銘文をいれる。

鏡影は不詳だが、K・一四五（羅振玉「鏡錄」一一三）には本銘に類似するつぎの銘文がある。

李氏作竟自有紀。

青龍白帟居左右。

神魚仙人赤松子。

八尉相向法古始。

□長命宜子孫、

五男四女凡九子。

便固章利父母。

爲吏高遷…。

李氏鏡を作るに、自づから紀有り。

青龍と白虎は、左右に居る。

神魚と仙人の赤松子あり。

八尉相ひ向かふは古始に法る。

□長命、子孫に宜し。

五男四女、凡そ九子あらん。

姑璋を便んじ、父母に利し。

吏と爲れば高遷し、…。

作鏡者は「李氏」であるが、銘文は特殊な語句までほとんど同じである。第五句第一字は未讀だが、おそらく本銘の「口人」で、第五句の韻字は「子孫」を倒置した「子」であつたのだろう。第六句の「五男四女凡九子」は銘文六〇一の注を参照。第七句の「固」は「姑」の省字または假借で、「固章」は「姑璋」である。

●七一八

吳氏作竟自有紀。
除去非羊宜古市。
爲吏遷車生耳。

吳氏鏡を作るに、自づから紀有り。
非祥を除去し、賈市に宜し。
吏と爲れば（高）遷し、車に耳を生じん。

壽而東王父西王母。

壽は東王父・西王母の如し。

五男四女凡九子。

五男四女、凡そ九子あらん。

大吉利。

大吉利ならん。

(注)

桑名鐵城舊藏の獸首鏡(富岡・圖版二二)にみる。その圖像と銘文は銘文七一七の「吳氏作」獸首鏡に類似し、同一工房の作品と思われる。しかし、主紋の獸面はすべて正面形で、外區の獸紋は雲氣狀に變形している。とくに、鈕に二頭の龍形をあらわした特徴からみて、本鏡は二世紀中ごろから後半に「廣漢西蜀」で制作されたものと考えられる(鶴島・一九九一)。山左・五には同一の銘文を收録し、釋文はカールグレン(K・一四三)にしたがう。「紀」・「市」・「耳」・「母」・「子」は之部で毎句押韻する。

第二句の「非羊」は「非祥」、「古市」は「賈市」。

第三句を富岡は「爲吏遷車生瓦壽」と釋したが、音義からみて「瓦」は「耳」の誤り。K・一四三や山左の讀みが正しい。「車生耳」は銘文五〇七の注を参照。本銘は「高遷」の「高」字が脱落している。

第四句の「而」は「如」の假借。銘文四三八の注を参照。

第五句は銘文七一七の注に引く「李氏」鏡にもみえる。「凡九」の二字を山左は「家」の一字、富岡謙藏は「冢」の一字と讀み、富岡の字釋にしたがつて駒井和愛(一九五三・四四・四五頁)は「冢子」を跡取り息子と解釋したが、銘文七二〇には同文がみえるから、K・一四三の釋讀にしたがうべきだろう。

鈕座の糸卷形には「位」・「至」・「三」・「公」の銘文をいれる。

●七一九

三羊作竟自有紀。

三羊 鏡を作るに、自づから紀有り。

除去不羊宜古市。

不祥を除去し、賈市に宜し。

令人長命不知老。

人をして長命なら令め、老いを知らず。

五男四女九子父。

五男四女あり、九子の父たらん。

男爲王侯女爲主。

男は王侯となり、女は主とならん。

壽而東王父西王母兮。

壽は東王父・西王母の如し。

(注)

トロント博物館藏の銘帶五獸鏡(歐米・圖版四八)にみる。平緣神獸鏡に似た周緣で、銘帶とC字雲氣紋帶とをいれる。七字句を基本とする銘文は、起句の前に五目記號をいれ、之部の「紀」・「市」、幽部の「老」、魚部の「父」、侯部の「主」が叶韻する。之部・幽部・侯部の叶韻例は銘文六一〇にあり、カールグレン(K・一九七)は「紀」・「市」・「父」・「主」が押韻するという。

第二句の類似句として「吳氏」獸首鏡の銘文七一八の「除去非羊宜古市」がある。「羊」は「祥」、「古」は「賈」の假借。

第三句の類似句として銘文五一七の「令人陽遂不知老兮」などがある。意味の近い「長命」と「不知老」とが重複しているのはめずらしい。

第四句は銘文七一八の「五男四女凡九子」の「凡」字を脱して句末に「父」字をいれている。押韻からは魚部の「父」は衍字とみなされるが、ここでは「五男四女の九子の父」の意と解した。

第五句の「主」は、『漢書』高帝紀下に「女子公主」とあり、その顔師古注に「或云、主者、婦人尊稱。」とある。ここでは王侯貴族の夫人になることをいう。

第六句は銘文七一八の第四句に同じ。

●七二〇

三羊作竟自紀。

明而日月□未有。

□大富保母。

五男四女凡九子。

女宜賢夫。

男得好婦兮。

(注)

簠齋・上一五の獸首鏡(陳介祺・六九)にみる。七字句を基本とする雜言體で、之部の「紀」・「有」・「母」・「子」・「婦」と魚部の「夫」とが叶韻する。K・一四九は「夫」もふくめてすべて押韻するとする。釋文はおもにK・一四九にしたがう。

第一句を羅振玉「鏡錄」一一〇は「竟」と「紀」のあいだに二字脱字とするが、陳介祺・六九の拓本では「自」がみえ、「有」一字だけの脱字である。作鏡者の「三羊」は、銘文六〇六の注に引いた盤龍鏡(小校一五・五五)に「三羊宋氏作竟善有意」とあり、もとは淮派の工房名であった。建寧二年(一六九)獸首鏡には「三羊作明鏡自有方」の銘文があり、本鏡と紋様構成が近似する。

第二句の「而」は「如」の假借。銘文四三八の注を参照。下三字は「世少有」となるのがふつうだが、未讀の一字は「曾」や「嘗」のようにもみえる。しかし、銘文五四一では「未賞(嘗)有」という語順である。

第三句は五字しかない。末字の「母」が之部で押韻していることから、二字が脱落しているのであろう。未讀の第一字をK・一四九は「得」と推測し、羅振玉「鏡錄」一一〇は「保」と「母」とのあいだに「父」が脱落しているとする。建寧二年(一六九)鏡には

三羊鏡を作るに、自づから紀(有)り。

明なること日月の如く、□未だ有らず。

□大いに富み、(父)母を保たん。

五男四女、凡そ九子あらん。

女は賢夫に宜し。

男は好き婦を得ん。

「買者大利家富昌。……父嫗相守壽命長。」という類似句がある。

第四句は銘文七一八の第五句と同文。建寧二年(一六九)鏡には「十男五女爲侯王」とある。

第五句と第六句とは對句である。「賢夫」は、かしこい夫。『漢書』張耳傳に「父客謂女曰、必欲求賢夫、從張耳。」という例がある。「好婦」は、よき妻。古樂府「隴西行」(『玉臺新詠』卷一)に「好婦出迎客。顏色正敷愉。」とある。

鈕座の糸卷形には裝飾的な字形で「長」・「宜」・「子」・「孫」の銘文をいれる。

●七二一

正月丙午日董氏造作、

尙方明竟自有紀。

青龍白虎居左右。

神魚仙人赤松子。

八肘相向法古始。

長宜子孫。

(注)

正月丙午の日に、董氏の造作せる、尙方の明鏡は、自づから紀有り。青龍と白虎は、左右に居る。神魚と仙人の赤松子あり。八肘相ひ向かふは古始に法る。長く子孫に宜し。

河南省新郷市金燈寺四七號墓の八鳳鏡(鄭州大學歷史學院考古系はか・二〇〇九)にみる。報告は作鏡者の「董氏」から讀みはじめるが、七字句を基本とするなかで「長宜子孫」だけが四字句と短く、「孫」字が長い字形にあらわされることから、それが末句となるのである。第二句から第五句までの七字句は「紀」・「右」・「子」・「始」が之部で毎句押韻する。

報告が第一句の「正月」を「胥」、「丙」を「夫」、「午日」を「昇」、「氏」を「尹」と讀むのは誤り。「丙午日」の「日」は、ここでは

「日中」の意味であろう。章和元年（八七）盤龍鏡の注を参照。紀年銘鏡では鑄造に好ましいとされる「五月丙午日」が多いが、延熹九年（一六六）や永康元年（二六七）獸首鏡では「正月丙午日」とある。陽氣最大となる「丙午の日中」にふさわしい月として正陽月という意味の「正月」を選んだのであろう。

第二句の「尙方」は、元興元年（二〇五）環狀乳神獸鏡に「廣漢造作、尙方明竟」、永壽三年（二五七）獸首鏡に「造作尙方兮明竟、廣漢西蜀」とみえる。第一句に記された作鏡者の「董氏」は、山東省蒼山縣柞城遺址（劉心健ほか・一九八三）から出土した「蜀郡董氏造」銘の銅洗や容庚『秦漢金文錄』卷五所收の「蜀郡董是作」銘の銅洗と同じ「蜀郡董氏」であるならば、本鏡は「尙方」の發注により廣漢郡に隣接する蜀郡の「董氏」工房が制作したものと考えられる。また、晉・常璩『華陽國志』蜀志には犍爲郡資中縣の大姓として「王・董・張・趙爲四族」という。

第三・第四句は外區の圖像を説く。外區には四方に龍・虎・鳥・九尾狐を配し、それぞれの胴部には便化した日月錢紋がある。第三句はその龍と虎を「青龍白虎」という。その虎の前にある魚形が「神魚」で、龍の前にあるのが「仙人赤松子」であろう。「神魚」は、めでたい魚。『漢書』宣帝紀に「東濟大河、天氣清靜、神魚舞河。幸萬歲宮、神爵翔集。」とあり、曹植「仙人篇」（『藝文類聚』卷四十二）に「玉樽盈桂酒、河伯獻神魚。」とある。

第五句の「尉」は「爵」の省字。報告が「八」字を脱し「爵」を「既」と釋すのは誤り。銘文七・七第四句に同じ。「八爵相向」は對向する一對の小鳥が四組、計八鳥が内區の圖像にあらわされていることをいう。カールグレン（K・一四五）は師曠『禽經』（宋・陸佃『埤雅』卷七所引）に「一鳥曰佳。……八鳥曰鸞。」とあり、『詩經』

小雅・采芣に「八鸞瑤瑤」とあることから、八羽の不死鳥がリンリントとさえずる意がふくまれると説いた。また、これまで「夔鳳鏡」と呼ばれていたこの種の鏡について、西田守夫（二九八九）はこの銘文をもとに「八鳳鏡」と改めるべきことを提唱している。隅丸方形の鈕座には「君」・「宜」・「高」・「官」の銘文を反時計回りにいれる。

●七二二

成氏作鏡四夷、
多賀國家人民息。

胡虜殄滅天下復。

風雨時節五穀孰。

長保二親得天力。

傳告後世樂無亟。

乘雲驅馳、

參駕四馬、

道從羣神、

宜孫子公。

（注）

京都府トヅカ古墳の畫像鏡（富岡・圖版二）にみる。熊本縣江田船山古墳など日本から踏み返し鏡が三面出土しているが（川西・二〇〇四・九〇～九九頁）、原鏡は漢鏡七期にさかのぼる江南系と考えられる。第六句までが銘文四五四を改變した林分類のNb式で、職部の「息」・「力」・「亟」と覺部の「復」・「孰」とが叶韻し、第七句からは内容の異なる四字句を加えているが、韻をふんでいない。ただし、K・一三四は銘末を「宜孫子」とし、之部の「子」が第六句までと

成氏鏡を作るに、四夷（服す）。
多く國家を賀し、人民息ふ。

胡虜殄滅して、天下復す。

風雨は時節あり、五穀熟す。

長く二親を保ち、天祿を得。

後世に傳告し、樂しみ極まり無し。

雲に乗りて驅馳し、

參駕するに四馬をもつてし、

羣神を導き従ひ、

孫と子に宜しく、公ならん。

押韻したとする。

第一句の作鏡者を富岡謙藏は「公□氏」とし、第二字を不明としたが、車崎正彦(二〇〇七)は「公戚氏」と讀んで「公叔氏」の假借とし、『論語』憲問にみえる「公叔文子」の魏・何晏注に引く孔安國の説に「公叔文子、衛大夫公孫拔。文、諡。」とあることから「公孫氏」と讀みかえる。しかし、漢代に「公孫氏」を「公叔氏」とした例はない。むしろ「公」につづく字は「成」の異體字ではあるまいか。「公成氏」は、『元和姓纂』に「衛公成之後以諡爲氏」とするが、宋・鄭樵『通志』氏族略五には「成公氏、姬姓、衛成公之後以諡爲氏」とあって、「公成氏」は「成公氏」とするのが正しい。したがって、本銘は「公」字を銘末とし、作鏡者を「成氏」と讀むべきであろう。本銘において「公」字と「成」字のあいだが「子」字と「公」字のあいだに比べてひろく、その考えを補強する。「成氏」は周文王の子の叔武が封じられた成國に由來し、『通志』は「成氏」の別表記として「郕氏」や「盛氏」をあげる。ただし、「成氏」作の鏡はほかに知られていない。あるいは「子」字と「公」字が接していることから、踏み返しのときに部分的に改變したのかもしれない。金偏の「鏡」字につくるのは、漢鏡五期の「杜氏」・「呂氏」鏡などにみる特徴である。韻字の「服」字が脱落している。第二句の「多」は、厚く。銘文四五四の注を参照。王莽代の「新家」や銘文五四三の「君家」を「國家」に改めている。第三句を銘文五四三では「胡羌除滅」としていたが、漢鏡四期の「胡虜殄滅」に戻している。第四句の「孰」は「熟」の省字または假借。第五句の「力」は「祿」の假借。小校一五・四七の「張氏」盤龍鏡は「得天福」とする。

第六句の「亟」は「極」の省字または假借。

第七句は内區にあらわされた騎馬の群れをいうのであろう。反対側にあらわされた馬車の前には三段に重なった雲氣があり、東王公と西王母のあいだを騎馬や馬車が疾駆するさまを表現している。

第八句は四頭だての馬車の圖像を指している。「參」は「驂」で、そえ馬。「參駕」は王逸『魯靈光殿賦』(『文選』卷十一)の李善注に「古王子喬辭曰、王子喬參駕、白鹿雲中遨。」とある。「四」は「駟」の省字で、サソリ座の「天駟」の馬。『晉書』天文志上に「房四星、爲明堂、……亦曰天駟、爲天馬、主車駕。南星曰左驂、次左服、次右服、次右驂。」とある。ただし、圖像に描かれているのは三頭だての駟車と二頭だての戰車である。

第九句の「道」を車崎は「導」と讀むが、「道」は「導」の省字または假借である。『詩經』大雅・蕩之什の孔穎達疏に「道音導、本亦作導。」とある。林巳奈夫(一九八二)は「導」は先導、「從」は後續の從者と解釋する。

●七二三

尙方作竟有紀岡。	尙方鏡を作るに、紀剛有り。
左龍右席辟非羊。	左龍と右虎は、非祥を辟く。
君子買者宜侯王。	君子の買ふ者は、侯王に宜し。
夫妻相宜、	夫妻相ひ宜しく、
子孫滿堂。	子孫堂に滿つ。
壽如金石、	壽は金石の如く、
延壽未央。	壽を延ばし未央きず。
多賀國家人民息。	多く國家を賀し、人民息ふ。
羌胡盡□四夷服。	羌胡は盡く□、四夷服す。

天下大息兮。

天下大いに息はん。

(注)

ダヴィッド・ワイル舊藏の獸首鏡(歐米・圖版三四)にみる。雲氣のあいだの主紋は獸面のかわりに獸紋がはいり、その外側に連弧紋帯、銘帯、雲氣紋帯がめぐる。毎句韻の七字句と隔句韻の四字句からなり、「岡」・「羊」・「王」・「堂」・「央」が陽部で押韻し、第八句で換韻して「息」・「服」・「息」が職部で押韻する。

第一句の「岡」は「剛」の省字。「紀剛」は「紀綱」で、規律の意。銘文四〇三に「黃常元吉、有紀剛」とあり、その注を参照。また、『白虎通』三綱六紀に「何謂綱紀。綱者、張也。紀者、理也。大者爲綱、小者爲紀、所以張理上下、整齊人道也。人皆懷五常之性有親愛之心、是以綱紀爲化、若羅網之有紀綱、而萬目張也。『詩』云、臺臺文王、綱紀四方。」とある。「自有紀」となる銘文が多いが、ここでは陽部の韻字として「岡」を加え、鏡の堅實な制作を強調したのであろう。

第二句の「非羊」は「非祥」で、不祥と同じ意味。銘文七一八に「除去非羊」とあった。

第三句の「君子」は、徳の高い立派な人。『儀禮』郷飲酒禮に「以告於先生君子可也」とあり、鄭玄注に「君子、國中有盛徳者。」という。鏡では銘文四三六に「息念母以象君子」という例があり、「君子買者」はめずらしいが、建安廿一年(二二六)對置式神獸鏡に「人(仁)者服之」という例がある。

第四句の類似句に居攝元年(後六)連弧紋銘帶鏡の「夫妻相喜、日益親善」や銘文五一の「夫妻相保」、銘文五二六の「夫妻相重」など漢鏡五期の淮派の鏡に散見する。

第五句は子孫が家にあふれるほど多いことを祝頌する。「滿堂」

の用例として銘文三〇二の「錢金滿堂」がある。

第八句第一〇句は王莽代の銘文四五四に「王氏昭竟三夷服。多賀新家人民息。胡虜殄滅天下復。」とあり、銘文五四三に「龍氏作竟四夷服。多賀君家人民息。胡羌除滅天下復。」とあったのを改變して挿入したもの。換韻しているのも、そのためである。

第九句の「羌」はチベット系の遊牧民族、「胡」は匈奴など北方の遊牧民族のこと。後漢代には廣漢郡や蜀郡などに羌族を管轄する屬國が設置されたが、その反亂にしばしば苦しんだ。未讀の第四字は走繞につくり、走り去る、逃げる、という意味の異體字であらう。銘文五二二に「胡虜殄滅去萬里」とあるのが近い。

鈕座の糸卷形には裝飾的な字形で「長」・「宜」・「子」・「孫」の銘文をいれる。

類似の主銘をもつ獸首鏡が二例ある。一面は西安市棗園七號墓の出土鏡で(韓保全ほか・一九九二)、

吾作明竟、幽凍金剛、……相樂央、夫妻相宜、其□命昌、吏□□□侯王。

と讀まれている。もう一面は湖南省醴陵市烈士塔村の出土鏡(張振球・一九八七)で、

大富貴、夫妻相宜、子孫滿堂、爲吏高升、位至侯王、買者萬年、其師命長、□□高山四。

と讀まれている。「其師命長」は末句になることが多いから、これは銘文のはじまりを讀み誤っているのであろう。

●七二四

尙方作竟自有己。 尙方 鏡を作るに、自づから紀有り。
除去不陽宜古市。 不祥を除去し、買市に宜し。

延年益壽宜孫子。
個蟲大戴從是起。

左有青龍、
未福。

有自方尙、
去凶、

使君高遷、
位至三公。

(注)

年を延し壽を益し、孫と子に宜し。
田の蟲 大いに戴ひ、是れ従り起たん。

左に青龍有り、
福を來さん。

尙方 自づから(紀) 有り、
凶を去り、

君をして高遷ならしめ、
位 三公に至らん。

開明堂・三七の環狀乳神獸鏡にみる。内區主紋はほぼ同形の神像と獸形を三組ずつめぐらし、鈕には口を開け目をいからせた獸面をあらわす。圖録の指摘するように、獸面鈕の類例に浙江省紹興市出土の環狀乳神獸鏡(浙江修訂・四四)があるのみである。「尙方」作の環狀乳神獸鏡は「廣漢西蜀」が先行していること、「廣漢西蜀」では鈕に龍形や梅鉢形の紋様をあしらった鏡が二世紀中ごろから後半にかけて盛行していること(鶴島・一九九二)、神獸鏡の銘文は四字句が多いなかで某「作竟自有己(紀)」ではじまる七字句の銘文は「廣漢西蜀」の鏡に多くみられること、そのいっぽうで本鏡の類例が紹興から出土し、本銘に類似する銘文七二五をもつ重列式神獸鏡は江南での制作と考えられることから、本鏡は「廣漢西蜀」の「尙方」から工人が江南に移動して制作した可能性があらう。起句の前に二本線の記號があり、反時計回りにめぐらされる。上四句は整った七字句で「己」・「市」・「子」・「起」が之部で押韻するが、第五句以下は四字句と不完全な二字句とからなり、第七句だけは「有自方尙」と逆向き(時計回り)になっていることから、錯簡があるのであらう。ただし、第六句末の「福」は職部で上四句と叶韻する

から、第五句は本来「左有青龍」と「未福」とで一句をなしていた可能性がある。

第一句の「己」は「紀」の省字または假借。銘文五〇七などに「自有紀」という先行例がある。

第二句の「陽」は「祥」の假借。漢鏡四期・五期に「辟」去不羊(祥)という用例が多いが、「除去」は銘文七二八の「除去非羊宜古市」や銘文七一九の「除去不羊宜古市」など例が少ない。

第四句を圖録は「□□大戴□具□」と釋すが、上二字は「個蟲」、下三字は「從是起」である。「個」は「田」の繁字または假借。『易經』繫辭下の「以佃以漁」に唐・陸德明『經典釋文』卷二は「佃、音田、本亦作田。」という。「蟲」は動物の總稱で、ここでは農業に好ましい瑞獸をいう。章和年間(八七―八八)盤龍鏡に「刻畫云氣龍席虫」とあり、「龍席」と併記されている。「戴」は、よろこぶ、感ずる。『吳志』朱桓傳に「士民感戴之」とあり、『舊唐書』韋處厚傳に「天地百神之所鑒戴、億兆八紘之所瞻戴」とある。

第六句は「未福」とあるが、「未」は「來」の誤字であらう。第八句の「去凶」と連續する四字句であったのが、あいだに第七句が割りこんだものかもしれない。

第七句は本来、第一句の「尙方作竟自有己」を書くはずであったが、誤って逆向きに書き、「作」「竟」「己」の三字を脱落させて四字句にしている。あるいは最初にここから鑄型に彫りはじめ、まちがいに氣づいて第一句から彫り直したものか。

第九句の使役の「使」は銘文四〇九の「使此身、作三陳」など前漢代には用例があるが、後漢鏡では銘文五一〇の「令人陽遂」など、ほとんどが「令」である。

本鏡の半圓方形帯には方格に一字ずつ銘文があり、「天」「王」

「日」「月」を三たびくりかえしている。

●七二五

盖方作竟自有己。

余去不羊宜古市。

青龍白虎居左右。

與天相保無窮止。

東有王父、

西有王母。

仙人子喬赤松子。

天王日月爲祖始。

位至三公宜子孫子。

壽命久長、

生如山石、

富貴宜侯王、

合煉三黃明竟起。

大吉。

盖方鏡を作るに、自づから紀有り。

不祥を除去し、賈市に宜し。

青龍と白虎は左と右に居る。

天と與に相ひ保ち、窮まり止む無し。

東に王父有り、

西に王母有り。

仙人の子喬と赤松子あり。

天王・日・月を祖始と爲す。

位三公に至り、孫と子に宜し、

壽命久長ならん、

生は山石の如し。

富貴にして、侯王に宜し、

三黃を合煉し、明鏡起こせり。

大吉ならん。

(注)

上海博物館蔵の重列式神獸鏡(上海・六六)にみる。外區の下から時計回りに銘文がめぐり、七字句の「己」・「市」・「右」・「止」・「母」・「子」・「始」・「子」・「起」が之部で押韻する。

第一句の「盖」は「羊+皿」の文字であることから、笠野毅(一九九三b)は「羊」の繁字で「尙」の假借とみなし、「盖方」は「尙方」であるとした。本銘の第一・第二句は銘文七二四とほぼ同じであるから、作鏡者の「尙方」を「盖方」に置換したものかもしれない。しかし、「盖」は銘文七四五に「盖作明竟」とあり、『續通志』

氏族略に「盖氏、出自齊大夫食采于盖、以邑爲氏。」とあることから、作鏡者の姓であった可能性もある。そのばあい、「方」は「房」または「坊」の假借で、工房の意味となる。魏・何晏「景福殿賦」(『文選』卷十一)の「屯方列署、三十有二」の李善注に「聲類」を引いて「坊、別屋也。方與坊古字通。」という。あるいは、術、神仙術をもつ人、方士などの含意があるかもしれない。『史記』扁鵲傳の「問中庶子喜方者」に「索隱」は「喜、好也、愛也。方、方技之人也。」と注している。漢末に黃巾の亂を主導した張角は領域を三十六方に分けたが、『後漢書』皇甫嵩傳に「方猶將軍號也。大方萬餘人、小方六七千、各立渠帥。」とあり、「方」は民間の道術において好んで用いられた。

第二句の「余」は「除」の省字または假借。圖錄は第六字を「番」と釋したが、「古」の誤釋で「賈」の假借。

第三句は銘文七一七や銘文七二二など四川系では「自有紀」につづいて用いられている。

第四句の「與天相保」は銘文五三七に「與天相保順陰陽」という先例がある。また、銘文六〇六の注を参照。末字を圖錄は「之」と讀むが、拓本の字形は「止」である。

第五・第六句は鈕の左右に東王公と西王母の圖像があることをいう。淮派の銘文六一〇に「左有王父坐行道。右有王母。」という例があったが、めずらしい。

第七句のように神仙名を羅列する例に淮派の銘文五一八の「仙人王僑赤松子」、銘文五二四の「山人王喬赤相子」、銘文六〇三の「東王公西王母。仙人子喬赤誦子」があり、四川系の銘文七二一や銘文七一七には「神魚仙人赤松子」とあった。

第八句の「天王」は「天帝」である(林巳奈夫・一九八七)。延熹

二年（一五九）環狀乳神獸鏡の注を参照。ここでは「天王・日・月」が神仙たちの始祖というのである。

第九句の下二字を圖録は未讀であるが、拓本により「子孫子」と讀む。最初の「子」は衍字であろう。

第一一句の第一字を圖録は「主」と讀むが、「生」の誤釋。類似句に『漢書』郊祀志下の「與山石無極」があり、顏師古注は「言獲長壽、比於山石無窮也。」という。「生如山石」は永康元年（二六七）獸首鏡など四川系の鏡銘に散見する。

第二三句の「合凍」は、合わせ鍊ること。銘文七三八の方格銘に「合凍五金成」、熹平三年（二七四）獸首鏡に「合凍白黃」とある。「黃」は銅原料であり、「三黃」は「幽凍三商」の「三商」と同じように三種の銅原料をいうのであろう。

湖北省鄂州市新廟司徒村出土の重列式神獸鏡（鄂城・一一六／鄂州・二四九）は、圖像構成が本鏡と類似し、「吾作明竟自有己」ではじまる同類の銘文をもつ。讀めない文字が多いが、最後の三句はつぎのように釋讀されている。

東王公西王母。

東王公と西王母あり。

朱人子喬赤松子。

朱人の子喬と赤松子あり。

長予天公廿。

長く天公と與にし、廿。

「朱人」は「仙人」の書きまちがいか。末句の「予」は「與」の假借。銘文五一五にみたように「天公」は天神であるが、黃巾の亂を主導した張角が「天公將軍」を自稱したように、漢末には最高位の天神に位置づけられることもあった。

●七二六

田氏作明竟□□□有、田氏明鏡を作るに□□□有り。

服者男爲公卿。

服する者は、男は公卿と爲り、

女爲諸王。

女は諸王（婦）と爲らん。

曾年益壽、

年を増し、壽を益さん。

子孫蕃昌。

子孫は蕃昌ならん。

千秋萬歲不知老、

千秋萬歲、老いを知らず。

長宜買市兮。

長く買市に宜し。

（注）

兵庫縣西求女塚古墳出土の畫像鏡にみる（神戸市教育委員會・二〇〇四）。銘文は七字句と四字句がまじる雜言體で「卿」・「王」・「昌」が陽部で押韻する。榜題に「大王公」とある。

第一句の「田氏」は漢鏡六期の畫像鏡に初出する作鏡者だが、本鏡とは銘文と圖像表現が異なる。未讀の三字のうち第七字を報告は殘劃から「門」と讀む。

第二・第三句のように男女の出世を祝頌した吉祥句には、銘文四三五の「男爲侯、女嫁王」や同時期の銘文七一九の「男爲王女爲主」などがある。古鏡・中一六裏の方格規矩鏡に「服者男爲封侯、女王帝」、銘文六〇四に「男封侯女王婦」とあることから、本銘では「帝（婦）」字が脱落しているのかもしれない。

●七二七

劉氏竟與衆異、

劉氏の鏡、衆と異なり、大いに吉利にして、侯王に宜し。

買能常服者、

買ひて能く常に服する者は、

子孫蕃昌。

子孫は蕃昌ならん。

師命長。

師の命は長からん。

(注)

ケルン東洋美術館藏の浮彫式獸帶鏡(精華・九五上)にみる。雜言體の銘文は「王」・「昌」・「長」が陽部で押韻する。

第一句の「與衆異」は銘文五四四・五四五などに散見される。

第三句「買能常服者」は珍しい語句だが、中國國家博物館藏の「馮家作」四獸鏡に「能常服之爲者命長」という類似句があると報告されている(楊桂榮・一九九三a・圖一二八)。

●七二八

吾作明鏡取法星。

吾れ明鏡を作るに、法星に取る。

遇即還行中則才、

遇へば即ち還行し、中れば則ち在る。

賢聖神仙坐東西、

賢聖なる神仙は東西に坐す。

霜護順和氣精。

(肅)霜は順を護り、和氣は精ならん。

壽益長。

壽は益ます長からん。

願常服之、

願はくは常へに之れを服し、

富貴安□。

富貴にして安(樂)ならんことを。

子孫番昌。

子孫は蕃昌ならん。

師命長。

師の命は長からん。

(注)

江蘇省徐州市の楊金平氏藏の斜縁同向式神獸鏡にみる。内區の圖像は、向かつて鈕の左に東王公、右に西王母、上に龍形、下に馬をあらわす。その銘文を楊金平(二〇一〇)は「吾作明鏡、取□星遇、既還行中、則才賢聖、神仙坐東西、□護順和氣、精壽益長、願常服之、富貴安□、子孫番昌、師命長」と四字句に釋讀するが、楊氏提供の寫真にもとづいて釋文を改めた。第四句までの前半がおもに七字句、後半は三字句と四字句からなる雜言體である。耕部の

「星」・「精」と陽部の「長」・「昌」が叶韻する。耕部と陽部の叶韻は銘文五三三などに前例がある。

第一句の「法星」は熒惑、すなわち火星を指す。『史記』天官書の『正義』に引く『天官占』に「熒惑爲執法之星、其行無常」とあり、また『淮南子』天文訓に「司無道之國、爲亂爲賊、爲疾爲喪、爲饑爲兵。出入無常、辯變其色、時見時匿」とある。

第二句は「法星」の運行をあらわしたものの。「遇」は、接近、「還行」は、戻ること。「中」は、あたる、「才」は「在」の假借。『史記』宋微子世家に宋景公の說話として「熒惑守心。心、宋之分野也。景公憂之。」とあり、熒惑は不吉の相につながる例が多い。鏡銘にあらわされたのは、『淮南子』天文訓に「南方火也。其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏。其神爲熒惑」とあるように、火や夏など鑄造に吉となるものと關係するからであろう。『晉書』天文志中には「熒惑有禮」との記述もある。

第三句は鈕の左右にあらわされた東王公・西王母の圖像をいうが、「神仙」を「賢聖」と形容するのは異例。

第四句の「霜」は駿馬の名で、その圖像は鈕の下にあらわされている。『左傳』定公三年に「唐成公如楚、有兩肅爽馬、子常欲之」とあり、孔穎達『正義』に「爽、或作霜。賈逵云、色如霜。馬融說、肅爽、鴈也。其羽如練、高首而脩頸、馬似之、天下稀有、故子常欲之。」とある。「肅霜」は鏡銘ではほかに例がない。この句は圖像にあらわされた雁のような駿馬のはたらきで、天の運行が順調で精氣があふれることを祝頌したのであろう。

第六・第七句は、桃陰・二四の同向式神獸鏡に「願常服之、永得所驪」、銘文七二七に「買能常服者、子孫番昌」、銘文七三五に「願常服爲、富貴番昌」という類似句がある。本鏡を所持することの効

能を以下に示したものの。第七句の末字は缺損しているが、「樂」であろう。

●七二九

尙方作竟、

明如日月、

不已壽、

如東王公西王母、

長宜子孫。

位至三公、

君宜高官。

尙方鏡を作るに、

明るきこと日月の如し。

已まざる壽は、

東王公・西王母の如し。

長く子孫に宜し。

位三公に至らん。

君高官に宜し。

(注)

中國國家博物館藏の獸首鏡〔楊桂榮・一九九三a・圖九四／古鏡・中九後／K・一一七〕にみる。第三・第四句をのぞいて四言句からなり、文部の「孫」と元部の「官」のみ叶韻する。

第二句の「明如日月」はK・二三一（畫像鏡）やK・二三八（方格規矩四神鏡）など徐州系に散見する。

第三句を楊桂榮は「可以壽」と釋したが、K・一一七の讀みにしたがう。

第四句の「東王公」を楊桂榮は「東王父」とする。鏤のため拓本ではわからない。K・一一七にしたがう。

四川系の鏡を特徴づける龍形鈕をもち、糸卷形の鈕座には銘文のかわりに獸面をいれる。

●七三〇

吾作目竟、

吾れ明鏡を作るに、

幽凍三岡。

巧工刻之成文章。

上有四守辟羊。

至富泉氏從。

大富宜牛羊。

爲吏高升。

三剛を幽鍊せり。

巧みなる工は之れを刻み、文章を成す。

上に四獸有り、（不）祥を辟けん。

致すこと、福祿是れ從^{あつ}まらん。

大いに富み、牛羊に宜し。

吏と爲れば高升せん。

(注)

陳介祺から富岡謙藏の舊藏をへて、いま和泉市久保惣記念美術館（久保惣・三七）に所藏する獸首鏡の銘文。ふつうの獸首鏡のように正面形の獸面ではなく、雲氣のあいだから斜めに獸首がのびる主紋をもつ。末句と起句のあいだに「・」と「…」の記號がある。四字・五字・七字句からなる雜言體で、陽部の「鏡」・「岡」・「章」・「羊」・「羊」と東部の「從」とが叶韻する。陽部と東部の叶韻例は銘文二二九・四〇三・五四二などに例がある。

第一句の「目」は「明（明）」の省字。明・張自烈『正字通』に田藝衡の説を引いて「古皆从日月作明、漢乃从目作明、然則从明廢明可也。」という。

第二句の「幽」は「明」の對で（駒井・一九五三・三八～四三頁）、「凍」は「鍊」の假借。銘文四〇一および銘文七三一の注を參照。「岡」は「剛」の省字で、「三剛」は「三商」と同じく三種の堅強な金屬をいう。元興元年（一〇五）環狀乳神獸鏡の注を參照。李新城（二〇〇六・二四五頁）は「剛（岡）」と「商」とは韻部が同じで聲母が近く、假借の可能性があるという。カールグレン（K・一七六）は青銅鏡の主要な原料である銅・錫・鉛を指すと考えたが、笠野毅（一九八三・二六八頁）はこれを銅・錫・銀とする。いずれにせよ「幽鍊三剛」は、三種の堅強な金屬を陰陽にしたがつて密かに精鍊

することである。

第一・第二句はこの時期に盛行する四言句だが、第三句は漢鏡四期より用いられてきた七言句である。

第四句の「守」は「獸」、「羊」は「祥」の假借。「上有四獸」は主紋として四獸があらわされていることをいう。「辟」と「羊」のあいだに「不」字が脱落している。

第五句の「至」は「致」、「富」は「福」、「泉」は「祿」の省字または假借、「氏」は「是」の假借である。銘文五一三の注を参照。「氏從」を富岡・六七頁は未讀であり、容續・三三が「氏范」と讀むのは誤り。「從」は、あつまる。『大戴禮記』夏小正に「鹿・人從・鹿・人從者、從、群也。」とある。同時期の神獸鏡では「福祿是從」と四言句になるのがふつうであり、「至」は衍字であろう。

第六句の「大富」は、銘文四一二の「家大富」や銘文五一四の「家當大富」のように用いられるのがふつうで、「家」または「家當」が脱落しているのであろう。「宜牛羊」は銘文四一三・四二三に既出。しかし、漢鏡ではめずらしい。

第七句は漢鏡五期の銘文五二〇～五二二などに前出。

鈕座の糸卷形には裝飾的な字形で「長」・「宜」・「子」・「孫」の銘文をいれる。

七三一

□氏作竟、

幽涑三商。

規矩無社、

周刻萬畝。

四紀豫元、

□氏鏡を作るに、

三商を幽鍊せり。

規矩止まること無く、

萬畝に彫刻せり。

四紀は元^{はめ}に豫^のり、

六合設。

東王父西王母、

距虛空。

統得序道、

祇靈是興。

白牙陳樂、

衆神見容。

天禽白精竝存、

□□□□□。

六合に設け（張）る。

東王父・西王母あり、

巨を虛空に（通）ず。

徳を統べ道を序せば、

祇靈はれ興る。

伯牙陳樂、

衆神容を現はす。

天禽・白精は竝び存し、

□□□□□。

（注）

五島美術館藏の畫像鏡（紹興・七）にみる。圖像紋様の構成は銘文七二二の畫像鏡と類似し、江南系と考えられる。冒頭の作鏡者は「王」と讀まれているが、報告した梅原末治は末句から第一句第一字までは磨損していたのを後補した字という。ここでは不明字としておく。四言句を基本とし、陽部の「商」・「畝」、東部の「空」・「容」、蒸部の「興」が叶韻する。

第二句の「幽」は「明」の對で（駒井和愛・一九五三・三八～四三頁）、「涑」は「鍊」の假借。銘文四〇一の注を参照。「幽」は『淮南子』天文訓に「天道曰圓、地道曰方。方者主幽、圓者主明。明者吐氣者也、是故火曰外景。幽者、含氣者也、是故水曰內景。吐氣者施、含氣者化、是故陽施陰化。」とあり、「涑」が「水」にしたがうのに對應する。「三商」については、畢沅・阮元『山左金石志』が、『儀禮』士昏禮の鄭玄注に「日入三商爲昏」とあり、賈公彥疏に「商」を「商量」すなわち漏刻の名としていることから、銅精鍊の時間を示すものとみなした。しかし、「三商」は「廿七商」・「九章」・「宮商」などの語句と置換することがあり、「合涑白黃」・「百鍊

清銅」などの類似句があることから、カールグレン(K・一七六)は『漢書』律曆志の「協之五行、則角爲木、商爲金、徵爲火、羽爲水、宮爲土」を引いて、五行で「商」は「金」で「三商」は「三つの金屬」すなわち青銅鏡の主要な原料である銅・錫・鉛を指すと考えた。しかし、笠野毅(一九八三・二六八頁)は、これを銅・錫・銀とする。いずれにせよ「幽鍊三商」は、三種の堅強な金屬を陰陽にしたがつて密かに精鍊することである。

第三句の「規矩」は、コンパスとさしがね。轉じて、規則、さまり。『禮記』經解に「禮之於正國也、……規矩之於方圓也。……規矩誠設、不可欺以方圓。」とあり、孔穎達疏に「規、所以正圓、矩、所以正方。」とある。あるいは、さきの『淮南子』天文訓に「天道曰圓、地道曰方。方者主幽、圓者主明。」とあり、圓と方に象徴される宇宙の全體をあらわしたもののか。「社」は「止」の繁字で、梅原が「記」と釋したのは誤り。字形は「巫」のようにもみえ、浙江・六〇の銘帶神獸鏡には「規矩無涯」とある。「無極」も「無涯」も際限がないという意味で、「無止」と同じ。

第四句を梅原は「周刻萬靈」と讀むが、「靈」は「𩇑」の誤釋である。「周」をカールグレン(K・一七七)は「あまねく」の意とするが、駒井和愛(一九五三・五二頁)が説くように「彫」の省字または假借である。駒井はまた「𩇑」は「疆」の省字で、『國語』晉語一の韋昭注に「疆、境也。」とあり、「萬疆」は、あらゆるところと解釋する。漢鏡七期の神獸鏡では、この第三・第四句は「周刻無社配像萬疆」となることが多い。なお、駒井がこの「無社」を「典祀」と釋したのは誤りである。

第五句を梅原は「四紀豫元六合設」と七字句に讀むが、「四紀豫元」と「六合設(張)」の四言二句に分けられる。「四紀」は、四つ

の時日、春夏秋冬の四時。「四氣」に同じ。環狀乳神獸鏡の浙江・五六やK・一八二には「四氣象元」とある。「豫」は「象」の繁字で、のつとる。『尚書』舜典に「象以典刑」とあり、傳に「象、法也。」とある。「元」は、はじめ。

第六句は韻字の「張」が脱落している。「六合」は、天地と四方。『漢書』司馬相如傳下に「是以六合之内、八方之外」とあり、顏師古は「天地四方謂之六合、四方四維謂之八方也。」と注している。「設張」は、まうけはる。『續漢書』五行志の延光四年條の注に引く『馬融集』に「臣融伏惟方今有道之世、漢典設張」とある。

第七句は内區にあらわされた東王父と西王母をいう。

第八句を梅原は「距虛空統得序道」と七字句に釋したが、「通」字が脱落した「通距虛空」と「統得序道」とに分けて讀むべきであろう。「距」は「巨」の繁字または「鉅」の假借。『說文』十四上に「鉅、大剛也。」とあり、王力の古音説(郭錫良・一九八六)によれば、「剛」・「鋼」は「見陽」切、「巨」・「鉅」は「羣魚」切で、見羣旁紐、陽魚對轉の語である(西田守夫・一九八四)。つまり、「距(鉅)」は環狀乳神獸鏡の銘文における「維剛」で、三角縁神獸鏡の銘文にいう「巨」であり、獸が口に銜えている天空の堅い柱にはかならない。「虛空」は、天空。『莊子』雜篇・徐無鬼に「夫逃虛空者、……聞人足音蹙然而喜矣。」とある。

第九句の「統得序道」の「得」は「德」の假借。『荀子』成相に「舜授禹、以天下、尙得推賢不失序。」とあり、唐・楊倞注に「得、當爲德。」とある。また、K・一七七～一七九の神獸鏡銘ではすべて「統德序道」につくっている。「序」は、次第をわけさだめる。『周禮』肆師に「以歲時、序其祭祀及其祈珥。」とあり、鄭玄注に「序、第次其先後大小。」とある。

第一〇句の「祇」は、土地の神。『説文』一上に「祇、地祇。提出萬物者也。」とある。

第一一句を梅原は「伯亭陳樂」と釋したが、「白牙陳樂」の誤釋。「白」は「伯」の省字または假借で、「伯牙」をいう。「陳」は、つらねる。『楚辭』九歌・東皇太一に「陳竽瑟兮浩倡」とあり、王逸注は「陳、列也。浩、大也。言已又陳列竽瑟、大倡作樂、以自竭盡也。」という。西田守夫(一九六八)の指摘するように「白牙舉樂」とする銘文もある。しかし、本鏡には「伯牙」の圖像はない。

第二二句の第三字を梅原は「完」と釋したが、「見」の誤り。林巳奈夫(一九七八)は「白牙舉樂、衆神見容」の銘文をもつ環狀乳四神四獸鏡について、「衆神」は「伯牙」以外の三神としたが、本鏡では東王公と西王母の二神しか圖像にあらわされていない。本銘の「衆神」は、「祇靈」と對をなす天神をいうのであろう。漢・焦贛『易林』屯之節に「衆神集聚、相與議語」という用例がある。

第三三句の「天禽」は、巖窟二下・九は天にいる鳥と解釋したが、林巳奈夫(一九七八)は『爾雅』釋鳥に「二足而羽謂之禽、四足而毛謂之獸。」とあり、『説文』十四下に「禽、走獸總名。」とあるのを引いて、天にいる四足の動物と解釋した。本鏡では車を引く馬がそれにあたるのかもしれない。「白」は「百」の假借。『史記』封禪書に「用三百牢於鄜時」とあり、『索隱』は「百當爲白、秦君西祀少昊時性尙白。」という。したがって「百精」は、多くの神靈の意。『太平經』鈔乙部五「調神靈法」に「百神自言爲天吏爲天使、群精爲地吏爲地使、百鬼爲中和使。此三者、陰陽中和之使也。」(『合校』一五頁)とあり、神・精・鬼がそれぞれ天・地・人に配當されている。本鏡の圖像では仙人をいうのだろう。

●七三二

吾作明鏡、
幽凍三商。
規矩無社、
雕刻萬方。
四氣像元、
六合設長。
舉方奉員、
通距虛空。
統德序道、
祇靈是興。
百牙陳樂、
衆神見容。
天禽銜持維剛。
大吉、
服者公卿。
其師命長。

吾れ明鏡を作るに、
三商を幽鍊せり。
規矩止まること無く、
萬方に彫刻せり。
四氣は元に像り、
六合に設け張る。
方を舉げ圓を奉じ、
巨を虛空に通ず。
徳を統べ道を序せば、
祇靈是れ興る。
百牙樂を陳べ、
衆神容を現はす。
天禽維剛を銜持す。
大いに吉にして、
服者公卿ならん。
其の師の命は長からん。

(注)

浙江省紹興出土と傳える畫紋帶同向式神獸鏡(上海・六一)の方格銘。林分類Sdの一種。半圓方形帶の方格を「田」字形に區畫し、一字ずつ四字句をいれる。釋文は圖録を參考にした。陽部の「商」・「方」・「長」・「剛」・「卿」・「長」が東部の「空」・「容」、蒸部の「興」と叶韻する。

本銘の第一〇句までは銘文七三二と近似し、第四句の「萬量」を「萬方」、第五句の「四紀」を「四氣」、第六句の「東王父西王母」を「舉方奉員」とする。また、黒川古文化研究所藏の八鳳鏡(西村

俊範・一九八五」は外縁に銘帯があり、同じように第一〇句まで本銘とはほぼ同じである。

第三・第四句を圖録は「周刻無極、雕刻萬方」と釋すが、二句とも「彫刻」とあるのは疑問。黒川の八鳳鏡では「規矩無社、周刻萬京」となっており、字形をみると、第三句は「規矩無社」であろう。「規矩」は『禮記』經解に「規矩誠設、不可欺以方圓。」とあり、コンパスと曲尺をいうが、孔穎達疏に「規、所以正圓、矩、所以正方。」とあるように、「規」は「圓」、「矩」は「方」で、ここでは轉じて「天」と「地」の意味に解釋される。第四句の「萬方」は「萬彊（京）」と同義。

第五句の第二字を圖録は「祭」と釋すが、「氣」の誤りであろう。第五・第六句は黒川の八鳳鏡では「四氣像元、六合設張」となっている。「長」は「張」の省字または假借。

第七句を圖録は「舉貪方庚」と釋すが、意味が通じない。第七・第八句は黒川の八鳳鏡では「舉方奉員、通距虛空」となっており、字形と意味からみて「舉方奉員」であろう。ただし、銘文の語順は「舉員方奉」となっている。「員」は「圓」の省字または假借。銘文七三一の「東王父西王母」が「舉方奉員」に置換したのは、『淮南子』天文訓に「天道曰圓、地道曰方。方者主幽、圓者主明。」とある陰陽說にもとづくからであろう。また、第八句の「距」は「鉅（巨）」の假借であり、天空を支える「維剛」と同義である。

第九・第一〇句は黒川の八鳳鏡では「統德序道、靈祇是興」となっている。「祇靈」と「靈祇」は同義だが、本銘の「祇靈」のほうが鏡銘では多く用いられている。

第一三句を圖録は「天禽銜持、維剛大吉」と四字句に讀むが、ふつうは「天禽四首（守）、銜持維剛」となるから（西田守夫・一九八

四）、本銘では「四首」の二字が脱落しているのであろう。

第一五句の「服者公卿」は銘文七四二に例がある。

黒川古文化研究所の八鳳鏡は、第一一句以下が「趙甫可造、大吉□□」と報告されている。「趙甫可」を作者名とみたのだろうか、前後關係からここに作鏡者がくるのは考えがたい。實見して、

趙□可造、 □に及べば造る可く、

大吉□□。 大吉□□。

と讀む。「趙」は「及」の意味。『廣雅』釋言に「趙、及也。」とある。「造」は、いたる。『儀禮』士喪禮に「造于西階下」とあり、鄭玄注に「造、至也。」とある。しかし、第二字が鑄潰れて讀めないため、句全體の意味は不明である。鈕座の糸卷形には裝飾的な字形で「玉」「女」「當」「侍」および「□」「則」「亘」「美」の銘文をいれる。前者の四字句は「玉女當に侍すべし」と訓讀できる。

●七三三

吾作明鏡、

幽凍三商。

雕刻無社、

配像萬□。

白牙舉□、

□神見容。

天禽四首、

系持維剛。

得則泰一、

福祿是從。

富貴安寧、

吾れ明鏡を作るに、

三商を幽鍊せり。

彫刻止まること無く、

像を萬彊に配せり。

伯牙は樂を擧げ、

衆神容を現はす。

天禽・四獸あり、

維剛を系持す。

德を泰一に則れば、

福祿是れ從まらん。

富貴安寧にして、

子孫蕃昌。

子孫蕃昌せん。

曾年益壽、

年を増し壽を益し、

其師命長。

其の師の命は長からん。

(注)

巖窟二上・八四の内向九弧明鏡にみる。林分類Saの一種。紋様構成は銘文七〇六をもつ連弧紋鏡に類似するが、鈕座の四葉紋と連弧紋とのあいだに二重の圈線がめぐっている。銘文は起句の前に浮彫の鳥紋があり、整った四言句となる。釋文はおおむね巖窟にしたがう。陽部の「商」・「剛」・「昌」・「長」が東部の「容」・「從」と叶韻する。

第一句の「鏡」は正しく金偏につくる。

第三句の「彫(彫)」も正字である。「社」は「止」の繁字で、「無止」は際限がないという意味。漢鏡七期の神獸鏡では「周刻無社」に「配像萬(世) 彊(京/景)」がつづくことが多く、鏤で不明の第四句末字は「彊」であろう。銘文七四〇の注を参照。

第五句の「白牙」は「伯牙」の省字または假借。句の末字は類例「西田守夫・一九六八」からみて「樂」であろう。

第六句の第一字は銘文七三一の類例からみて「衆」であろう。同時期の神獸鏡には「白牙舉樂、衆神見容」の銘文が多い。

第七句の第三字を巖窟は未讀だが、「四」である。「首」は「獸」の假借(林・一九七八)。

第八句を巖窟は「系禱□□」と讀んだが、「天禽四首(守)」につづく語句に「銜持維剛」が多く(西田・一九八四)、本鏡の字形をあわせみると「系持維剛」と讀みうる。「維剛」は神獸鏡の獸が口に銜えている天空の堅い柱(巨/距)であり、「系」は「つなぐ」という意味。

第九句の第一字を巖窟は「遏」と讀むが、つぎの銘文七三四に

「得則大一」とある「得」の誤釋であろう。「得」は「德」の假借。

『荀子』成相に「舜授禹、以天下、尙得推賢不失序。」とあり、唐・楊倞注に「得、當爲德。」とある。銘文七三一の注を参照。「則」は、のつとる。「泰一」は「太(大)一」ともあらわし、『史記』封禪書に「天神貴者太一」という天の最高位の神である。また、『史記』

天官書には「中宮天極星、其一明者、太一常居也。」とあり、その『正義』に「泰一、天帝之別名也。」という。この「得則泰一、福祿是從。」は銘文七三一の「統得序道、祇靈是興。」の換言句であろう。

第一〇句は泰一の福祿があつまることをいう。語釋は銘文七三〇の注を参照。

第一一句を巖窟が「賞景宗周」と讀んだのは誤り。「富貴安寧」は銘文七四〇などにみる慣用句。

第一二句の「番」は「蕃」の省字または假借。「蕃昌」は、しげくさかんなこと。

第一三句の「曾年」は巖窟の指摘するように「増年」の省字または假借。

●七三四

吾作明鏡、

吾れ明鏡を作るに、

幽凍三商。

三商を幽鍊せり。

彫刻無社、

彫刻止まること無く、

配像萬彊。

像を萬彊に配せり。

白牙舉樂、

伯牙は樂を擧げ、

衆神見、

衆神(容を)現はす。

天禽四首、

天禽・四獸あり、

銜持維岡。

維剛を銜持す。

得則大一、

德を泰一に則れば、

乘雲駕龍。

雲に乗り龍に駕さん。

導從羣神、

導き従ふ羣神に、

五帝三皇。

五帝三皇あり。

誅討鬼凶。

鬼凶を誅討す。

常服者富貴、

常に服する者は富貴にして、

師命長。

師の命は長からん。

(注)

開明堂・五〇の盤龍鏡にみる。林分類Saの一種。内區には龍虎形の盤龍紋に加え、「白牙」の榜題をもつ伯牙彈琴像の左右に鳳凰と麒麟があらわされている。圖録ではこれを「伯牙彈琴龍虎鏡」と呼んでいる。銘文の釋讀はおおむね圖録にしたがう。陽部の「商」・「彊」・「岡」・「皇」・「長」が東部の「龍」・「凶」と叶韻する。

本鏡の銘文は第九句までと末句が銘文七三三に近似する。圖録が第三句を「彫刻典祀」とするのは誤り。第六句は「衆神見容」の「容」字を脱落し、第八句は「銜持維剛」の「剛」を「岡」、第九句は「得則泰一」の「泰」を「大」とする。

第一〇句は銘文七三三の「福祿是從」を「乘雲駕龍」と改める。類似句に銘文七二二の「乘雲驅馳、參駕四馬」がある。

第一一句の第一字を圖録は「選」とするが、銘文七二二に「道從羣神」とあり、「道」は「導」の省字または假借とするほうが意味は通りやすい。しかし、「羣神」といっても本鏡にあらわされている神像は伯牙のみである。

第一二句の「五帝三皇」は重列式神獸鏡に多くみる語句である。建安十年(二〇五)重列式神獸鏡の注を参照。

第一三句を圖録は「誅討鬼凶常」と句讀するが、前後は整った四字句となつてゐるから「常」は衍字であらう。ただし、ここではと

りあえず第一四句の冒頭に置いておく。「鬼凶」は押韻のために語順を轉倒したものであり、「凶鬼」は『續漢書』禮儀志中「大饗」の梁・劉昭注に「毆除畢、因立桃梗於門戶上、畫鬱櫺持葦索、以御凶鬼、畫虎於門、當食鬼也。」とある。本銘では「五帝三皇」が「鬼凶」を「誅討」する役目を擔つてゐるのであらうか。

本銘と類似するのが小校一五・六九の四獸鏡の外區銘で、第一四句からはつぎの吉祥句がはいる。

富貴安樂、富貴安樂にして、

子孫蕃昌。

子孫蕃昌ならん。

曾年益壽、

年を増し壽を益し、

其師命長。

其の師の命は長からん。

また、第五句を小校は「白鳳鼓瑟」と釋したが、「白牙鼓瑟」の誤釋である。伯牙は琴の名手とされ、「白牙」につづく語句はふつう「舉樂」・「陳樂」・「單琴」などであり、「白牙鼓瑟」はほかに同時期の「袁氏」畫像鏡(千鏡堂・圖一六三)の「白(伯)牙鼓瑟、子其(期)喑(吟)」という例を知るのみである。瑟は弦の多い大きな琴で、銘文六〇二に「昌女□□鼓于瑟」という例がある。

●七三五

吾自作明鏡、

吾れ自づから明鏡を作るに、

幽凍三商。

三商を幽鍊せり。

雕模虛無、

虛無を雕模するに、

□□萬彊。

□を萬彊に□さん。

白牙舉樂、

伯牙樂を舉ぐれば、

衆神見容。 衆神 容を現さん。
 天禽竝存、 天禽 竝存し、
 福祿自從。 福祿 自づと従^あまらん。
 願常服爲、 願はくは常へに服爲し、
 富貴番昌。 富貴番昌ならん。
 曾年益壽、 年を増し壽を益し、
 子孫蕃昌。 子孫蕃昌ならん。
 大吉祥。 大いに吉祥ならん。
 其師命長。 其の師の命は長からん。

(注)

浙江省紹興縣王家塢墓出土の獸首鏡（浙江修訂・四二）にみる。内區には正面形や斜視形の獸首がある。銘末に「其師命長」の句があり、「長」字の末筆が渦卷狀に垂下する。陽部の「商」・「彊」・「昌」・「昌」・「祥」・「長」と東部の「容」・「從」とが叶韻する。

第一句を圖録は「吾作明鏡」と釋すが、「吾」字の後ろに「自」字がある。「吾自作」はつぎの銘文七三六にも例がある。

第三句を圖録は「雕模祖無」と釋すが、「祖」字は鏤で讀めない。「雕模虛無」または「雕模規矩」の誤りではなからうか。「模」は鑄型。類似句に銘文七三六の「彫刻規矩」、銘文七四三の「制作虛無」や銘文七四五の「發造虛無」があり、鏡に天空世界を彫刻したことをいう。

第四句を圖録は「□□□康」と三字未讀だが、下二字は「萬彊」である。上二字は「配像」か。

第五・第六句を圖録は「自身、興樂衆神、貴商」と讀むが、「白牙舉樂、衆神見容」の誤釋である。銘文七三六を參照。

第七・第八句を圖録は「天命、向西游、福祿自天」と讀むが、

「命向」は「禽」、「西游」は「竝存」、「自天」は「自從」の誤釋である。第八句は「福祿是（氏）從」がふつう。
 第九・第一〇句を圖録は「嬰常服、爲富貴、番昌」と讀むが、「願常服爲、富貴番昌」の誤讀である。桃陰・二四の同向式神獸鏡銘に「願常服之、永得所驩」という例がある。
 第一一句を圖録は「侯年番臣」と讀むが、「曾年益壽」の誤釋。銘文七三三の注を參照。
 糸卷車形の鈕座には「三公」・「富貴」・「宜侯王」・「大吉祥」の吉祥句をいれる。

●七三六

吾自作明鏡、 吾れ自づから明鏡を作るに、
 幽凍三商。 三商を幽鍊せり。
 雕刻規矩無極、 規矩を雕刻すること極まり無く、
 亥萬彊。 萬彊に刻まん。
 百牙舉樂、 伯牙 樂を舉ぐれば、
 衆神見容。 衆神 容を現さん。
 天二禽竝、 天の二禽竝び、
 大吉祥。 大いに吉祥ならん。

(注)

上海博物館の神像鏡（上海・六三）の外區銘。五島美術館にも類似の鏡がある。内區は五體の神像が鈕のまわりをめぐる特殊な圖像配置である。起句の前に五點記號があり、陽部の「商」・「彊」・「羊」が東部の「容」と叶韻する。

第一句は「自作」とあるのがめずらしい。浙江省紹興縣出土（浙江修訂・五一）や小校一五・七一の環狀乳神獸鏡にも「吾自作明鏡」

とある。

第三・第四句を圖録は「雕刻規矩、無□□□疆」と釋すが、字形からみて未讀の三字は「極亥萬」であろう。「亥」は「刻」の省字または假借。銘文七三二の注に引く黒川古文化研究所藏の八鳳鏡に「規矩無社、周刻萬京」とあることから、最初の「雕刻」は衍字であり、「亥」の前に「周」字が脱落しているのであろう。

第五・第七句を圖録は「□□舉樂、容□貝、衆夫二禽□」と釋すが、第六句は「容神見衆」と錯簡し、第七句第一字は「天」の誤釋。五島鏡には正しく「百牙舉樂、衆神見容、天禽竝存」とある。

第八句を五島鏡は「師振大吉」とするが、上二字は意味不明。

本鏡の半圓方形帶には方格に一字ずつ銘文をいれ、上海は「吾作商巨三涑目明作竟」と釋している。錯簡があり、意味がとれない。

●七三七

吾作明鏡、

幽涑三商。

周刻無社、

配像萬彊。

天禽四守、

銜持維剛。

其師大吉、

服者命長。

敬奉賢良。

曾年益壽、

富貴昇始、

壽如東王公、

吾れ明鏡を作るに、

三商を幽鍊せり。

彫刻止まること無く、

像を萬彊に配せり。

天禽・四獸あり、

維剛を銜持す。

其の師は、大いに吉にして、

服する者は、命は長からん。

賢良を敬しみ奉ぜん。

年を増し壽を益し、

富貴昇始し、

壽は東王公、

西王母、

西王母の如し。

子孫蕃昌。

子孫蕃昌ならん。

(注)

北朝鮮ピョンヤン市梧野里一九號墓出土の畫紋帶求心式神獸鏡（綜鑑・六〇）にみる。林分類Saの一種。半圓方形帶の方格を「田」字形に區畫し、右上↓右下↓左上↓左下の順に一字ずつ四字句をいれる。「商」・「彊」・「剛」・「長」・「良」・「昌」が陽部で押韻する。

第一句から第六句までは、銘文七三三・七三四の第八句までのうち「白牙舉樂、衆神見容」の二句を脱落させた形である。第五句の「守」は「獸」の假借。銘文五〇二の注を參照。銘文七三三から銘文七三四では「首」とする。

第七・第八句を綜鑑（梅原末治）は語順のとおり「大吉興師、命長服者」と讀むが、「興」は「其」の誤釋で、「服者大吉、其師命長」の錯簡であろう。つぎの銘文七三八に「大吉、其師命長。服者」とあるのも同じ。

第九句の「賢良」は、漢代の選舉の科目。『漢書』文帝紀の二年詔に「舉賢良方正能直言極諫者、以匡朕之不逮」とあり、同武帝紀に「建元元年冬十月、詔丞相・御史・列侯・中二千石・二千石・諸侯相舉賢良方正直言極諫之士」とある。「敬奉賢良」は黃巾の亂を主導した張角が「大賢良師」と自稱した（後漢書 皇甫嵩傳）ように、漢末に鄉村社會の指導者として賢者を敬う風潮が顯著になったこと（川勝義雄・一九八二・二三～五五頁）と無關係ではない。また、銘文六〇七の注を參照。

第一〇句の「曾」は「増」の省字または假借。銘文七三三の注を參照。

第一一句の下二字は寫眞では不鮮明なため、綜鑑の釋にしたがう。

第二・第三句は銘文七二九や銘文七一〇にみる「壽如東王公西王母」を方格内に二分割したもの。

●七三八

劉氏作明鏡、

幽涑三商。

調刻無社、

配像萬疆。

天禽四守、

銜持維剛。

大吉、

其師命長。

服者、

敬奉賢良。

曾年益壽、

富貴。

劉氏明鏡を作るに、

三商を幽涑せり。

彫刻止まること無く、

像を萬疆に配せり。

天禽・四獸あり、

維剛を銜持す。

大いに吉にして、

其の師の命は長からん。

服する者は、

賢良を敬しみ奉ぜん。

年を増し壽を益し、

富貴ならん。

(注)

富岡謙藏の舊藏で、いま和泉市久保惣記念美術館に所藏する二神二獸鏡の外區銘(富岡・六〇頁/久保惣・五九)。林分類Saの一種。内區の圖像は禽獸座をもつ東王公と西王母を對置させ、そのあいだに右向きの龍形と虎形をいれた、めずらしい構成である。外區の銘文は起句の前に群星狀の記號があり、おもに四字句からなる。第八句の「其師命長」はふつう銘文の末句となるが、本銘ではその後に鏡の效能を記した一二字が加えられている。富岡らはその第九句以下を「服者敬奉、賢良曾年、益壽富貴。」と句讀し、カールグレン(K・一八〇)は「服者」の後ろ二字が脱落しているとみる。しかし、

「敬奉賢良」「曾年益壽」がそれぞれ慣用句であるため、「服者」と「富貴」とは第七句の「大吉」と同じように獨立した句か、もしくは同時期の銘文七三四に「服者富貴」とあるから、そのあいだに吉祥句を挿入したのであろう。偶數句で押韻することからみても、それが裏づけられる。「商」「疆」「剛」「長」「良」が陽部で押韻する。

第一句から第六句までは、銘文七三三・七三四の第八句までのうち「白牙舉樂、衆神見容」の二句を脱落させた形である。第一句は「劉氏作竟」とすべきところを、「明」字を加えて五字句としている。作鏡者の「劉氏」は盤龍鏡の銘文六一三に前出し、漢鏡七期には巖窟二上・一〇一の八鳳鏡のほか、徐州系の畫像鏡(小校一五・四九)などにみる。

第三句の「調」は「彫」の假借(駒井・一九五三・五二頁)。銘文七三一の注を參照。

第五句の「守」は「獸」の假借(銘文五〇二の注を參照)。銘文七三三・七三四では「首」とする。

第一〇句については銘文七三七の注を參照。

第一一句の「曾」は「増」の省字または假借。銘文七三三の注を參照。

本鏡の半圓方形帶には方格に一字ずつ時計回りにつぎの銘文をいれる。

漢有善同出丹陽。 漢に善き銅有り、丹陽に出づ。

大師得同。 大師 銅を得て、

合涑五金成。 五金を合鍊して成る。

陽部の「陽」と東部の「同」と耕部の「成」が叶韻するが、カールグレン(K・一〇七)は「陽」と「成」の押韻とする。第一句は漢

鏡四期の銘文を踏襲したもの。第二句の「大師」は上海博物館蔵の永康元年（一六七）神獸鏡（馬承源・一九六二）に「太師命長」という用例がある。「五金」は五行に配される金・銀・銅・錫（または鉛・鐵の五種類の金屬（笠野・一九八三）。青銅器の例として『吳越春秋』闔閭内傳に「臣聞、越王元常使歐冶子造劍五枚、……一名湛盧、五金之英、太陽之精。」とある。

また、陳介祺舊蔵の神獸鏡（陳介祺・一六〇）には「吾作明鏡」ではじまる外區銘があり、第一〇句までは本銘とほぼ同じである。曹菁善ほか（二〇〇八・二五一頁）の釋文を参考に「其師命長」以下を示すと、

服者、

敬奉賢良。

□□□□、

□如山人、

王喬赤甬子兮。

服する者は、

賢良を敬しみ奉ぜん。

□□□□、

□は仙人の

王喬・赤松子の如し。

となる。最後の二句を曹菁善らは「固如山石、□□□□」と釋すが、拓本から右のように讀む。「山人」は「仙人」の假借または省字。「赤甬子」は「赤松子」。銘文五二四に「山人王喬赤相子」、銘文五一七に「上有王喬赤甬子」とある。また、銘文四三三に「壽如王喬赤松子」とあり、第一字の未讀字は「壽」の可能性が高い。内區に仙人二體の圖像があり、銘文にいう王子喬と赤松子であろう。半圓方形帯には方格に一字ずつ時計回りにつぎの銘文をいれる。

善同出丹陽。

善銅有り、丹陽に出づ。

師得同。

師は銅を得。

合凍五金。

五金を合鍊せり。

本鏡の方格銘より省略化が進み、第一句の「漢有」、第二句の「大」、

第三句の「成」が脱落している。

いっぽう、奈良縣天神山古墳出土の畫像鏡（伊達宗泰ほか・一九六三）には、本鏡の外區銘と方格銘とを合成したつぎの銘文がある。

劉氏作明鏡、

自有善同出丹陽。

劉氏明鏡を作るに、

□師得同。

自づから善き銅有り、丹陽に出づ。

合凍五金、

五金を合鍊せり。

服者、

服する者は、

敬奉臣良。

賢良を敬しみ奉ぜん。

巧刻。

巧みに刻む。

本銘と同じように第一句は「明」字を加えた五字句となる。「劉氏」の作意であろう。第二句は本來「劉氏作竟自有紀、漢有善同出丹陽」とあるべきところを、二句を合わせて七字一句としている。第三句からは四字句を原則とするが、本銘と同じように「服者」の後ろ二字が脱落しており、これも「劉氏」の作意と思われる。内區圖像は本鏡と同じ二神二獸の構成であり、神像には「西王母」と「玉女」という榜題がある。神獸鏡と畫像鏡との近い關係がうかがえる。

●七三九

吾作明鏡、

吾れ明鏡を作るに、

幽凍三剛。

三剛を幽鍊せり。

周刻無亟、

彫刻極まり無く、

衆華主陽。

衆華は陽を主る。

聖德神明。

聖德もて神明にす。

五月五日丙午日中時、

五月五日丙午の日の中する時に、

得三光。

三光を得。

制作師、

照見人刑。

位至三公、

子孫吉昌。

制作の師は、

人の形を照らし現はさん。

位三公に至り、

子孫 吉にして昌んならん。

(注)

三槐堂・九六の獸首鏡にみる。主紋の獸面は二つが正面形で、二つがやや斜め横を向く。起句の前に群星狀の記號があり、銘文のほとんどに鑄造の日時を記したためらしい書式である。四言の隔句韻を基本とし、陽部の「剛」・「陽」・「明」・「光」・「昌」と耕部の「刑」とが叶韻する。

第一句の「明」は「目」と「月」につくる「明」の異體字。銘文七三〇の注を参照。

第二句の「凍」は「鍊」の假借。「三剛」は鏡の素材となる三種の堅強な金屬。銘文七三〇では「三岡」としていた。

第三句の「周」は「彫」、「亟」は「極」の省字。銘文七三一の「周刻萬疆」と同じように、圖像を隔ずみまで彫刻したことをいう。

第四句の第二字を三槐堂は「董」と読み、これまで「事」と讀まれることも多かったが、破損のため本鏡では確認できないものの、銘文七四〇などの類例からみて「華」であろう。「華」は、蓮の花で、天帝や日月の象徴と考えられていた(林巳奈夫・一九八七)。「淮南子」墜形訓に「若木在建木西、末有十日、其華照下地。」とあり、高誘注に「若木端有十日、狀如蓮華。華、猶光也。」とある。

第五句の「明」は「明」の正字。「神明」は、神のように明らかなること。『易經』繫辭上に「聖人以此齊戒、以神明其德夫。」とある。第一字は不鮮明だが、銘文七四〇の注にあげる北朝鮮ピョニヤン出土の四獸鏡に「堅德光明」とあることから、「堅」字の可能

性もあろう。

第六句は王充『論衡』亂龍に「陽燧取火于天、五月丙午日中之時、消鍊五石、鑄以爲器、乃能得火。」とあるように、鏡の鑄造にもつとも好ましいとされた吉日良時をいう。「日中」は、太陽が中天にいたる正午である。『說文』十四下に「五、五行也。从二、陰陽在天地之間交午也。」とあり、もともと陰陽の交午する仲夏(五月)端午が鑄造の吉日であったが、永始二年(前一五)方格規矩四神鏡に「永始二年五月丙午扇上五」とあり、章和元年(八七)盤龍鏡に「章和元年五月丙午日中作」とあるように、漢鏡では「五月丙午」が吉日として定着した。本鏡に「五月五日丙午」とあるのは、『周禮』壺涿氏の「午貫象齒」の鄭玄注に「午爲五。」とあるように、午日と五日とが混同されて五月五日となったものである。「五月五日」の銘文をもつ例として、ほかに集釋・吳〇七の「吳郡鄭蔓作」對置式神獸鏡(小校一五・一六)がある。なお、五月五日と端午節については、中村喬(一九九三)を参照。

第七句の「三光」は、日・月・星のひかり。『淮南子』原道訓に「天道者……舒之輒於六合、卷之不盈於一握。約而能張、幽而能明、弱而能強、柔而能剛。橫四維而含陰陽、紘宇宙而章三光。」とあり、高誘注に「紘、綱也。……三光、日・月・星。」とある。

第九句の「照」は「𠂔」を「火」につくる。「人刑」は「人形」の假借で、ひとのがた。銘文四〇二に「涑冶銅華得其清。以之爲鏡昭身刑。」とあり、その「身刑」を京大・四七二六の獸帶鏡は「人刑」につくっている。

鈕座の糸卷形には裝飾的な字形で「長」「亘」「子」「孫」の銘文をいれる。

●七四〇

吾作明鏡、
幽渌三岡。
配像世京。
統德序道、
敬奉臣良。
周刻無社、
百牙舉樂、
衆華主陽。
世德光明。
富吉安樂、
子孫蕃昌。
士至高升。
生如金石、
其師命長。

吾れ明鏡を作るに、
三岡を幽鍊せり。
像を世景に配せり。
徳を統べ道を序し、
賢良を敬しみ奉ぜん。
彫刻止まること無く、
伯牙は樂を擧げ、
衆華は陽を主らん。
世よ光明を得ん。
富吉・安樂にして、
子孫蕃昌ならん。
仕ふれば高升に致さん。
生は金石の如く、
其の師の命は長からん。

(注)

奈良縣ホケノ山古墳の畫紋帶同向式神獸鏡にみる〔岡林孝作ほか編・二〇〇八〕。林分類Sbの一種で、釋文はおおむね車崎・一七九にしたがう。半圓方形帶の方格を「田」字形に區畫し、右上↓右下↓左上↓左下の順に一字ずつ四字句をいれる。陽部の「岡」・「京」・「良」・「明」・「昌」・「長」と蒸部の「升」が叶韻するが、偶數句で正しく韻をふむわけではなく、句の順序には錯簡がある。

第一句の「明」は「明」の異體字。銘文七三〇の注を参照。

第二句を報告が「幽煉三剛」と釋すのは誤り。「岡」は「剛」の省字または假借。

第三句の「京」を車崎は「景」の假借とする。類似句に銘文七三

二の注に引く八鳳鏡の「周刻萬京」や銘文七三七・七三八の「配像萬疆」があり、八鳳鏡の「周刻萬京」を銘文七三二は「周刻萬疆」とすることから、「京」と「疆」とは通用したことがわかる。笠野毅〔一九九三a〕は「京」と「疆」は「景／影」の假借とする。王符『潜夫論』贊學に「景君明經年不出戶庭」とあり、『漢書』儒林傳に「京房、字君明」とあることから汪繼培箋は「景・京、古通用。」という。朱駿聲『說文通訓定聲』も「景、假借爲京。」という。『釋名』釋天に「景、竟也。」とあるように「景／影」は「鏡」とも音義が近く、「萬景（影）」は陸雲「大將軍宴會被命作詩」〔文選〕卷二十に「如彼日月、萬景攸正。」とあり、李善注に「傳玄歌詩曰、日中萬影正、夕中萬景傾。義與此同。」とあって、萬物の影像の意味であるが、銘文の「萬（世）京（疆）」は、世界のいたるところ、隅々みまで、という意味だろう。この句は第二句につづいて押韻し、銘文七三四などの用例からみて、本句の前にあるべき「彫刻無社」が錯簡のため第六句に移動しているのであろう。

第四句の第一字は「況」のようにみえるが、車崎は「統」と釋し、ほかの用例からみても「統」の譌字であろう。

第五句の「臣」は「賢」の省字。銘文七三七の注を参照。江南系の銘文七三二では「統德序道、祇靈是興」となるのにたいして、徐州系の本銘では「統德序道、敬奉賢良」となるのが特徴である。

第六句を報告は「彫刻無祀」と釋すが、車崎釋の「周（彫）刻無社（止）」が正しい。

第七句を報告は「百身舉樂」と釋すが、西田守夫〔一九六八〕が注意したように「百（伯）牙舉樂」と讀むべきである。

第八句の第三字を報告は「事」、車崎は「羊」と讀むが、「華」の誤り。銘文七三九の注を参照。江南系の銘文七三三〜七三六などで

は「白牙舉樂」につづいて「衆神見容」となるから、「衆華主陽」の「華」は「神」に近い輝きを意味するのであろう。

第九句の「德」は「得」の假借。銘文七三二の注を参照。元興元年（二〇五）環狀乳神獸鏡などには「世得光明」とある。

第一〇句の「富吉」はめずらしい。あるいは北朝鮮ピョンヤン市出土の四獸鏡に「富貴安樂」とあるので、「吉」は「貴」の譌字であらうか。後述の京都府久津川車塚古墳出土の同向式神獸鏡には「富貴安寧」とある。

第一一句の「番」は「蕃」の省字または假借。

第二二句の第一字は「土」のようにみえ、報告は「土（位）至高升」と讀むが、車崎釋の「土」が正しい。「土」は「仕」の省字。銘文五四六に「士至公卿中常侍」という類似句があり、その注を参照。しかし、本銘では「至高升」とあり、「公卿」のような具體的な身分ではない。「至」は「致」の省字であらう。

第二三句は光和四年（一八二）「廣漢西蜀造作尙方」獸首鏡にもみえるが、めずらしい用例である。第九句の「世得光明」とともに作鏡における四川系と徐州系との關係がうかがえる。

いま泉屋博古館に所藏する京都府久津川車塚古墳出土の同向式神獸鏡の方格銘（富岡・二〇頁／泉屋・七六／車崎・一七六）も本銘とは同じである。ただし、第二句は「配像萬彊」、第八句は「衆神見容」となり、第一〇句以下は、

富貴安寧。 富貴・安寧ならん。

曾年益壽。 年を増し壽を益し、

侯王長富。 侯王は長へに富み、

子孫蕃昌ならん。

□□□□、

□□□□、

士至公卿。 仕^{つか}ふれば公卿に至らん。

其師命長。 其の師の命は長からん。

と改變している。問題は未讀の第一四句で、富岡は「賢者高顯」とし、車崎は「學者高遷」と讀むが、現状では銕のため判讀できない。北朝鮮ピョンヤン市貞柏里三號墓出土の同向式神獸鏡（樂浪郡・圖版六一八／綜鑑・一八八頁／聚英・五〇・二）をみると、樂浪郡は「學者高□」、綜鑑は「舉□喜□」、聚英は「學者高顯」と讀むが、寫真を精査した結果、

學者高連、 學者は高輦し、

士至公卿。 仕^{つか}ふれば公卿に至らん。

と釋讀する。「連」は「輦」の假借で、帝王の乗る挽車、轉じて出世する意。『周禮』鄉師に「大軍旅・會同、正治其徒役、與其輦輦、戮其犯命者」とあり、鄭玄注に「輦、駕馬。輦、人輓行、所以載任器也。……故書輦作連、鄭司農云、連讀爲輦。」という。あるいは山東省蒼山縣の元嘉元年（二五二）畫像石題記（永田・六八）に「學者高遷宜印綬、治生日進錢萬倍」とあり、「學者高遷」も同時代に用いられていた。

桃陰・二四（K・一七八）の同向式神獸鏡も本銘に類似した銘文をもつが、つぎの二句はめずらしい。

願常服之、 願はくは常へに之れを服さん。

永得所驩、 永へに歡ぶ所を得ん。

以上の方格銘は四字句の制約があるのにたいして、北朝鮮ピョンヤン市出土と傳える四獸鏡（樂浪郡・圖二〇〇）の銘文は、外區の銘帯にほどこされたものである。梅原末治（一九二五）の釋文を参考に、五島美術館に所藏する現物で確かめると、

吾作明鏡、 吾れ明鏡を作るに、

幽凍三商。

配像萬疆。

統序道、

敬奉賢良。

堅德光明。

富貴安樂、

子孫蕃昌。

士至公卿。

其師命長。

と釋讀できる。一字が脱落している第四句のほかは、すべて整った四字句である。第六句の「堅」は、尊く優れていること。『管子』

任法に「如天地之堅」とあり、唐・尹知章の注に「堅、謂尊勝。」

とある。類似句に本銘の「卅德光明」や久津川車塚鏡の「福祿光

明」、貞柏里三號墓鏡の「堅德神明」などがある。この四獸鏡銘で

は「其師命長」の後ろにも銘文がつづき、樂浪郡は「三〇〇〇萬

來〇〇〇〇」の一一字、梅原は「三〇〇責造來萬未〇〇守〇田」の

一三字に讀むが、難讀字が多い。

また、故宮藏鏡・四〇の獸首鏡は、正面形や斜視形の獸首を主紋

とし、銘帯につぎのような類似の銘文をもつ。

吾作明鏡、

幽凍三岡。

配像世京。

統德序、

敬奉臣良。

周刻無祉、

百牙作昌。

三商を幽鍊せり。

像を萬疆に配せり。

(德を) 統べ道を序し、

賢良を敬しみ奉ぜん。

堅德光明ならん。

富貴安樂にして、

子孫蕃昌ならん。

仕ふれば公卿に至らん。

其の師の命は長からん。

衆華主陽。

位至三公兮。

これも第四句の一字が脱落している。第一句の「岡」は「剛」、第

五句の「臣」は「賢」、第六句の「周」は「彫(雕)」、第七句の

「昌」は「倡」の省字である。琴の名手である伯牙については「白

牙陳樂」や「白牙舉樂」がふつうで、「作倡」はめずらしい。韻を

ふむためだろうが、獸首鏡には伯牙の圖像はない。

ハルヴェイル家藏 [Halvyska Museet 1933: 38] の「袁氏」方格規矩

四神鏡の銘文(K・一八二)も本銘に類似する。

袁氏作明鏡、

幽凍三商。

配〇〇〇疆。

統德序道、

雕克無祉、

百牙舉樂、

衆華主陽。

其師命長兮。

起句の前に「…」記號がある。第一句の「袁氏」は同時期の畫像鏡

や斜縁同向式神獸鏡にみられるが、方格規矩四神鏡の作鏡者として

は初出である。「統德序道」が第四句に倒置されているのも本銘と

共通する。第五句「克」は「刻」の假借。

衆華は陽を主る。

位は三公に至らん。

●七四一

吾作明鏡、

幽凍三商。

〇〇序道、

吾れ明鏡を作るに、

三商を幽鍊せり。

德を統べ道を序し、

配象萬疆。
 曾年益壽、
 子孫蕃昌。
 功成事見、
 其師命長。

像を萬疆に配せり。
 年を増し壽を益し、
 子孫は蕃昌ならん。
 功成り、事現はれ、
 其の師の命は長からん。

(注)

奈良縣古市方形墳出土の斜縁神獸鏡〔伊達・一九六八〕にみる。内區外周の銘帶にめぐらされた四字句の銘文で、起句の前に珠點記號をいれる。「商」・「彊」・「昌」・「長」が陽部で押韻する。

第七句をのぞいて各句とも銘文七四〇と同じだが、語順は正しく隔句押韻する。その第七句「功成事見」は『老子河上公注』運夷に「功成名遂、身退、天之道」、淳風に「功成事遂、百姓皆謂、我自然」とある。ただし、本銘は老子とは相反する現世利益を求める。

●七四二

吾作明鏡、
 福祿是從。
 奉□三皇。
 其師命長。
 服者公卿。
 子孫蕃昌。
 衆神見容。
 敬奉賢良。
 白牙陳樂、
 幽涑金商。
 百精竝存、

吾れ明鏡を作るに、
 福祿 是れ從まらん。
 三皇を奉□せん。
 其の師の命は長からん。
 服者は公卿ならん。
 子孫 蕃昌ならん。
 衆神 容を現さん。
 賢良を敬しみ奉ぜん。
 白牙は樂を陳べ、
 金商を幽涑せり。
 百精 竝存し、

咸得所願、
 曾年益壽、
 富貴安寧。

咸く願ふ所を得、
 年を増し壽を益し、
 富貴安寧ならん。

(注)

グラハム・コレクション (Dewar 1994: no. 55) の同向式神獸鏡にみる。林分類Saの一種。内區圖像のうち、黃帝に代わって怪獸がはいり、神像の坐る維剛が階段状になっているのがめずらしい。半圓方形帶の方格を「田」字形に區畫し、一字ずつ四字句をいれる。陽部の「皇」・「長」・「卿」・「昌」・「良」・「商」が東部の「從」・「容」、耕部の「寧」と叶韻する。

第一句の「明」は「明」の異體字。銘文七三〇の注を參照。

第二句は銘文七三〇の注を參照。本來は「百精竝存、福祿是從」とあるべきだが、本銘では句の順序が亂れている。

第三句の第二字は不明。

第四句の「其師命長」は銘末にくるのがふつうである。

第七句の「衆神見容」は第九句の「白牙陳樂」の後ろにくるのがふつうであり、第八句の「敬奉賢良」の前にあるべき「統德序道」は本銘では脱落している。

第一〇句は「幽涑三商」とあるべきだが、「三」を「金」に置換している。しかし、銘文七三一の注に論じたように、五行で「商」は金屬を意味するから、銘文の「金」は青銅鏡の原料のうちとくに精良な銅に限定しているものであろう。

第一一句の「百精」は、多くの神靈。銘文七三一には「天禽白精竝存」とあり、「百精竝存」のかわりに「天禽竝存」となることもある。

第一二句はめずらしい。圖録は第三字を「祈」と讀むが、字形か

らみて「所」であろう。前漢の銘文二二五に「常得所喜」という類似句がある。

●七四三

吳郡胡陽張元公、

制作虛无、

自異於衆、

造爲明鏡、

日月合萌、

四時永則、

□□□王。

天□和親、

富貴蕃昌。

百精竝存、

其師命長。

(注)

吳郡胡陽の張元公は、

虛無を制作するに、

自づから衆と異なり、

明鏡を造爲するに、

日月と明を合はさん。

四時 永へに則り、

□□□王。

天□和親し、

富貴蕃昌ならん。

百精 竝存し、

其の師の命は長からん。

浙江省紹興縣上游公社出土(浙江修訂・五〇)や中國國家博物館所

藏(楊桂榮・一九九三b)の環狀乳神獸鏡の外區銘。浙江の鏡は鏤のため未讀字があるのにたいして、楊桂榮の拓本は不鮮明で釋文を檢證できないため、楊桂榮の釋文を浙江修訂の寫眞をもとに檢討する。

なお、浙江修訂の釋文は王仲殊(一九八五)にしたがっている。起句の前に「・」記號があり、銘末の「長」字に渦狀裝飾が垂下している。鏡工の出自と名を記した第一句をのぞいて、すべて整った四字句からなり、第五句以下の「萌」・「王」・「昌」・「長」が陽部で押韻する。

第一～第三句を王仲殊は「吳郡胡陽張元、□□□□、无自異於

衆」と釋し、「張元」を鏡工の姓名としている。しかし、第二句以下はすべて四字句であり、つぎの銘文七四四では「張氏元公」と「氏」をいれて四字句につくっているから、鏡工の姓は「張」、名は「元公」であろう。王仲殊はまた「吳胡陽里周仲作」畫像鏡を例示し、本銘の「吳郡胡陽」は郡治の所在した吳縣の胡陽里を指すものとする。吳縣はいまの江蘇省蘇州市。吳縣と會稽山陰(いまの浙江省紹興市)とは「吳會」と略稱される江南の二大都市であり、吳縣は後一二九九年に會稽郡を分割して設置された吳郡の郡治となった。吳縣における鏡工の出自または工房の所在地として、王仲殊は胡陽里のほか、向里・向陽里などをあげている。

第二句の「制作」は鏡を設計すること。銘文七三九に「制作師、照見人刑」という例がある。「无」は「無」に同じ。『說文』十二下に「无、奇字無也。通於无者、虛无道也。王育說、天屈西北爲无。」とあり、『易經』乾の「无咎」に唐・陸德明『經典釋文』卷一は「无、音無。易内皆作此字。」という。「虚無」は『淮南子』精神訓に「虚無者、道之所居也。」とあり、司馬相如「大人賦」(『史記』司馬相如傳)に「乘虚無而上假兮、超無友而獨存」とあって、「虚空」や「天空」の意。鏡を天にみたてたのである。

第三句の末字を楊桂榮は「常」としたが、字形からみて王仲殊の「衆」が妥當である。類似句に銘文五四五の「八維此鏡兮與衆異」や銘文五四六の「采取銅錫與衆異」がある。

第四句の「造爲」は「造作」と同義。延熹二年(一五九)環狀乳神獸鏡の「廣漢西蜀、造作明鏡」など四川系の鏡は「造作」を用いた。青銅器を「造爲」した例に『越絶書』外傳記寶劍に「歐冶乃因天之精神、悉其伎巧、造爲大刑三・小刑二。」がある。「鏡」字は正しく金偏をつける。

第五句の「萌」は「明」の繁字。「胡氏」盤龍鏡の銘文五三四に「原夫始萌兮」という例がある。「日月合明」は『淮南子』泰族訓に「大人者與天地合德、日月合明、與鬼神合靈、與四時合信。」という例がある。

第六句の第四字を楊桂榮は「朝」とし、王仲殊は「別」と釋すが、意味が通じない。ここでは「則」と釋しておく。

第七句を楊桂榮は「巾物用□」、王仲殊は「水□□王」とするが、寫眞をみても末字の「王」以外は確かではない。

第八句を楊桂榮は「□□親□」、王仲殊は「光□和親」とする。王釋が妥當であるが、第一字は「天」の可能性がある。

第九句は楊桂榮にしたがう。銘文七四二に例がある。
本鏡の半圓方形帶には方格に一字ずつ時計回りにつぎの銘文をい

れる。

吾作明鏡、 吾れ明鏡を作るに、

幽涑三商。 三商を幽鍊せり。

長亘子孫。 長く子孫に宜し。

第一句の「鏡」は外區銘と同じように正しく金偏につくる。

●七四四

吾作明鏡、 吾れ明鏡を作るに、

幽涑三商。 三商を幽鍊せり。

周刻無祉、 彫刻止まること無く、

配象萬疆。 像を萬疆に配せり。

白牙奏樂、 伯牙は樂を奏し、

衆神見容。 衆神容を現はす。

天禽竝存、 天禽 竝存し、

福祿氏從。 福祿 是れ從^{あつ}まらん。

富貴安寧、 富貴安寧にして、

子孫潘倡。 子孫蕃昌せん。

曾年益壽、 年を増し壽を益し、

其師命長。 其の師の命は長からん。

惟此明竟、 惟れ此の明鏡は、

干出吳郡、 吳郡より干^{もと}め出づ、

張氏元公。 張氏は元公、

千練百解、 千たび練り百たび解し、

刊列文章。 文章を刊^きみ列べ、

四器竝。 四氣竝ばん。

(注)

湖南省衡陽市道子坪出土の重列式神獸鏡(湖南省博物館・一九八一b)の外區銘。第一二句までは林分類Saで、第一三句の「惟此明竟」から作鏡の經緯を記している。寫眞と拓本は小さく不鮮明なため、釋文はおおむね報告にしたがう。陽部の「商」・「疆」・「倡」・「長」・「章」が東部の「容」・「從」・「公」と叶韻する。

第七句は銘文七三六に前出。類似句に同じ「張元公」が制作した銘文七四三の「百精竝存」がある。

第八句は銘文七三三に「福祿是從」とあり、「氏」と「是」が通用したことがわかる。

第一三句の「惟」は「唯」と通じた發語の「これ」。ここから銘文が轉換することをあらわす。

第一四句の「干」は「もとめる」。『荀子』議兵に「干賞蹈利之兵也。」とあり、楊倞注に「干、求也。」とある。あるいは、「千」の誤釋で、「遷」の假借か。王力の古音説では「千」は「清真」、「遷」

は「清元」で音が近い。

第一五句の「張氏元公」は銘文七四三の鏡工であった「張元公」その人。「張氏元公」は「吳郡胡陽(里)」に出自し、前句の釋が正しければ、吳郡以外の土地に移住して本鏡を制作したのだろう。ただし、王仲殊(一九八六)はその名を「張元」とし、吳郡での制作とみなしている。

第一六句を報告は「千練(諫)百斛」と釋している。「練」はむしろ「ねる」の意で「鍊」の假借であろう。「斛」は『說文』十四上に「斛、十斗也。」とあり、約一九・四リットルの容量である。百斛の銅原料を精鍊したと解釋したのかもしれないが、原料の單位としては容量の「斛」より重量の「斤」や「石」がふさわしく、その字はむしろ不純物をとりのぞく意の「解」ではなからうか。銘文五二九に「凍五解之英華畢」とあり、その注を參照。

第一六句の釋も報告にしたがう。「刊」は、さざむ。

第一七句の釋も報告にしたがう。「器」は「氣」の假借か。『論衡』儒増に「人有上書告新垣平所言神器事皆詐也。」とあり、黃暉校釋に「器、讀作氣。氣・器古通。『大戴禮』文王官人篇、其氣寬以柔。『周書』、氣作器。」とある。「四氣」は、四つの時日、春夏秋冬の四時。環狀乳神獸鏡の浙江・五六やK・一八二には「四氣象元」とある。しかし、作鏡の経緯に「四器竝」という文言をいれる意味はわからない。

●七四五

盖作明鏡、
淵涑三商。
發造虛無、

盖明鏡を作るに、
三商を淵鍊せり。
發めて虛無を造るに、

克照金光。
剋□元方。

元方を剋□し、
四旁に法□す。

道□朝廷、
朝廷を導□するに、

五帝三皇。
五帝三皇あり。

朱鳥玄武、
朱鳥・玄武と、

金琦交龍。
禽は交龍に騎る。

服此竟者命長。
此の鏡を服する者は命長からん。

(注)
小校一五・八〇上の環狀乳神獸鏡の外區銘。釋文はおおむね小校にしたがう。銘末の「長」字に渦狀の裝飾が垂下し、陽部の「商」・「光」・「方」・「旁」・「皇」が東部の「龍」と叶韻する。

第一句の第一字を小校は「蓋」と釋すが、字形は「蓋」で、作鏡者をいうのであろう。『續通志』氏族略に「蓋氏、出自齊大夫食采于蓋、以邑爲氏。」とあり、「蓋邑」はいまの山東省沂水縣に比定されている。「蓋」と「蓋」とは通用し、前漢の陽泉蘊・武威醫簡・居延漢簡、後漢の衡方碑・趙寬碑などが「蓋」を「蓋」と表記している(李新城・二〇〇六・二五三頁)。「黃蓋作」三段式神仙鏡の銘文・華西〇一も華蓋を「翠蓋」とする。前漢はじめの山東に「蓋公」があり、齊の相國となった曹參は「聞膠西有蓋公、善治黃老言、使人厚幣請之。……其治要用黃老術」(『史記』曹相國世家)という。

あるいは本鏡を製作した「蓋」はこの黃老術を修めた「蓋公」にちなんだものか。なお、「黃老」の「黃」は黃帝、「老」は老子を指し、神獸鏡の圖像や銘文に黃帝があらわされ、のちの道教に黃帝と老子が尊重されるのは、この黃老思想を繼承しているからであらう。ただし、銘文七二五の注に記したように、笠野毅(一九九三b)は

「盖」を「羊」の繁字で「尙」の假借と考えており、「尙方」の「方」字が脱落した可能性もある。実際に銘文五四四の「三鳥作」細線式獸帶鏡には「貴至三公尙御竟」とあり、「尙方」は「尙」だけでも通用した。

第二句は「幽渌三商」とあるのがふつうだが、「幽」を「淵」としている。「淵」は、深くて静かな意。『廣雅』釋詁に「淵、深也。」とあり、『莊子』在宥に「其居也淵而靜。」とある。あるいは「消」字の可能性もある。「消（銷）鍊」は、金屬を溶かして鍛えること。王充『論衡』亂龍に「陽燧取火于天、五月丙午日中之時、消鍊五石、鑄以爲器、乃能得火。」とある。

第三句の「發」は、はじめ。『禮記』祭統に「諸德之發也。」とあり、鄭玄注に「發、謂機發也。」とある。「虛無」は「虚空」や「天空」の意。類似句に銘文七四三の「制作虛无」がある。

第四句の「金光」は、鏡のかがやき。『漢書』禮樂志に「揚金光、橫泰河。」とあり、『風俗通義』十反に「昔聖帝明王、莫不歷象日月星辰、以爲鏡戒。……今月丙辰、過熒惑於東井辟、金光輝合、并移時乃出。」とある。

第五句の第一字を小校は「刻」と釋したが、拓本の字形では「剋」にもみえる。ただし、「刻」は「剋」と通じる。「元方」は「中央」の意か。第二字は不明だが、句意は中央を治めるといふことか。

第六句の第四字を小校は「方」としたが、字形は「旁」であり、「方」の假借である。第二字が不明のため、句意はつかみがないが、第五句と對になり、銘文四一七に「法象天地」とあることから、四方を統治するという意味か。

第七句は上三字が未讀であるが、「道□朝廷」と釋讀する。「道」

は「導」の省字または假借。銘文七三四に「導從羣神、五帝三皇」という例がある。

第八句の「五帝三皇」は重列式神獸鏡に多くみる語句である。建安十年（二〇五）重列式神獸鏡の注を參照。

第一〇句の第二字は未讀だが、旁が「奇」にしたがい、「琦」で「騎」の假借か。「金」は「禽」の假借。

末句は「師命長」や「其師命長」がふつうで、服鏡者の長命を祝願しているのはめずらしい。

本鏡の半圓方形帶には方格に一字ずつ銘文があり、小校の釋文はつぎのとおりである。

服此竟者、此の鏡を服する者は、

師二立公。 師二立公。

子孫潘昌。 子孫蕃昌せん。

東部の「公」と陽部の「昌」とが叶韻する。第二句は錯簡があるのか、意味がとれない。

小校一五・八〇下の環狀乳神獸鏡の外區銘は、本銘と同じく「盖作明竟」ではじまるが、第二句以下と半圓方形帶の方格銘とはつぎの銘文七四六とはほぼ同じである。ただし、未讀字が多く、拓本も不鮮明である。

●七四六

盖惟貨竟、 盖 惟へらく貨の鏡は、
變巧名工。 變巧の名工にして、

攻山采易、 山を攻め錫を採り、
伐石索同。 石を發して銅を索め、

單火盧冶、 單なる火もて爐冶し、

幽凍三商。

吐所日翟、

容象月明。

五帝昔時、

建師四方。

玄龜儼威、

白帟馴仁、

□□□□、

其師命長。

(注)

三商を幽鍊せるものなり。

日の耀く所を吐だし、

容は月明を象る。

五帝は昔時、

師を四方に建てり。

玄龜は威に象り、

白虎は仁に順い、

□□□□、

其の師の命は長からん。

浙江省紹興縣出土の環狀乳神獸鏡(浙江修訂・五二)の外區銘。四字句一四句からなるが、金華地區文物管理委員會藏の同向式神獸鏡

(浙江修訂・六七)はこの第一一句第一字まで、湖北省鄂州市鄂銅西山鐵礦出土の對置式神獸鏡(鄂州・一一)はこの第九句末までほぼ

同文である。また、鄂州市五里墩村出土の重列式神獸鏡(鄂州・二五〇)は本銘と同じ長さのようだが未讀字が多く、小校一五・八〇

下や早稻田大學會津八一記念博物館藏の環狀乳神獸鏡(持田編・二〇〇八・三〇)は第一三・第一四句が異なっている。例が少ないにもか

かわらず、環狀乳神獸鏡のほか、同向式神獸鏡・對置式神獸鏡・重列式神獸鏡という四種の神獸鏡に用いられた、めずらしい銘文で

ある。ここでは各圖錄の釋文を校勘しながら、原形と考えられる環狀乳神獸鏡の銘文を復元する。東部の「工」・「同」と陽部の

「商」・「明」・「方」・「長」が叶韻する。

第一句の「蓋惟」を上野(二〇〇〇)は作鏡者名とする。銘文七二五に「蓋方」、銘文七四五に「蓋作」とあり、「蓋」は「蓋」の省字または假借で、作鏡者の姓である。「惟」は銘文七四四の注にみ

たように發語の辭「これ」、または「おもふ」の意。『說文』十下に「惟、凡思也。」とある。「貨」は、たから。『說文』六下に「貨、財也。」とあり、『尚書』洪範の「一曰、食、二曰、貨」の孔穎達疏に「貨者、金玉布帛之總名。」という。

第二句の「變」は、ふしぎな。張衡「西京賦」(『文選』卷二)に「盡變態乎其中」とあり、薛綜注に「變、奇也。」とある。

第三・第四句を鄂州の二面は「破山來易、仗石索同」と讀むが、浙江修訂二面の釋にしたがう。第三句の「易」は「錫」、第四句の「同」は「銅」の金偏を省略した字。第四句の「伐」は「發」の假借で、功勞の意。『管子』四時に「求有功發勞力者而學之」とあり、戴望校正に「發・伐古同聲通用。」という。本銘のように鑛石の採取を記した例に銘文四〇六の「維鏡之舊生兮質剛堅。處于名山兮俟工人」や銘文五四二の「采取善同出丹楊」がある。

第五句の第一字を浙江修訂・五二は未讀、同・六七は「穎」、鄂州・一一は「單(丹)」とする。「單」は、大きい。『說文』二上に「單、大也。」とある。「爐冶」は、鑛石を爐で精鍊すること。『史記』天官書に引く『文耀鉤』に「水土合則成鑪冶、鑪冶成則火興、火興則土之子焯、金成消燂」とある。

第七句を浙江修訂・五二は「和□白□」、同・六七は「□日曜」、鄂州・一一は「吐□日□」とする。それぞれの字形を比較し、「吐所日翟」と釋讀する。「吐」は、いだす。陸機「演連珠五十首」(『文選』卷五十五)に「朗璞蒙垢、不能吐輝。」とある。「翟」は「曜」または「耀」の省割。

第八句の第一字を浙江修訂・五二は「昌」、同・六七は未讀、鄂州・一一は「□(容)」、同・二五〇は「合」とする。字形からみて「容」が正しい。この句は第七句と對になり、陰陽のかがやきを

あわせもつ鏡の性質をいうものである。あるいは「晉」字で「蔭」ないし「陰」の假借か。『左傳』文公十七年に「鹿死不擇音」とあり、杜預注に「晉、所蒞蔭之處。古字聲同、皆相假借。」とある。

第九句の第三字を浙江修訂・五二は未讀、同・六七と鄂州・一一一は「昔」とするが、第四字はすべて未讀である。字形からみて、「時」であろう。「昔時」は、むかし。

第一〇句は四方に四神それぞれの旗をもつ軍陣を配置したことをいう。『禮記』曲禮上に「行、前朱鳥而後玄武、左青龍而右白虎。」とあり、鄭玄注に「以此四獸爲軍陳、象天也。」という。

第一一句以下を鄂州・二五〇は「玄象□□、白帝仁者」、浙江修訂・五二は「玄象□威、白虎□□、青龍□□、會津八一記念博物館藏鏡は「玄□□□、白虎□□、□五□萬、□有五百萬」と讀まれているが、「玄龜偵威、白虎馴仁。□凡五百萬。□凡有五百萬。」であろう。「玄龜」は「玄武」に同じ。「偵」は、かたどる。『禮記』樂記に「禮樂偵天地之情」とあり、鄭玄注に「偵、猶依象也。」とある。「馴」は「訓」または「順」の假借で、したがう。『史記』五帝本紀の「能明馴德」の『索隱』に「『史記』『馴』字、徐廣皆讀曰訓。訓、順也。」とある。「五百萬」は章帝のときに皇太后が贈與した錢貨や靈帝が卿や關内侯の身分を賣った價格に等しく、後漢時代に流行した象徴的な數字かもしれない。すなわち、『後漢書』明德馬皇后紀に「太后即賜錢各五百萬。於是内外從化、被服如一、諸家惶恐」とあり、靈帝紀に「光和元年（一七八）……私令左右賣公卿、公千萬、卿五百萬」や「光和四年……賣關内侯、假金印紫綬傳世、入錢五百萬」とある。

半圓方形帯には方格に一字ずつ銘文があり、半圓方形帯のない重列式神獸鏡以外の三種はすべて同銘である。

利父宜兄。 父に利しく、兄に宜し。
仕至三公。 仕ふれば三公に至らん。

其師命長。 其の師の命は長からん。
陽部の「兄」・「長」と東部の「公」が叶韻する。第一句の「利」は、便宜。銘文四一〇の注を参照。漢鏡四期の銘文四一〇に「利貳親。宜弟兄」という類似句があるが、神獸鏡ではめずらしい。

●七四七

石人姬姬。 碩人其れ姫たり、
衣綿緞衣。 綿を衣て緞の衣。

夷侯之子、 夷侯の子、
衛侯之妻、 衛侯の妻。

東宮之妹、 東宮の妹、
邢侯之姨。 邢侯の姨。

登公惟私。 鄧公は惟れ私。
手如濡淒。 手は柔らかき美の如し。

膚如凝脂。 膚は凝りたる脂の如し。
領如狩夷。 領は狐貉の如し。

齒如會師。 齒は狐貉の如し。
纁首娥麋。 纁首娥眉。

嗒咲吟兮。 巧笑倩たり。
美目瞋兮。 美目盼たり。

石人嗷嗷。 碩人嗷嗷として、
稅于農郊。 農郊に説る。

四牡有橋。 四牡驕有り。
洙□森森。 朱幘 鑣鑣たり。

翟□以朝。
大夫宿退、
母使君勞。
河水洋洋、
北流。
君をして勞せ使むること母し。
河水は洋洋として、
北に流る。

(注)

一九七二年に武漢市の廢品中より發見された重列式神獸鏡〔段書安・一九九八・九六〕にみる。鏡はいま武漢博物館に所藏する。外區の銘文は『詩經』衛風・碩人の第四章第二句第二字までを記したものが、現行の「碩人」とは文字に異同がある。最初に報告した羅福頤(一九八〇)は、漢末の熹平石經に採用されて盛行した『魯詩』と考えたが、前漢はじめの阜陽簡『詩經』を整理した胡平生(一九八八)が



銘文 747 附圖〔段書安 1998 : 96〕

批判するように、その根據は十分ではない。本銘の釋文は羅福頤と胡平生のほか李學勤(一九八八)を参考にし、段書安の寫眞と徐鑒梅(一九八五)の銘文模寫をあわせて検討した。『詩經』に「碩人四章、章七句」とあり、その章分けにしたがう。「登公惟私」までの第一章は脂部の「妻」・「夷」・「私」と之部の「姬」と微部の「衣」が叶韻する。「美目顰兮」までの第二章は脂部の「淒」・「脂」・「夷」・「師」・「麋」と之部の「哢」が叶韻する。「母使君勞」までの第三章は「嗷」・「郊」・「橋」・「森」・「朝」・「勞」が宵部で押韻する。第一句を『詩經』は「碩人其碩」とする。「石」は「碩」の省字または假借。馬王堆帛書『六十四卦』剝の「尚九、石果不食」を今本『易經』剝は「碩果不食」とし、左思『魏都賦』(『文選』卷六)の「碩畫精通」に李善注は「漢書」楊雄上疏曰、石畫之臣甚衆。」とある。鄭箋は「碩、大也。」という。ただし、『詩經』の「碩人」はほかに邶風・簡兮や衛風・考槃にもみえ、巫女と解釋されているが、本銘をもとに「石人」と讀む説もある(荒木・一九八二)。「其碩」を鄭箋は「言莊姜儀表長麗俊好、碩頤然。」とし、『玉篇』頁部はこの句を引いて「碩人頤頤」とするため、清・臧琳『經義雜記』は本來の『詩經』は「頤」字の重文とした。李學勤は本銘の「姬」が重文であることから、臧説を支持している。李學勤はまた「頤」は微部で「姬」は之部だが、『詩經』で之部の「其」が「頤」に置換したように、後漢後期には微部と之部が通轉したとする。「頤」の意味を、毛傳は「長貌」とするが、『說文』九上は「頭佳貌」とし、「姬」と同義。第二句を『詩經』は「衣錦褰衣」とする。本銘の第二字を羅福頤は糸偏の文字とし、李學勤は「綿」と讀んで「錦」の誤字とする。第三字を羅福頤は「緞」と讀み、李學勤は「頤」にしたがう字で『詩經』の「褰」の假借とする。字形から、羅説にしたがう。「緞」

は、練絹で織った織物、どんす。『説文』五下「緞、緞或从糸。」の段注に「今俗以爲錦繡段之段。」とあり、明・宋應星『天工開物』乃服に「先染絲而後織者曰緞。」とある。『詩經』の「褻衣」も錦衣の上に羽織るもの。

第三・第四句を『詩經』は「齊侯之子、衛侯之妻」とする。第三句第一字の「夷」を羅福頤は「齊」字の別體とするが、胡平生は根據なしと批判する。李學勤は「夷」と「齊」はともに脂部に屬し、第二章第二句を本銘が「夷」、『詩經』が「齊」とするのと同じとして假借とみる。『禮記』曲禮上の「醜夷不爭」の鄭玄注に「夷、猶齊也。」とあるから、「夷」は「齊」や「齊」など「齊」につくる文字と通じたのであろう。

第五句を『詩經』も「東宮之妹」とし、同文である。

第六句を『詩經』は「邢侯之姨」とする。第一字を羅福頤は「邢」と釋し、徐鑒梅の模本は「刑」につくる。胡平生は『説文』六下により「邢」と「刑」は別の二字とする。すなわち、「邢、鄭地有邢亭。从邑井聲。」、「邢、周公子所封。地近河内懷。从邑井聲。」とある。李學勤は雲夢秦簡『封診式』奪首に「刑丘」を「邢丘」とすることを傍證に「邢」とした。李學勤はまた第四字の「夷」は「姨」の假借とする。

第七句を『詩經』は「譚公維私」とし、第一章の末句とする。羅福頤は本銘の「登公」を「鄧公」とする。「鄧公」は河南省南陽を據點とする周の諸侯で、『左傳』莊公十六年は楚によって滅ぼされたと傳える。「譚公」は山東省平陵縣（いま濟南市の東）を本據とする周の諸侯で、『左傳』莊公十年は齊によって滅ぼされたという。李學勤は「鄧」では齊から遠すぎるとして、蒸部の「登」と侵部の「譚」とは後漢代に韻尾の（-m）と（-ng）とが通轉したと考える。

胡平生も『詩經』秦風・小戎に蒸・侵合韻があることから、「登」は「譚」の假借とする。李學勤はまた本銘の「惟」は『詩經』の「維」の假借であるという。

第二章第一句を『詩經』は「手如柔荑」とし、本銘の第一・第二字は同じ。第三字を羅福頤はさんずい偏の字とし、李學勤は「濡」とした。胡平生も「濡」と隸定し、上古音で「濡」は日母侯部、「柔」は日母幽部で假借字とした。胡平生はまた第四字の「淒」は清母脂部、「萸」は喻母脂部で假借字とした。「萸」は茅の新芽。

第二句を『詩經』は「膚如凝脂」とし、本銘は第三字を「凝」とする。胡平生は阜陽簡では「疑」とすることから、「凝」と「凝」は「疑」聲で通じたとし、「凝」字は『説文』にはないが、『廣韻』では「膩」に同じという。

第三句は『詩經』に「領如蝤蛸」とある。本銘の第一字を李學勤は「領」と讀み、馬王堆帛書『脈書』などでは「領」と「領」とは互換したという。毛傳は「領、頸也。」とする。第三字を羅福頤は未讀だが、李學勤は「狩」と讀んで「蝤」と通じたとする。胡平生は阜陽簡に「蝤」とあること、『釋文』に「蝤、徐音曹。」、『淮南子』汜論訓の高誘注に引く『詩經』に「蝤蛸」、蔡邕『青衣賦』に「蝤蛸」とあり、王先謙説では『魯詩』に「蝤蛸」とあることから、「蝤」・「蝤」・「蝤」は假借字とする。毛傳は「蝤蛸、蝸蟲也。」とし、孔穎達疏に「以在木中、白而長、故以比頸。」という。白くて長い木食い虫である。

第四句を『詩經』は「齒如瓠犀」とし、羅福頤は「齒如會師」と釋す。李學勤は第三字の「會」は祭部、「瓠」は魚部で通假しがたぐ、「會」は「壺」の誤釋で「瓠」の假借と考える。しかし、胡平生は阜陽簡に「會」とあることから、意義未明とする。第四字の「師」を李學勤は「犀」の假借とする。これにたいして胡平生は、

阜陽簡に「誨」とあること、『爾雅』釋草の郭注に引く『詩經』は「棲」につくり、孔穎達疏に「棲與犀、字異音同。」とあることから、「棲」と「犀」は通じるが、「師」や「誨」とは假借せず、意義未明とする。毛傳は「狐犀、狐瓣。」とし、訓はそれにしたがう。

第五句を『詩經』は「螭首蛾眉」とする。第一字を羅福頤は未讀だが、李學勤は「隕」と讀み「螭」の假借とする。毛傳は「螭首、類廣而方。」とし、額が廣くて美しいことをあらわすと解釋する。これにたいして胡平生は阜陽簡に「湔首」とあることをふまえて「續」と釋し、謝朓「晚登三山還望京邑」(『文選』卷二十七)に「誰能續不變」とあり、李善注に「毛萇『詩傳』曰、鬢、黑髮也。續與鬢同。」とあること、『左傳』昭公二十八年の「生女黥黑」の杜注に「美髮爲黥」とあり、『正義』に「黥即鬢也。……鬢者、髮多長而黑美之貌也。」とあることから、長い黒髪が美しいさまとする。第三・第四字を羅福頤は「□麋」と讀み、李學勤と胡平生は「娥眉」と釋す。「麋」は「眉」の假借。『楚辭』離騷に「衆女嫉余之娥眉兮」とあり、王逸注に「娥眉、好貌。」という。

第六句を『詩經』は「巧笑倩兮」とし、本銘を羅福頤と李學勤は「啍咲啍兮」と釋す。李學勤は「考」は「巧」聲にしたがい、「巧」の假借とする。「笑」字は「犬」にしたがうのか、「夭」にしたがうのかで意見が分かれるが、銘文の第二字の形は「夭」にしたがうようであり、「咲」ではなく、『漢書』史丹傳の「於是上嘿然而咲」の顏師古注に「咲、古笑字。」とある「咲」字であること、李學勤はいう。李學勤はまた、「倩」は「青」聲にしたがうが、同じ「青」聲にしたがう「猜」は之部で「采」と同音になるから、詩中で押韻する文部の「倩」は「猜」と讀み、鏡銘では「啍」と書かれたと考える。ただし、郭錫良(一九八六)にしたがえば「青」・「倩」・「猜」

はすべて耕部であるが、「碩人」の押韻について王力(一九八〇)は「倩 tsyen」と第七句の「盼 phean」とが眞文合韻という。なお、毛傳は「倩、好口輔。」と解釋し、陸德明『毛詩音義』上は「韓詩」を引いて「蒼白色」という。

第七句を『詩經』は「美目盼兮」とし、その第三字を校勘記は「唐石經『盼』作『盼』、毛本同。案『盼』字是也。」とする。本銘では羅福頤・李學勤ともにその字を「瞋」と釋している。羅福頤は『說文』四上によつて「瞋字注恨張目也、盼字注恨視也、義相近」というが、『說文』には「盼、白黑分也。」とあり、「恨視也」とあるのは「盼」字である。これにたいして李學勤は「瞋」と「盼」はそれぞれ眞部と文部に屬して音が近く通假したとする。毛傳は「盼、白黑分。」とし、陸德明『毛詩音義』上は「盼兮」としたうえで「韓詩」云、黑色也。『字林』云、美目也。」という。また、鄭箋は「此章說莊姜容貌之美、所宜親幸。」と説く。

第三章第一句を『詩經』は「碩人敖敖」とする。本銘の第一字は第一章第一句と同じように「石」につくる。羅福頤は第三・第四字を「朝朝」とするが、李學勤は「嗷嗷」とし、「敖敖」の假借とする。字形からみて李説が妥當である。毛傳は「敖敖、長貌。」とあり、鄭箋は「敖敖猶頎頎也。」という。

第二句を『詩經』は「說于農郊」とする。本銘の第一字を李學勤は假借字の「稅」とし、『釋文』にも「說、本或作稅」とある。毛傳に「農郊、近郊。」とあり、鄭箋は「說、當作稅。『禮』・『春秋』之稅、讀皆宜同。衣服曰稅、今俗語然。此言莊姜始來、更正衣服于衛近郊。」という。

第三句を『詩經』は「四牡有驕」とし、第四字のみ假借字の「橋」とする。毛傳は「驕、壯貌。」という。

第四句を『詩經』は「朱幘鑣鑣」とする。本銘を羅福頤は「帶□耕耕」と釋し、李學勤は「洙□森森」と讀んで「洙」は「朱」の、「森」は「鑣」の假借とする。李說にしたがう。毛傳は「幘、飾也。人君以朱纁鑣扇汗、且以爲飾。鑣鑣、盛貌。」という。

第五句を『詩經』は「翟芼以朝」とする。本銘を羅福頤は「□□朝」と釋し、李學勤は「翟□以朝」と讀む。毛傳は「翟、翟車也。夫人以翟羽飾車。芼、蔽也。」といい、鄭箋は「此又言莊姜自近郊既正衣服、乘是車馬以入君之朝、皆用嫡夫人之正禮。」という。

第六句を『詩經』は「大夫夙退」とする。本銘の第三・第四句を羅福頤は「宿良」と釋し、李學勤は「宿退」と讀む。「宿」の古文が「夙」であり、第四字は「退」である。

第七句を『詩經』は「無使君勞」とする。第一字のみ異なり、本銘は「ム」と「母」にしたがい、李學勤は「母」と讀む。以上三句を毛傳は「大夫未退、君聽朝於路寢、夫人聽內事於正寢。大夫退、然後罷。」と解釋する。

第四章第一句は『詩經』と同じ。毛傳は「洋洋、盛大也。」といい、鄭箋は「此章言齊地廣饒」という。

第二句は二字しかないが、『詩經』と同じである。

本銘の典據について、羅福頤は現行本の『毛詩』と文字に異同があることから、漢代に傳わった三家詩のうち漢末に盛行した『魯詩』と考えた。『隋書』經籍志によれば、『齊詩』は魏代に、『魯詩』は西晉代に失われ、『韓詩』は殘存するも傳がないことから、『魯詩』が本銘の典據になったことは否定できないとしても、『毛詩』と三家詩の區別は『詩』の本文ではなく訓釋にあり、本銘の假借字などは『詩』を傳える學統の傳訛の可能性が高いと李學勤はいう。胡平生の整理した前漢はじめの阜陽簡にも『毛詩』と異なる假借字

があり、鏡銘はふつう俗字や假借字を多く用いていることからみれば、漢代にはさまざまな用字の『詩』が通行し、本銘は漢末の民間に流布していた『詩』を書き記したものであることは確かであろう。

四 漢鏡二期 補遺

●二五二

伏念所驩旆無窮時。

歡ぶ所を念ふに伏し、窮まる時無し。

長母相忘旆久相思。

長く相ひ忘るる母れ、久しく相ひ思ふ。

(注)

鄭州市の未來銅鏡藝術博物館藏の草葉紋鏡にみる〔李學勤・二〇〇八〕。鈕座の方格に時計回りの銘文があり、釋文は李學勤にしたがう。『時』と『思』は之部で押韻する。四言句と三言句を「旆」で連綴する詩形である。『尚書』秦誓の「斷斷旆」を引く『禮記』大學や『詩經』伐檀の「河水清且漣旆」を刻む漢石經がいずれも「旆」を「兮」と記していることから、清・王引之『經傳釋詞』は「旆」は「兮」と通じるとし、李學勤は「旆」の讀みは「旆」で「兮」と通じるとした。いっぽう、張世超(二〇〇九)は、郭沫若が「兮」も「可」も「可」聲で古音は近いとしたこと、今本『老子』の「兮」を郭店楚簡では「可」、馬王堆帛書では「呵」とし、上博楚簡や阜陽漢簡の『楚辭』では「兮」を「可」とし、今本『毛詩』の「兮」を阜陽漢簡『詩經』では「旆」とすることから、三言句や四言句を連綴する助辭を戰國楚では「可」、漢初では「呵」や「旆」など「可」にしたがう字、武帝代以後に「兮」字に統一されたと結論づけた。したがって、本銘の「旆」は「兮」に通じる助辭であり、阜陽漢簡『詩經』の「旆」など漢初の用例に近いといえよう。

第一句の「伏」は「服」に通じ、「したかう」の意。『荀子』性惡に「伏術爲學」とあり、唐・楊倞注に「服膺於術」とある。また、『楚辭』離騷に「伏清白以死直兮、固前聖之所厚」という用例がある。「驪」は「歡」の假借。銘文二二五の注を参照。

第二句の「長毋相忘」と「久相思」は漢鏡二期の常用句。

●二五三

忽以覺、
寤不得。
寘自欺、
私大息。

忽ち以て覺ゆ、
得ざるを悟る。
但しく自ら欺く、
私かに大息せり。

(注)

鄭州市の未來銅鏡藝術博物館藏の星雲紋鏡にみる〔李學勤・二〇〇八〕。星雲紋鏡の銘文はめずらしく、鈕座の方格各邊に三字一句ずつ反時計回りにめぐらせる。釋文は李學勤にしたがう。〔得〕と〔息〕が職部で押韻する。

第一句の「忽」は銘文二〇五に「心忽穆而願忠」という例がある。第二句の「寤」を李學勤は「悟」の假借とする。『史記』鄒陽列傳に「是以聖王覺寤、捐子之心」とあり、『文選』卷三十九所收の鄒陽「於獄中上書自明」はそれを「覺悟」につくる。『說文』八下に「覺、悟也。」とあり、「覺」と「悟」は同義である。

第三句の「寘」を李學勤は「但」の假借とし、「いたづらに」「むなしく」の意とする。『漢書』五行志下に「晝日食、則妾不見。」とあり、顏師古注に「晝、讀曰但。」とある。その訓は『漢書』食貨志下に「民欲祭祀喪紀、而無用者、錢府以所入工商之貢、但賒之。」とあり、顏師古注に「但、空也、徒也。」というのによる。

參考文獻

出典略號

歐米……梅原末治 一九三一『歐米に於ける支那古鏡』、刀江書院
開明堂……西村俊範 一九九四『古鏡コレクション開明堂英華』、村上開明堂

鄂州……鄂州市博物館 二〇〇二『鄂州銅鏡』、中國文學出版社

鄂城……湖北省博物館・鄂州市博物館編 一九八六『鄂城漢・三國六朝銅鏡』、文物出版社

文物出版社

巖窟……梁上椿 一九四〇～一九四二『巖窟藏鏡』

奇觚……劉心源 一九〇二『奇觚室吉金文述』

京大目錄……京都大學文學部博物館 一九八九『椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡』、奈良縣立橿原考古學研究所附屬博物館・京都大學總合博物館

二〇〇〇『大古墳展 ヤマト王權と古墳の鏡』に目錄増補

金索……馮雲鵬・馮雲鵬 一八二一『金石索』

久保惣……中野徹 一九八五『和泉市久保惣記念美術館 藏鏡圖録』、和泉市久保惣記念美術館

車崎……車崎正彦 二〇〇二『日本出土鏡(圖版掲載) 銘文一覽』『考古資

料大觀 第五卷、彌生・古墳時代鏡』、小學館

廣西……廣西壯族自治區博物館編 二〇〇四『廣西銅鏡』、文物出版社

故宮藏鏡……郭玉海 一九九六『故宮藏鏡』、紫禁城出版社

古鏡……羅振玉 一九一六『古鏡圖録』

五島……五島美術館學藝部編 一九九二『前漢から元時代の紀年鏡』展覽會圖録No.一三、五島美術館

湖南……湖南省博物館 一九六〇『湖南出土銅鏡圖録』、文物出版社

三槐堂……王綱懷 二〇〇四『三槐堂藏鏡』、文物出版社

山左……畢沅・阮元 一七九七『山左金石志』卷五

上海……陳佩芬 一九八七『上海博物館藏青銅鏡』、上海書畫出版社

聚英……後藤守一 一九四二『古鏡聚英』上篇、大塚巧藝社

- 紹興……梅原末治 一九三九『紹興古鏡聚英』、桑名文星堂
 小校……劉體智 一九三五『小校經閣金文拓本』
 圖典……孔祥星 一九九二『中國銅鏡圖典』、文物出版社
 精華……梅原末治 一九三三『歐米蒐儲支那古銅精華』鏡鑑部、山中商會
 浙江……王士倫 一九八七『浙江出土銅鏡』、文物出版社
 浙江修訂……王士倫 二〇〇六（王牧修訂）『浙江出土銅鏡』修訂本、文物出版社
 出版部
 泉屋……廣川守 二〇〇四『泉屋博古』鏡鑑編、泉屋博古館
 千鏡堂……陳鳳九 二〇〇七『丹陽銅鏡青瓷博物館 千鏡堂』、文物出版社
 センチュリー……センチュリー文化財團 一九九二『鏡——その神秘と美』
 綜鑑……梅原末治・藤田亮策 一九五九『朝鮮古文化綜鑑』第三卷、養德社
 尊古齋……黃濬 一九九〇『尊古齋古鏡集景』、上海古籍出版社
 陳介祺……辛冠潔 二〇〇〇『陳介祺藏鏡』、文物出版社
 桃陰……梅原末治 一九二五『桃陰廬和漢古鑑圖錄』、關信太郎
 天理……天理大學附屬天理參考館編 一九九〇『古代中國の鏡』、天理大學出版部
 出版部
 藤堂……藤堂明保 一九六五『漢字語源辭典』、學燈社
 富岡……富岡謙藏 一九二〇『古鏡の研究』、丸善株式會社
 永田……永田英正編 一九九四『漢代石刻集成』同朋舍
 簠齋……陳介祺 一九二五『簠齋藏鏡』
 容續……容庚 一九三五『金文續編』、上海商務印書館
 洛陽……洛陽博物館 一九八八『洛陽出土銅鏡』、文物出版社
 樂浪郡……朝鮮總督府 一九二七『樂浪郡時代の遺蹟』古蹟調査特別報告第四冊
 六安……安徽省文物考古研究所・六安市文物局編 二〇〇八『六安出土銅鏡』、文物出版社
 K……Karlgen, Bernhard 1934 Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of Museum of Far Eastern Antiquities*, No. 6
- 日文・中文
 荒木日呂子 一九八一『碩人の宗教的性格と衛風「碩人」篇の解釋』『東方學』第六二輯
 今井育雄・今井佐江子 一九八八『中國の古鏡』藥照寺所藏品圖錄一、藥照寺
 上野祥史 二〇〇〇『神獸鏡の作鏡系譜とその盛衰』『史林』第八三卷四號
 鷗島三壽 一九九一『龍鈕を持つ鏡——大田南二號墳出土鏡を中心に』『京都府埋藏文化財論集』第二集
 都府埋藏文化財論集
 梅原末治 一九二五『再び北部朝鮮發見の古鏡』『東洋學報』第一五卷第二號
 梅原末治 一九三三『歐米蒐儲支那古銅精華』鏡鑑部、山中商會
 梅原末治・藤田亮策 一九五九『朝鮮古文化綜鑑』第三卷、養德社
 王士倫 一九五七『浙江出土銅鏡選集』、中國古典藝術出版社
 王仲殊 一九八五『吳縣、山陰和武昌——從銘文看三國時代吳的銅鏡產地』
 『考古』第一期
 王仲殊 一九八六『青羊』爲吳郡鏡工考——再論東漢、三國、西晉時期吳郡所產的銅鏡『考古』第七期
 王趁意 二〇〇二『中國東漢龍虎交螭鏡（上）』、中州古籍出版社
 王力 一九八〇『詩經韻讀』、上海古籍出版社
 岡林孝作・水野敏典編 二〇〇八『ホケノ山古墳の研究』橿原考古學研究所研究成果第一〇冊
 岡村秀典 一九九三『後漢鏡の編年』『國立歷史民俗博物館研究報告』第五集
 岡村秀典 二〇一〇『漢鏡五期における淮派の成立』『東方學報』京都第八五冊
 郭錫良 一九八六『漢字古音手冊』、北京大學出版社
 笠野毅 一九八〇『中國古鏡の内包する規範』『日本民族文化とその起源』考古篇、新日本教育圖書株式會社
 笠野毅 一九八三『清明なる鏡と天——中國古鏡が規範を内包する根據』『考古學の新視角』、雄山閣出版

- 笠野毅 一九九三 a 「中國古鏡銘假借字一覽表（稿）」『國立歷史民俗博物館研究報告』第五五集
- 笠野毅 一九九三 b 「舶載鏡論」『古墳時代の研究』第一三卷、雄山閣出版
- 川勝義雄 一九八二「六朝貴族制社會の研究」、岩波書店
- 川西安幸 二〇〇四「同型鏡とワカタケル 古墳時代國家論の再構築」、同成社
- 廣東省博物館 一九六一「廣東韶關市郊古墓發掘報告」『考古』第八期
- 韓保全・程林泉 一九九一「西安北郊棗園漢墓發掘簡報」『考古與文物』第四期
- 車崎正彦 二〇〇一「新發見の「青龍三年」銘方格規矩四神鏡と魏晉のいわゆる方格規矩鏡」『考古學雜誌』第八六卷第二號
- 車崎正彦 二〇〇五「袁氏作銘帶同向式二神二獸鏡」『古代』第一一八號、早稻田大學考古學會
- 車崎正彦 二〇〇七「鏡」『菊水町史』江田船山古墳編、和水町
- 胡平生 一九八八「阜陽漢簡《詩經》異文初探」『阜陽漢簡詩經研究』、上海古籍出版社
- 孝感地區博物館 一九九〇「孝感地區博物館藏銅鏡簡報」『江漢考古』第二期
- 江西省博物館 一九七八「江西南昌東漢、東吳墓」『考古』第三期
- 廣西壯族自治區文物工作隊・貴港市文物管理所 二〇〇六「廣西貴港深釘嶺漢墓發掘報告」『考古學報』第一期
- 神戶市教育委員會 二〇〇四「西求女塚古墳發掘調查報告書」
- 湖南省博物館 一九八一 a 「湖南常德東漢墓」『考古學集刊』第一集
- 湖南省博物館 一九八一 b 「湖南衡陽縣道子坪東漢墓發掘簡報」『文物』第二期
- 湖南省文物考古研究所・湘西自治州文物工作隊・大庸市文物管理所 一九九四「湖南大庸東漢磚室墓」『考古』第二期
- 駒井和愛 一九五三「中國古鏡の研究」、岩波書店
- 朱振文 一九九七「安徽全椒縣卜集東吳磚室墓」『考古』第五期
- 周世榮 一九八六「湖南出土漢代銅鏡文字研究」『古文字研究』第一四輯、中華書局
- 徐鑒梅 一九八五「東漢詩經銘文鏡」『江漢考古』第四期
- 徐萃芳 一九八四「三國兩晉南北朝的銅鏡」『考古』第六期
- 章丘市博物館 二〇〇二「章丘市博物館收藏的部分古代銅鏡」『文物』第二期
- 嵯縣文管會 一九九一「浙江嵯縣大塘嶺東吳墓」『考古』第三期
- 瀋陽市文物考古研究所 二〇〇六「瀋陽市小北街金代墓發掘簡報」『考古』第一期
- 末永雅雄・島田曉・森浩一 一九五四「和泉黃金塚古墳」日本考古學報告第五冊、綜藝社
- 鈴木博司 一九七一「守屋孝藏蒐集 漢鏡と隋唐鏡圖錄」、京都國立博物館
- 曹菁菁・盧芳玉編 二〇〇八「國家圖書館藏陳介祺藏古拓本選編 銅鏡卷」、浙江古籍出版社
- 高槻市教育委員會 二〇〇〇「安滿宮山古墳」高槻市文化財調查報告書第二冊
- 伊達宗泰・小島俊次・森浩一 一九六三「大和天神山古墳」奈良縣史跡名勝天然記念物調查報告第二二二冊
- 伊達宗泰 一九六八「古市方形墳」『奈良市史』考古編、奈良市
- 段書安 一九九八「中國青銅器全集第一六卷 銅鏡」、文物出版社
- 張振球 一九八七「醴陵發現東漢三國銅鏡」『湖南考古輯刊』第四輯
- 趙世綱 一九六〇「談河南出土的幾面新莽銅鏡」『文物』第七期
- 陳直 一九六三「四種銅鏡圖錄釋文的校訂」『文物』第二期
- 程紅 一九九八「合肥出土、徵集的部分古代銅鏡」『文物』第一〇期
- 鄭州大學歷史學院考古系・河南省文物管理局南水北調文物保護辦公室 二〇〇九「河南新鄉市金燈寺漢墓發掘簡報」『華夏考古』第一期
- 唐金裕 一九八〇「漢初平四年王氏朱書陶瓶」『文物』第一期

森下章司 二〇〇四「古鏡の拓本資料」『古文化談叢』第五一集
森下章司 二〇〇七「銅鏡生産の變容と交流」『考古學研究』第五四卷第二號
山本清 一九六七「造山第三號墳調査報告」、島根縣教育委員會
熊建華 二〇〇一「帆船紋呂氏鏡小考」『考古』第一〇期
楊桂榮 一九九二「館藏銅鏡選輯（二）」『中國歷史博物館館刊』一八・一九
楊桂榮 一九九三a「館藏銅鏡選輯（三）」『中國歷史博物館館刊』總第二〇期
楊桂榮 一九九三b「館藏銅鏡選輯（四）」『中國歷史博物館館刊』第二期
楊金平 二〇一〇「徐州地區出土的三角緣神獸鏡」『文博』第二期
羅福頤 一九八〇「漢魯詩鏡考釋」『文物』第六期
李學勤 一九八八「《碩人》銘神獸鏡」『文史』第三〇輯
李新城 二〇〇六「東漢銅鏡銘文整理與研究」華東師範大學研究生博士學位
論文
劉紹明 一九九六「《天公行出》鏡」『中國文物報』五月二六日
劉心健・劉自強 一九八三「山東蒼山柞城遺址出土東漢銅器」『文物』第一
〇期
林小娟 二〇〇八「博山爐考」『四川文物』第三期
林梅村（川上陽介・申英蘭譯）二〇〇五「靈獸・天祿と辟邪の旅」『流沙の
記憶をさぐる シルクロードと中國古代文明』NHK出版
歐文
Dewar, Susan ed. 1994 *Bronze Mirrors from Ancient China*, Donald H.
Graham Jr. *Collection*, Hong Kong
Hansford, S. Howard 1957 *The Seligman Collection of Oriental Art*, Vol. 1,
The Arts Council of Great Britain
Hallwylska Museet 1933 *Hallwylska Samlingen*, Grupp XLIX. Östasiatiska
Säbbronsen